
首都高 ~ Limit Battles...

S.N.S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首都高〜Limit Battles・・・

【Nコード】

N36740

【作者名】

S・N・S

【あらすじ】

数ヶ月前に首都高に現れ、どんなマシンが相手だろうと、そのテックと愛車、S15シルビアで打ち勝ってきた若い走り屋の男、川内祐馬。

しかし突如現れた一台のマシンに軽々と初黒星をつけられる。

奴の名は「迅帝」・・・祐馬も聞いたことのある、首都高の走り屋なら誰もが知るその人物にやられたのだ。

祐馬はそれを聞いて再戦の闘志を燃やし、迅帝の情報を集めることとなる。

。そして後に祐馬は、熾烈なバトルを用意されていることを知る・・・

Prologue (前書き)

よく言われますが、実際の公道での暴走行為を始めとする危険行為はやめましょう。流石にこれ読んで影響される人はそういないと思いますが・・・。

また本当は全部一纏めにしてありますが、投稿不可なので連載として投稿しています。

Prologue

- - - 20XX年 首都高速道路

高速道路を疾走する幾多のライト・・・

鮮やかにドリフトを決めコーナーを抜ける者、300km/hオーバーで湾岸線を駆け抜ける者・・・

己の精神を削りあい、ノックアウトさせていく・・・
彼らは何を求め、走り続けるか・・・

新環状左回りにて・・・

そこには一台、シルバーのR35GT-Rがいた。特に外見も中身もいじっていないような感じだが、どこことなく走り屋のような雰囲気がある。ドライバーがその気だからだろうか。

男「(さあて、走り屋っつーもんを味わってみるぜ。ある程度サーキットでは鍛えてるし、このGT-Rだって何もいじってなかったって相当速い。これで負けはしないぜ・・・っとお、早速来たな・・・

」
GT-Rの後ろには、バトル申し込みのサインであるパッシングをしているマシンがいた。バックミラーから見ると、C-WESTのエアロ、そしてカーボンボンネットを武装したS15シルビアだということが見て取れた。

男「(S15か・・・結構マジな外見ではあるな・・・だが、中身はどうなのか・・・よし、最初の一戦だぜ。)

申し込みを受け入れるサインであるハザードランプを点滅させるGT-R。5秒後には、バトルがスタートした。

男「(・・・っ!? 抜かされてたまるかっ・・・)

シルビアはスタートダッシュでGT-Rに勝り、そのまま抜こうとする。男は咄嗟の判断でブロックする。

男「(加速で負けてる・・・!?!? ちい、この時点でやばくなってく

るとは・・・!）」

半端ないプレッシャーがGT-Rを襲う。

シルビアのドライバー（以下シ）「（とりあえず加速では勝ったか・・・大していじつちやいないみたいだな。）」

男「（コーナーで離せるか・・・!?!）」

最新鋭マシンさながらに堅実なグリップで走り抜けるGT-R。対してシルビアは、軽くドリフトして抜ける。

男「（離れない!?ちくしょう、どうすれば・・・!?!）」

シ「（まだまだ加速していけるだろ、そこ・・・こりゃあまた、長引かねえバトルになりそうだな。）」

次のコーナーが迫る・・・

男「（・・・なっ、なんでそこからインに入れる・・・!?!）」

僅かなインに潜り込むシルビア。コーナーを抜けた頃には並ばれた。

男「（くそっ・・・だがな、次はもつと低速なコーナー、それにこっちはイン側だ。このまま楽に抜かれは・・・なにい!?!）」

シ「（ここいらでおさらばといくぜ。）」

箱崎JCTを過ぎた直後のコーナー、ブレーキング勝負でGT-Rに競り勝ったシルビアはそのまま華麗にドリフトを決め、そこにいた一般車をパスしながらコーナーを抜けた。GT-Rも何とかついていこうとするが・・・

男「（ちっ、一般車・・・!）」

少々一般車の対処に手こずってしまっ。

そうして一般車をかわした頃には・・・シルビアは次のコーナーに進入していた。

男「（なんなんだ、あのシルビア・・・!?!）」

男の初陣は黒星となったのである。

シ「（もうバックミラーからは消えたか・・・よし、勝利つと。思ったとおりの展開だったな。これで今日は4連勝だぜ。それにしても何であるGT-Rに挑んだんだろうか・・・なんとなく走り屋的な

ものを感じはしたけどな・・・」

彼は「川内祐馬^{かわうちゆうま}」・・・800馬力越えのS15に乗り、首都高を無敗で走り続ける「一瞬で吹き去る銀の風」・・・

首都高〽Limit Battles・・・

Prologue (後書き)

次から第一部です。・・・何でS15なのかは聞かないで下さい、
自分でも何故このマシンにしたのか・・・。

若き伝説を探して

その数分後、湾岸線での事である。

川「（・・・おお、またバトルか・・・なんじゃこのマシン・・・？すつげえエアロつけてるな・・・まあとにかく、受けて立つぜ。）

「すぐさまバトルはスタート。

川「（・・・っ！？一気に抜かれた！？すげえ加速だ・・・！）」
その瞬間、祐馬は「壹撃離脱」の文字が目に入った。

川「（あれR34か・・・！？あのフルエアロ、GT選手権のやつじやねえのか！？）」

そうこうしてるうちに、段々と離される。

川「（畜生・・・！こんなに引き離されるなんて・・・！）」

大黒ふ頭、バトルは終わった。あっさりと敗れてしまった祐馬・・・
・首都高を攻め始めてから1ヶ月・・・初黒星である。

川「（こんなあっさりと・・・何なんだよ、あいつ・・・！？）」

次の日、とある整備場にて・・・。

整備場は走り屋の溜まり場としても機能する。走り屋は自分の家に整備場を持つ者もいるが、多くは近場の整備場を利用する。

その際に別の走り屋と出くわす事も少なくないので、情報交換も出来るという場所である。

とはいえ、整備場を有する程いじる事を毎日するわけではないので、必ず話し相手がいるとは期待できないが・・・。

祐馬はこの整備場を利用しているが、ここを利用するのは祐馬含め3人のみである。

川「（・・・昨日のあいつ・・・一体・・・）」

「よう、祐馬。」

川「どつ、どうも、石田さん……」

この人は「石田陽介^{いしだひょうすけ}」。「伝説の作業員」と呼ばれていて、チーム「TOP LEVEL」の2代目リーダーを務めている。

一応チームの整備場を使っているが、何故か時々閉まってる場合があるらしく、その際にここを利用する。

石「ん・何だなんだ？なんか気分落としてるな。」

川「……昨日……負けました……」

石「!?!?……祐馬が負けた……」

川「湾岸線で、なんかGT500のR34っぽいのとバトルしたんですが、加速で大分差あつけられて……」

石「R34……そのマシン、側面に何か書いてなかったか？」

川「『ギ撃離脱』とか書いてありました……」

石「……なるほどな……」

川「えっ……?」

「おつ、やつぱは祐馬はもう来てたか。」

石「おつ、よう。大輔。」

やってきたのは「厚井大輔^{あついだいすけ}」。C1を根城とするロータリーオンリーのチーム「TWISTER」のメンバーで、祐馬と同じくこの

整備場でセッティングをしている。

厚「どうしたんだ祐馬？なんか落ち込んでるっぽいけど。」

石「どうやら、負けたりしないんだ。」

厚「なっ!?!?……祐馬が負けただと……そりゃあいきなり大二ユースだな……」

石「それで、祐馬から相手マシン聞いたんだが……相手が誰か分かかった。」

川「えっ!?!?」

石「それはな……」

迅 帝

川「迅帝!?!?」

石「お前も聞いているだろ。二度敗れはしたものの、今も首都高の伝

説として名を知らしめている男・・・」

迅帝・・・かつて突然首都高に現れ、一晩にしていきなり首都高の頂点に君臨。サーティーンデビルズ十三鬼将なる軍団を結成し、それを率いる男・・・二度敗れはしたが、その後迅帝を負かしたドライバーは両者共に消えたため、実質的に首都高最速の座を維持している。

川「あのGT-Rが迅帝・・・!?!」

石「GTマシンみてえなエアロをつけた、まるでカルソニックのよくなマシンに、ギ撃離脱と側面に書かれてたんだろ? だったら間違いないさ。」

川「・・・まさか・・・あいつが・・・」

厚「信じられねえかもしれねえけど、マジでそいつは迅帝だな。間違いない。」

川「・・・」

石「・・・負けるのも無理ねえかもな・・・」

川「・・・いや・・・俺、腕磨いて、マシンももつと強化して、もう一度あいつに挑んでみたい。」

厚「おっ、むしろ闘争本能が働いたか。」

石「つつても・・・結構あっさり負けちまったんだろ? 再戦するとなると、相当期間いると思うけどな・・・」

川「でも・・・俺はとにかく、もう一度あいつに会ってみたい・・・今はまだそんな心境だけで動いてる感じ・・・だな。」

石「なるほど・・・」

川「これからしばらくは、迅帝探しをしてみますかな・・・」

厚「って言っても、昨日現れたら今日も現れるって奴じゃないしな・・・時間かかるかもしれないが、俺らも協力できる部分は協力するからよ。」

川「サンキュー。」

そして今晚から、祐馬は迅帝を追い求める事となった・・・。

川「よし・・・(負けたとは言えども、ここで止まるわけにはいか

ないな・・・あいつを見つけたら、またバトルもするかもしれない・・・」
湾岸線下り、昨日迅帝とのバトルが始まった東扇島からスタートする・・・

首都高速は走り屋にとって大きく5つのエリアに分けられる。

1つ目は都心環状線全線、通称「C1」。比較的コーナーは多く、また初心者がよく集まるエリアである。

2つ目は、江戸橋JCT～箱崎JCTの向島線、深川線全線、辰巳JCT～有明JCTの湾岸線下り、台場線全線、芝浦JCT～浜崎橋JCTの羽田線、そして浜崎橋JCT～江戸橋JCTのC1を結んだエリア、通称「新環状」。

向島線、深川線、台場線はいくつかコーナーを要するが、案外高速で走れる区間はかなりあるエリア。C1が隣にあるためか、ここでも初心者が多い。

3つ目は、羽田線全線と羽田線から生麦JCTの神奈川1号横羽線、通称というかそのままだが「横羽線」。

羽田線はそれなりにテクニカル。神奈川1号横羽線もコーナーはいくつかあるが羽田線よりは高速で走れるのが特徴。レベルに定評のあるチームが多く集まる。

4つ目は首都高の走り屋にとってのスピードの聖地、湾岸線。辰巳JCT～本牧JCTを主に走っている。

毎晩300km/hオーバーの白熱バトルが繰り広げられる。マシンの加速・最高性能、そしてハイスピード状態で精神を保てないと、湾岸線でバトルではまず勝ち目が無い。

5つ目は、生麦JCT～石川町JCTの神奈川1号横羽線、石川町JCT～本牧JCTの神奈川3号狩場線、本牧JCT～大黒JCTの湾岸線、そして神奈川5号大黒線全線を結んだエリア、通称「横浜環状」。

初心者からレベルの高い奴まで集まるエリア。それなりのテクは要するが、狩場線や湾岸線部分はなかなか高速で走れるものとなって

いる。

以上の5つのエリアで、走り屋達は日々バトルを繰り広げているのだ。

・数分後、C1（内回り）にて

川「（・・・結局、見つけれずじまいかな・・・ん？）」

パッシングの合図。相手はスープラだ。

川「（バトルか・・・そういや今日って一度もバトルしてなかったな・・・よし、いいぜ。）」

ハザードを出し、バトルはスタートする。

川「（・・・ついてこれてはいるな・・・なかなかの奴だ。）」

230 km/hほどでC1を疾走する二台。

川「（・・・くうっ！）」

霞ヶ関トンネルに進入する左コーナー、S15がアンダーを出し少々失速。スープラを前に出してしまう。

川「（・・・ここで抜かれるとはな・・・『GOLD FIVE』」

？確か新参チームだったような・・・赤いスープラだったら・・・」

「

リーダーである。

川「（・・・なるほどな・・・かなりいい走りをするじゃないか。

今は前に出してしまったが、巻き返すぜ。）」

スープラに張り付くシルビア。

川「（・・・ここから仕掛けるなら・・・赤坂ストレート辺りか・・・」

「

赤坂ストレート・・・某漫画で300 km/hが記録されたストレートである。あそこなら十分チャンスを作れるか。

川「（トンネルもあと少しで終わり、出口で一気に加速していけば・・・！）」

「

離れずそのままスープラについていく。気づけばトンネル出口は目の前。

一気にアクセルを踏み込む祐馬。ストレートへ突入・・・

川「(いけえええっ!)」

現在290km/h、スープラに並び、次のコーナー手前で追い抜く。更にオーバースピード気味にコーナーへ突っ込み、クリア。一気にスープラを突き放す。

川「(さあて・・・しばらく走ったが・・・ついてくる様子は無いか。)」

祐馬の勝ちである。

川「(まだ心にうやむやがあっただけだな・・・現に抜かれたしねえ・・・だが、一回バトルするだけでこんなに精神状態を安定させられるとは。まっ、とりあえずPA寄っとくか。)」
新環状へ進入後、パーキングエリアへ入る。

川「(コーヒーっと・・・)」

自販機で頼む・・・その時、パーキングに一台の車が入ってきた。

川「(ん・・・あれはさっきのスープラか・・・)」

先ほどのスープラがやってきた。

スープラのドライバーも中へ入ってくる。

「よう、さっきのバトル、なかなか楽しかったぜ。」

川「やっぱりさっきのスープラのドライバーか。新しいチームのリーダーさんだろ?」

「まあな。『GOLD FIVE』のリーダー、『鈴木光一』だ。」

お前さんは伝説のシルビア、『一瞬で吹き去る銀の風』だろ。」

川「ご存知か。」

鈴「あんたと戦えて嬉しかったぜ。やっぱ、敵わなかったけどな。」

川「そうか・・・お前も、なかなかの速さだったと思うぜ・・・」

鈴「・・・?どうした?」

川「いや、大丈夫だ。」

もちろん、迅帝のことを気にしているのである。

鈴「伝説つーもんを思い知ったぜ・・・俺とバトルしてくれてサンキュー。」

川「ああ。（戦ったはいいが・・・流石に新人さんに迅帝の事聞いても分かつちやくれないかな・・・次を当たるか・・・）」
その後は特に会話もせず、コーヒー飲んで本線に復帰したのである。

川「（見事に情報無しだな・・・いくら戦っても、迅帝が今何してるかがわからねえ・・・まあ、それが伝説の走り屋つてもんか・・・さて、今日は諦めますかね・・・）」
祐馬は自分の家へと帰っていった。

家は東京のどこかにあり、現在一人暮らしである。母は2年前に死別、元走り屋であった父はいるのだが、現在用事でどこかへ行ったつきりである。

家に帰り、軽く風呂に入り、就寝・・・。

川「（明日はどうなのかねえ・・・情報が少しでもあればいいんだが・・・文々。にでも情報が載ってればいいんだけどな・・・）」
文々。新聞とは、自身もZ33フェアレディZを操る走り屋で、業界一の情報収集能力を持つ射命丸文しやめいまるあやが作り上げている新聞。2年前までスーパーGT界を圧倒した無敵の元プロレーサー、渡利洋わたりとしひろが何故かカーレビュを投稿している事でも有名。

走り屋情報新聞として多大なる人気を得ている。また、彼女の皮肉交じりの記事も人気の要因の一つと言える。ただ、妙なガセネタも混じっている場合もあるが。

因みに、お買い求めは何故か各高速道路PAと走り屋のいる峠の近くの店のみで、不定期の発行（但し1週間に1度は必ず発行）である。

川「（まあいいや、とりあえず寝るか・・・）」

次の日、整備場にて

川「っていうわけで、昨日は情報は無かったな。」

石「そうか・・・こつちも全然、音沙汰ねえしな・・・」

厚「前に峠攻めたつきり、ちつとも情報ないからな。いきなり湧いて出てくるようなことはないだろうし・・・」

十三鬼将といえば、およそ2年前、十三鬼将のそれぞれのメンバーが全国のあらゆる峠・・・『街道』に出没し、その街道の走り屋を倒していった事がある。

街道側も対抗策として「キングダムトゥエルフ十二王国」を送り出したがそもそも本人達はそんな事のためにチームを結成したわけではなかったらしく、結果的に、丁度その時期に各地の街道で有名になっていたとある走り屋が倒していった。

この走り屋は後に、街道界の伝説「フォーエバーナイト」をも倒したのだが、更に数日後、箱根で目撃されたのを最後に消えたのだという。

しかし、それは“謎”のまま、走り屋の間での話題にならなくなつた。

また十三鬼将はこの一件で、「侵略」的な意味合いで攻め入った事から街道の走り屋からは嫌われてしまっている。

川「今日もそんなに情報無しかな・・・」

石「でも、お前がバトルしたんだから、他に目撃者がいても普通におかしくないはずだけどなあ・・・」

川「とりあえず、今日も探ってみますよ。」

そして夜・・・

川「（さあてはて、今日も湾岸線からつと・・・）」

祐馬は再び、東扇島から進入する。

数分後、C1外回り 芝公園付近にて

川「（あゝあ、やっぱし何も無しにC1まで来ちまった・・・PAにいた奴に聞いても目撃情報無し・・・まあでも、文々。新聞に少し情報は載ってたけどな・・・）」

文々。新聞のトップ記事は「ブルースピード&ハッピーチャップー、スバルワンメイクチームリーダー同士のバトル勃発!!」だったが、2面に「『迅帝』出沒?しかし目撃情報はあまりに少数」という記事があった。

記事名通り、情報が無さ過ぎるためか非常に小さい記事で、また目撃情報を聞いた相手もただの一般人だったため、有力な情報は一切無かったのである。

あえて分かっていることを言うならば、祐馬が迅帝とバトルした日以降、再び迅帝を見た者は一人もない事である。

川「(こつから新環状行つて湾岸戻つてもう1周するかな・・・)」その時、バックミラーにパツパツと光るライトが写った。

川「(つとお、バトルか・・・ハチロクトレノ・・・?あいつ、
『ローリング野郎1号』じゃないか?)」

ローリング野郎1号・・・「Rolling Guy」という首都高では非常に有名なハチロクワンメイクのチームのリーダー。チームメンバーは6号までいて、1号がリーダーとなる。

特にリーダーである小早川哲、そして前リーダーである哲の兄、小早川悟は有名。

祐馬は一度1号を倒しているのだが、あちらが再戦を申し込んできた模様だ。

川「(いつだかにちぎって終わったのにまだやる気か・・・)」しかしその直後、祐馬はある事に気づく。

川「(んっ?よく聞いたらエンジン音が・・・これ、4A-Gの音か・・・?・・・エンジン換装でもしてるのか?)」

とりあえずハザードを出し、バトルはスタートする。そして祐馬は確信した。

川「(・・・!前に戦った時より格段に速い!こいつあ確実にエンジン換えてやがる・・・何のエンジン積んでるってんだ・・・?)」
流石に祐馬のS15にはついていけないが、ハチロクとは思えない加速である。

川「（とはいえ焦る程じゃないな。コーナリングも上手くいけばこ
つちの一方的な展開になるはず・・・）」

芝公園のコーナーを抜け、分岐後の右コーナーへ。

川「（・・・粘れるのか・・・？）」

まだバックミラーから消える様子は無い。コーナリングはそこそこの走りを見せている。

川「（だけど、次のコーナーで終わるかな・・・）」

次の右コーナー、200km/hほどまで加速して少しのブレーキ
ングからコーナリングするS15、対して八チロクはコーナリング
で200km/hを出す。

川「（・・・終わったな。）」

霞ヶ関トンネルへ入る頃、八チロクのライトはバックミラーから消
えていた。

川「（ふう・・・まあ、こんなもんだよな。エンジン換えても、追
いつけねえぜ。）」

しかし、まだバトルは終わってなかった。

そこから走り続けて神田橋辺り・・・

川「（・・・んっ？またローリング野郎1g・・・いや・・・もう
一台いるな・・・）」

先ほどバトルしたローリング野郎1号がパッシングしているのが見
える。だが、隣でもう一台、パッシングしているマシンがいた。

川「（・・・レビン・・・？）」

赤の八チロクレビンである。

川「（・・・まさか・・・『ローリングマスター』か・・・？）」
ローリングマスター・・・Rolling Guy前リーダーで1
号の兄であり、現在は己を磨くために一匹狼になったと言われてい
る走り屋・・・

そのローリングマスターが、1号と共に祐馬の前に現れた。

川「（前リーダー引き連れて再戦しようってか・・・？いいいぜ、そ

こまでしよつってんなら・・・」

ハザードを出しながら後退し、2台の後ろにつく。

川「(こうしねえと面白みがねえな。さあ、行こうぜ!!)」

レースはスタート。後ろからついていくシルビア。ハチロク二台はレビンが前、トレノが後ろ。

川「(ちやちやと抜きたいところだが、今回はそう上手くいくかねえ・・・)」

次の瞬間、思いっきり鳴り響くレビンのエンジン音を聞いた祐馬は、再び確信する。

川「(やっぱりマスターのほうもエンジン換えている、か・・・加速はトレノより速そうだが・・・)」

江戸橋JCTは当然C1へ行く。

川「(やっぱりハチロクは、ドリフトが上手い奴だと様になるねえ・・・)」

三台共にドリフト。そこから一気に坂を下る。

川「(一般車はいるか・・・レビンもトレノのスピードにあわせてブロックしてるし、これじゃ抜けねえな。加速がのるからほんとはチャンスだろうけど・・・)」
そして2車線になる。

川「(次の分離帯で迫ってそこから一気にってのは出来るかな・・・)」

丁度一般車はいなかったため、二台は並んで分離帯へ。祐馬は・・・坂からの勢いで、なるべくレビンの後ろに近づきつつ、そのままレビンと同じ、分離帯の右へ。

川「(・・・OK・・・か・・・!?)」トレノの隣を陣取った。レビンに張り付いている。

川「(次のコーナーでトレノの前に出れる!!)」

次のコーナーはレビンと揃ってイン側。アウトからインに攻め込めないトレノ、シルビアに前を譲る。

川「(残るはレビンか。トレノはさっき見た限りではこれからつい

ていけるとは思えないけどな……」

そのままレビンの後ろに張り付いて抜きどころを伺う祐馬。
トレノも何とかがついてきている。

川「（次のコーナーは……ここも上手くドリフトしてくるな……）」

左ドリフトから立て直さずにそのまま右ドリフトするレビン。

川「（……コーナリング速度はほぼ一緒ってか……ドリフト後の加速も互角か。）」

次はトンネル内のコーナー。一般車は一台。

川「（……おつとお、そんなに怯えてちゃ速くは走れないぜ!）」
イン側に一般車はある。レビンはアウトから進入するが、それを狙ってシルビアはインに入り込んだ。

川「（行くぜ!）」

そのまま抜き去り、アウト側で一般車もパスした。

川「（さーて、もう1号は消えかけか……となるとマスター、あんただけだぜ。）」

トンネルを抜ける二台。トレノはほぼ見えなくなっているため実質敗北。

ローリングマスターとの1対1である。

川「（スピードでは案外ついてくるからな……でも、引き離せるのは確かだ。後はコーナリングか……）」

八重洲線合流後のコーナー、グリップでベストラインを抜ける祐馬。レビンもコピーしようとするが少しバランスを崩す。

川「（少し姿勢乱したがそれでも速いな……だが、決着は近いぜ?）」

そこからアクセル全開で一気に加速しレビンを離していく。

川「（ここはとりあえずC1だよな……このコーナーで終わりにするぜっ、いけっ!）」

JCTで芝公園方面へと進入し、そこでのコーナーで完璧な高速ドリフト。

レビンも難易度高めのドリフトを繰り返すが、祐馬のシルビアには離されてしまう。

川「（・・・ふう、勝利だな。）」

芝公園のコーナーを抜けた後、レビンもバックミラーから完全に消えた。

再び祐馬の勝利である。

川「（まあ、手ごたえはあったかな・・・一体何のエンジン載せてるんだか・・・コーナリングも大分速くなってるとは・・・さあてはて、そろそろ帰りますかな・・・）」

2連続でハチロク相手にして疲れたわけではないが、家に戻っていた。

次の日、電話にて

石「ああ、最近首都高のハイレベルチームに追いつこうとするためだかなんだかで強力なエンジンに変えたんだとよ。」

川「なるほど。」

石「古参ハチロクチームも段々と強豪になってくるかもな。因みに1号ののつけてるやつはセリカの3S-GTEだつてさ。」

川「セリカの3S-GTE・・・それであんななのか？」

石「ああ。ST205のツインカムターボだからな。」

川「ほう・・・。」

石「推定で420馬力らしい。」

川「加えて軽さであるの加速を実現してるつてか。」

石「みたいだな。で、更にローリングマスターのが強力で、80スープラの2JZ。推定620馬力だ。」

川「弟と兄で200馬力近く違うのか。もういつそのこともう一度チームに戻ってもっと強くするのに貢献しろよって思うけどな。」

石「まあ、最初はそうだと思ってただけど、戻らねえみたいだな・・・にしても、昨日は迅帝について何か分かった事はあるか？文々は読んだぜ。」

川「俺もっすけど、流石の文々。でもいい情報はあまり無いっぽい
ですし……」

石「あまりに目撃情報が少なすぎるってのがな……まあそんなこ
んなで、今日も頑張ってくれよ。」

川「サンクスっす。」

ピッ

川「(さて、今夜も行かなきゃな……)」

夜……

川「(相変わらずだなあ……どのPA行っても何も情報はないし
……)」

試しに今回はC1からはいり、今は横羽から横浜環状に入ろうとす
る場所までやってきたが、まだ迅帝に関する情報はつかめていなか
った。

川「(ほんとに情報が無いからな……横羽の走り屋も情報無し……
でも、諦めたくはないよなあ……っとお、バトルか。S2000
とな……あのバンパーはスプーンのだっけか?)」

ホンダのチューナーであるスプーンのエアロパーツが確認できる、
ニューフォーミュラレッドのS2000である。

川「(まあ、とりあえずバトルは集中しねえとな。それじゃ、行く
ぜ!)」

現在生麦、バトルがスタートする。

川「(いい加速だな……ついてこれてるぜ。)」

なかなかのチューンを施しているS2000らしく、祐馬シルビア
に加速でついてくる。

川「(昨日のレビン以上だな……次は左コーナーか……)」
左中速へ進入。

川「(……アウトから進入して一般車がいたのにそこからあのス
ピード……?)」

シルビアはイン、S2000はアウトから進入。しかしアウト側は

コーナー出口に一般車がいたのだ。

だが、それを確認したS2000のドライバーは気づいた瞬間に思いつきりインに切り込み、一般車をパスし、再びマシンを安定させた。・・・スピードはさほど落ちていない。

川「(あそこからそんなテクが出来るっつてのか・・・?まぐれじゃなさそうだが・・・)」

なかなかのテクを見せたS2000に少し驚く祐馬。

バトルはトンネルに入り、次のコーナーが迫る。

川「(コーナーできっちり張り付いてきやがる・・・離れねえ・・・まあ、そうでなくちゃ面白くは無いがな・・・)」

200km/h前後をキープしていくつかのコーナーを抜ける。次に迫るは右の中速コーナー、その直後に左。

川「(次は大型トラックねえ・・・抑えれば簡単にパスできるが・・・またあつちはさつきみてえな大技繰り出すのか?)」

いつもより少し多く減速をしてグリップで進入する。

川「(これで・・・なっ!?)」

コーナーリング中・・・祐馬はその時、バックミラーからライトが消え、アウト側に一筋に光が見えるのが確認できた。

川「(そこにはトラックがいるっつてのに抜くつもりかあ!?!?!マジかよ・・・)」

S2000はシルビアよりも速いスピードでコーナーへ進入し、アウトからシルビアをパス、そこから先程のような切込みでトラックまでもパスした。

川「(くっ、抜かれることはねえと思っただけだな・・・いや、少し勝ち続けて自信過剰になったつてもあるかな・・・でも、久しぶりに手ごたえあるバトルになりそうだな。さあて、追撃だ。)」

S2000を追う。

川「(スピードではついていけるから、後はテクの問題だな・・・あつちはそこそこのテク持つてるみてえだし・・・)」

スリップについて更に加速。次のコーナーへ。

川「（やっぱコーナリングが上手いな・・・こりゃあ更なる限界まで攻めたほうがいいか・・・？）」
次のコーナー、ブレーキングを遅らせ、コーナリングスピードを上げてみる。

川「（・・・よし、これなら十分追撃できる・・・！）」
なるべくS2000の真後ろを取れるようにして、プレッシャーを与えていく。

プレッシャーを与えれば、プレッシャーを受けた側がミスをする可能性が出てくるからだ。

川「（トンネル出口・・・ここでは抜けねえか！）」
多少広いコーナーだが、インには一般車がいる上、アウトからでも思い切り攻められる状態ではなかった。

川「（こっから思いつきり攻めるのは・・・本牧JCTの辺りか・・・？）」

少々大回りなコーナーである。あそこでコーナリング中でも減速を抑えていけば・・・

川「（よし、そこでもう一度前に出て見せるか！）」

目標コーナーはもうすぐ、仕掛ける準備をする。

緩い右コーナーを抜け・・・

川「（・・・よし、いい加速だぜ・・・！アウトには誰もいねえ、並べっ！）」

S2000に並び、二台揃ってコーナーへ進入。

川「（・・・よし、前はもらったぜ。）」

少しコーナーを進むと、イン側には一般車。すかさずS2000は減速する。

おかげでシルビアが前に出ることが出来た。

川「（こっから更に離すには湾岸行くか横羽行くか・・・っとお、ん？）」

S2000はそのままスローダウン。このまま降参らしい。

川「（勝利か・・・あっけない感じだな。プレッシャーを与えまく

ったからな・・・さあて、とりあえず大黒ふ頭で休みますか・・・)

「PAへと入る。」

川「(・・・おつ、さっきのS2000も来たか・・・見た感じ、女か・・・?)」

祐馬の目で確認できる限りでは、運転席に座っているのは女だ。

S2000も駐車場に停まる。降りてきたその女は、どうやらメイドらしい。

「やっぱり噂通り、いや、それ以上の実力を持つてるのね、噂のシルビアさん。」

川「どうも。そっちだつて凄かったじゃないか、まさかあんな風にして抜かれるとは思わなかったぜ。」

「あら、そう。私は十六夜咲夜よ。宜しくね。」

川「俺は川内祐馬だ。宜しくさん。・・・にしてもさっきから気になつたんだが・・・」

十「何かしら?」

川「あんた、『幻想郷』出身とか言う走り屋の一人か?」

十「よく分かつたわね。雰囲気でも漂つてたのかしら?」

川「まあ、そうだな。実際幻想郷出身の奴なんて今まで見たこと無いが、見てみるとすぐに分かるもんだな。」

幻想郷・・・日本のどこかに存在するという別世界。そこに住んでいるのは女性ばかりだが、人間のみならず、妖怪なども普通にいるのだという。『弹幕遊び』なるものが盛んらしい。

そんな幻想郷からやってきた走り屋が日本に何十人という。主に峠にいたのだが、高速にいる者達も少なからずいる。

別に車とは殆ど無縁な世界なのだが、何故かドラテクが非常にハイレベルな者ばかりなのである。

十「まあ、自己紹介したのも、これから貴方がもつと戦っていけばまた関わりあうと思つてね。」

川「何でだ?」

十「最近、迅帝の事を追ってるらしいじゃない。」

川「なつ、何でそれを・・・」

十「文々。新聞よ。」

川「ああ、なるほどな・・・そこまで情報が広まっちまってたか・・・」

十「それで、うちの屋敷に住んでる一人が今ちよつと十三鬼将について色々調べてて、その関係でその人が貴方と戦って・・・迅帝に関わる情報を手に入れられるかもしれないってね。」

川「なんだそりゃあ・・・？（十三鬼将のことまで？）」

十「いや、まだ推測よ。その人と会えば、また貴方と会うかもしれないでしょ。」

川「まあ、そうだな。」

十「そうでなくても、もつと幻想郷の人と関わっていけばまた会うだろうし・・・いや、間違いなく関わるわね。」

川「マジかよ、女ばっかに関わりあうのか。」

十「そういうことね。・・・そうだ、一度博麗神社つてところに行ってみるといいわ。」

川「博麗神社？」

十「適当に地図サイトでググればすぐ場所分かるわよ。そこにいる博麗^{はくれいれいむ}霊夢^{むすめ}って巫女は幻想郷出身の走り屋に知り合いが結構いるから、一度会ってみるといいかもしれないわね。」

川「ふ〜ん・・・」

十「・・・ああ、でも今はちよつと用事があつていないんだっけ・・・まあでもすぐに戻ってくるわ。少し後になったら会ってみなさい。」

川「そうか。まあ、ほんとに幻想郷の奴らと関わっていくような事があれば、だけどな。」

十「まあ、そうね。・・・それじゃ、私はそろそろ帰るわ。じゃあね。」

川「じゃあな。」

咲夜は帰っていった。

川「(幻想郷の奴らと関わる、ねえ・・・殆どの奴と知り合いつて人と会っていわれるくらい関わるのかねえ・・・)」
しかし祐馬にとつて、聞いたことの本題はそこではない。

川「(それよりも気になるのは、あの咲夜って奴の住んでる屋敷だかなんだかの一人と戦ったら迅帝に関わる情報が入るってことだよ・・・一体何の情報だったんだ・・・?)」

次の日、自宅にて

石「なるほどな、幻想郷のものと初対面か。俺も鈴木さんがリーダーだった頃、何人かに会ったっけな。」

川「ええ。」

石「で、そのお仲間が十三鬼将について調査中、と。やっぱり、何かしら迅帝側も動きがあるみたいだな。」

川「そうっすね。決して何も無いとはいい難いし。」

石「とりあえず、そいつらの動向もどうなるかって感じだな。」

川「俺にバトル仕掛けるかもしれないし・・・」

石「だな。そいじゃ。」

ピッ

川「(迅帝の情報・・・近々俺にとって新展開があるかもしれないフラグだよな・・・まあ、毎日首都高攻めてればいずれは分かるか・・・博麗神社の件はまだにしとくか・・・)」

そうして夜・・・

川「(うむ、今日は大したもんとはバトルしてないし、大した情報もないし、幻想郷の奴とも会わないし・・・とりあえず帰るか・・・)」

しかし、祐馬が思った事だけの夜ではなかった。

帰路の事である。

川「(・・・さつきから妙に何か感じると思ったら・・・)」
前でも横でもない、後ろから何か感じ取った祐馬。

川「まさかストーカーされてるとはな・・・まあ、あの人ならするかもな。俺みたいな奴だと・・・」

祐馬は尾行している奴が誰だかが少し分かった。マシンは赤のフェアレディZ、それにあのBORDEER製エアロパーツ・・・祐馬はそこにあつたファミレスで車を停める。後ろのZも同様だ。

川「やっぱり貴方ですか、射命丸さん。」

射「あらら、やっぱり気づかれましたか。このまま家まで尾行するつもりだったんですけどねえ。」

文々。新聞編集長、射命丸文だ。

川「初対面ですね。そつちとしちゃあ、やっと取材できるって感じですか。」

射「そりゃそうですよ。噂のシルビアなんですから。」

川「まっ、丁度腹へってたんで適当に取材してくださいな。」

射「おっ、そのつもりでいてくれましたか。それじゃ早速いきますか。」

ファミレス内へ行き、メニューを頼んだ後・・・

射「それじゃ早速本題へ。最近、迅帝のことで嗅ぎまわってるみたいですねえ？」

川「やっぱりその話か。まあその通りですね。」

射「ここまで進んできたんだからそろそろあの伝説の男と戦ってみたいというわけ？」

川「つていうか、もう戦つたんですけどね。」

射「なっ？」

川「少し前に小さい記事で迅帝が出てきたつていうのがあつたですよ。その出てきた迅帝が俺に湾岸でバトル挑んできたんですよ。」

射「なんと・・・しかも湾岸で・・・で、勝負はいかに？」

川「あつけない敗戦でした。」

射「・・・無敗神話崩壊す・・・そんな事があつたの・・・」

川「そのときは動揺してて迅帝だつて事がよく分からなかつたんですけど、迅帝だつて分かつてからは、もう一度戦つてみたいと思

「いましてね。」

射「ほうほう、リベンジに燃えたわけね。」

川「それで探し回ったんですが、PAにいる走り屋とかに聞いても情報は皆無に等しく・・・。」

射「私も迅帝が来たって言う情報聞いてそこらの人にもっと詳しいこと聞こうとしたら皆何も知らなかったですからねえ・・・。」

川「まあでも、いつかは再戦してみせますよ。」

射「なるほど・・・もう一度バトル出来るといいわね。」

川「ええ。」

そこで頼んだものが到着して食事開始。まだ話は終わらない。

川「にしても、こうやって間近で本人を見ると、幻想郷の奴だって事が分かりますな。」

射「あらら、そんな事が分かる感覚持ってるのね・・・。」

川「丁度昨日からついたもんでね。」

射「幻想郷の誰かと関わったって事？」

川「十六夜咲夜って人と。」

射「ああ、紅魔館のメイドね。バトルでもしたのかしら？」

川「その通り。で会ってみると、何となく特別な何かを持っているような雰囲気を感じたんでね。」

射「まあ、弾幕遊びばかりやってればそんな雰囲気が常に漂ってる感じになるかもしれないわね。」

川「それで、貴方にもそんな感じがあると。」

射「まあ私も妖怪の類だしね。」

川「妖怪だったのか・・・。」

射「鴉天狗のね。」

川「鴉天狗？」

射「背中に羽があるのよ。」

川「そうか。」

一見すると普通じゃない会話だが、祐馬は幻想郷についてある程度情報は聞いているので、幻想郷の者だと分かれば妖怪と言われども驚

くことは無い。

射「・・・そういえば、紅魔館といえば、パチュリーが今十三鬼将について何か嗅ぎつけたって話があったわね・・・」

川「何っ？（まさか、昨日咲夜が言っていたのってそれか・・・？）」
射「ええ。なんか最近、十三鬼将が妙な動きを見せてるって情報がどこかにあるらしくて。」

川「なるほど・・・」

射「近々首都高に出向くみたいね。」

川「（・・・やっぱり、ほんとにバトルするかもしれないのか・・・）」

射「まあ私もパチュリーに取材するつもりですけどね。」

自宅にて

川「（こりゃあ、その幻想郷の奴と会うのを期待しろって感じだな・・・パチュリーつつたっけか・・・そんなに重要なら、マシンとか聞いたときゃよかつたぜ。）」

これで祐馬が「パチュリー」に会うかもしれない可能性は高くなつた。

果たして本当に、迅帝に関する情報を彼女がある程度握っているのだろうか？

それが分かったのは2日後の晩である。

川「『迅帝、一瞬で吹き去る風を撃破していた！』か・・・（まあ、そりゃ大事だよな・・・）」

何か用事があったらしくこの日の発行となった文々。新聞だが、やはり祐馬への取材、そして迅帝VS一瞬で吹き去る風がトップ記事だった。

川「（マイナスイメージな記事じゃないのは再戦するつつたっだからかな・・・にしても、果たしてほんとにまた幻想郷の奴と会うのかねえ・・・おっ・・・）」

丁度その時、後ろからパッシングの合図。相手のマシンは……見る限り小型車だ。

川「（小型車か？……あのマシン、もしかやチンクチェント……？）」

チンクチェント……フィアットが製造する小型車、「500」の愛称、というか500のイタリア語読み。

相手が乗るのは、一番新しい3代目……

川「（……普通のチンクつーよりは、アバルトっぽい感じだな……）」

アバルトとは、かつてはイタリアに存在し、フィアットのマシンを手がけた競技用自動車メーカー。

現在は会社はなくなり、フィアットが販売しているマシンの上級グレードに、その蠍のエンブレムと共に名を冠している場合がある。

川「（つつても、そのマシンでこのマシンに勝てると思うか？……バトルの舞台はOKだと思うけどな。）」

現在新環状左回りだが、江戸橋JCTはほぼ目の前。つまりC1はもうすぐそこなのである。

500のような小型車はある程度コーナリングで有利になるが……それでも、チューンを施されたGT-RやRX-7には敵わないものである。

そもそもコーナリングで有利にならないなら尚更だ。

川「（まあ、俺に挑むだけの自信があるってんなら……やってみようじゃねえか！）」

箱崎JCTの手前、バトルはスタートする。

直後にJCTを抜け、まずは最初のコーナー……

川「（……なんじゃありゃ……？正にギューイイツって感じのコーナリングだな……）」

シルビアはそのままグリップで進入し、加速しつつ抜けるが、500は終始アクセル全開、完璧すぎるほどのグリップでコーナーを抜ける。

川「（やっぱC1はあつちにとって有利ってか・・・加速ではついてこれるほどじゃねえみたいだが、あのクラスにしてはかなり出てるよな・・・次のコーナーっと・・・）」

500との差は70mほど。先程のコーナーを抜けてからの加速で30mは開いたが、すぐ次のコーナーが迫る。

川「（・・・すげえコーナーリング・・・！くそっ、抜かせはしねえ！）」

猛烈な勢いでコーナーリングする500に迫られ焦る祐馬。何とかブロックし、加速で突き放そうとする。

江戸橋JCTではC1内回り方面へと向かった。

川「（あんなコーナーリング、『RATT』のメンバーも無理だろ・・・？どんだけコーナーリング特化なんだよ？）」

まだ少し驚きを隠せない祐馬。少なくとも500は、先程のあのコーナーリングで200km/hを出し、そこからまだ加速する勢いだっただ。

因みにRATTとはC1を攻めている、軽オンリーで有名なチームリーダー「猿飛びサスケ」のカップチーノもなかなかの速さだが、あそこまで速くは無い。

川「（こりゃあ立ち上がりの加速で勝負していくしかないってか・・・？なんつー相手だよ・・・）」
そこから神田橋を駆け抜けていく。

加速で離していくシルビアだが、必ずコーナーリングで500に差を詰められる。

川「（まだ粘ってくるとはな・・・やっぱエンジンもカリカリにチユーンしてるっばいな・・・）」

数々のコーナーを抜けるがさほど差は広がらない。間もなく霞ヶ関トンネルである。

川「（ここはドリフト・・・なっ！?）」

シルビアは少々アウトに膨らむ。そこを狙って、500は一気にインに出来た隙間へもぐりこみ、シルビアをパスした。

川「(ついに後ろについてしまった・・・っ！かボンネット開けっ放しかよ・・・)」

500のボンネットは開いたまま、エンジンは剥き出しの状態(因みに知らない人のために解説しておくが、500の駆動方式はRRで、MRと同じく後ろにエンジンがあるタイプである)。

川「(こっからどうやって勝負をかける・・・!?あっちだってすばしっこそうだしな・・・)」

コーナーを抜けた後、500は即座にシルビアの前に出てブロック、一気に加速する。

そのままブロックし続けて、加速で抜こうとするシルビアを抑える。

川「(くそっ・・・っ！、またすげえコーナリング・・・!)」

中速コーナーはちよつと減速してそこからはアクセル全開という500。シルビアはドリフトで対処する。

川「(赤坂ストレート辺りで抜ければいいが・・・その手前のコーナーでいつちよ仕掛けられるか・・・?)」

トンネルも間も無く終わる。そこからの赤坂ストレートで仕掛けるつもりでいる祐馬・・・。

川「(・・・よし、アウトは開いてる・・・いけえっ、もっと加速しろっ・・・!)」

前のコーナーで横にいた一般車をパスした後、即座にアウトにつくシルビア。

その時500の前輪が右に動いたがすぐに戻った。間に合わない判断したのでろうか。

川「(このままいけば十分離せる・・・!)」

暫くして300km/hに達したシルビア。その勢いでどんどん加速、500を引き離す。

川「(こっからオーバースピード気味にいつ・・・!)」

320km/h程から250km/hまで減速、少しケツを振りながらコーナーを抜ける。

そこから一ノ橋JCTまではほぼノンストップで加速する。こうで

もしないと振り切れない。

川「（もうバックミラーから消えて暫く経ったか・・・ふう、勝利勝利と・・・）」
祐馬が勝った。

川「（最初はあるなコーナリング見せ付けられてどうなるやらと思つたが・・・良かったぜ。さあて、新環状のPAで休みますかな・・・）」

芝浦PAへ向かう・・・。

川「（・・・来たな、さつきのチンク・・・）」
先程の500もやってきた。

川「（・・・あれ？降りてこない？）」
ドアを開けたのに降りてこない。試しに祐馬は近づいてみる。

川「（・・・つ・・・まさか・・・この人か・・・？）」
その人を見た瞬間、祐馬は直感した。

川「・・・あんたも幻想郷の人間か。」
「あら、すぐに分かったのね。まあ、この前咲夜と会ってるから、そういう人と会う予感があったでしょ。」

川「やっぱり、あんたが十三鬼将について最近調べてるとか言う人か・・・」

「ええ。私がパチュリー・ノーレッジよ。」

川「名前からして、妖怪か。」

パ「まあね。」

川「すげえコーナリングするんだな、そのチンク・・・」

パ「ええ。コーナリング中でも500馬力のエンジンをガンガン回せるしね。」

川「500馬力・・・？そのエンジンでか？」

パ「ええ。」

川「は・・・（すげえなそりゃ・・・）」

パ「まあそんな事はいいとして・・・とりあえず、貴方に重要な情

報はあるわよ。」

川「そうか。．．．十三鬼将に関する情報だよな．．．教えてくれないか？」

パ「つて言っても、あまりいいもんじゃないけど．．．」

川「何い？」

パ「．．．十三鬼将、貴方を狩り出しにくるわよ。」

川「．．．つまり．．．十三鬼将の奴らが俺に挑んでくる、と。」

パ「ええ。それだけじゃないわ．．．十二覇聖までも．．．」

川「十二覇聖．．．？あいつらも挑んでくるってのか？」

パ「みたいね．．．」

十二覇聖（The ZODIAC）、かつて迅帝が敗れた際に出てきた走り屋集団。どいつも十三鬼将同様にボス級の速さで、特にリーダー格の「白いカリスマ」は迅帝と同じくらいのテクを持っているといわれている。

しかし十三鬼将の解散と同時に十二覇聖も解散したのだが、後に十三鬼将が峠へ攻めるときは、一部十二覇聖メンバーも混ざっていた。パ「十三鬼将に譲った分は別の奴で補うらしいわ。．．．私にはそれが誰かまでは分からないけど．．．」

川「なるほど．．．こりゃあ、追う側と思ったら逆に追われる側だったっていうオチか．．．」

パ「．．．昔に比べたらどのメンバーも強豪になってきたらしいし．．．しばらくは激しいバトルばかりになりそうね。」

川「だな．．．つつつても、どうしてそれが分かったっていうんだ？どうやって調べたしたっていうんだよ？」

パ「普通に一般道走ってたらそれらしい集団見つけて、何だろうかと耳をすませたらそんな事はなしてたっていう都合のいい出来事よ。」

川「なるほど。いい偶然だな。．．．でも、再戦するとすればなんで迅帝はあの時俺にバトルを．．．」

パ「さあ．．．？まあいいわ、とりあえず今後も会うかもしれない

から、霊夢にあつてちょうだい。」

川「今後も会うつてのは、また十三鬼将について分かった事があれば話すつてことか。でもなんで霊夢なんだ？」

パ「そいつを通して貴方と連絡するわ。あぁ後、今後も幻想郷の奴と関わるつて際の話だけど、霊夢の知り合いの霧雨魔理沙きりさめまじさにもあつたほうがいいかもね。」

川「霧雨魔理沙？．．．なんだか色んな奴と関わっちまうな．．．」

パ「私にも咲夜にも、そんな予感がするのよ．．．それじゃ、私
は行くわ。じゃあね。」

パチュリーは帰つていった。

川「（十三鬼将と十二覇聖．．．まだ本当かは分からないつて言つても、それが嘘とは言い切れない気がするし．．．こりゃ暫くは落ち着けない日々が続くかもなあ．．．にしても、何で車内にいたつきりだつたんだ．．．？）」

十三鬼将と十二覇聖による祐馬への挑戦．．．それが本当ならば、祐馬はどれほど立ち向かつていけるのか．．．

そして、もしもそいつらを倒していけば、迅帝との再戦も果たせるのだろうか．．．

川「（．．．でも、とりあえず明日は霊夢つてのに会いに行つて見るかな．．．連絡取り合つてんなら仕方ない。）」

次の日、整備場にて

川「ということらしい。」

石「なるほどな．．．。十三鬼将と十二覇聖が襲い掛かってくると．．．」

厚「言われたただけだと恐ろしいけどな。でも祐馬なら、ある程度對抗できるだろ？」

川「だといいけどな．．．」

厚「実際戦つてみねえと分からないよな．．．峠攻めたときよりも更に戦闘力上げてるかもしれないし．．．」

川「まずはそれだよな。・・・まあでも、とりあえず今日は霊夢って奴に会いに行ってみる。」

石「幻想郷の奴か。」

川「ああ。ほんとに今後たくさん幻想郷の奴と関わるかどうかは知らないが、予感がしてきたからな。神社の帰りに首都高寄るつもりだ。」

厚「そうか。」

ほんとにそんな予感がするらしい。たとえそれが近い時期でなくとも。

というわけで夕方、印刷した地図を片手に出発する。

川「（・・・地図だところこの細道を行って、地図にもかかれてない道を進む、か・・・）」

狭いが道は舗装されている。そこを進んでいき・・・

川「（エボ3にR32・・・まさかあそこが駐車場ってか？よく盗難が起きない事・・・まあそもそもあんま人がこなそうだけだな。）

┌

駐車場もどきに停める。

川「（二台ともそれっぽく武装してるな・・・おつ、R32はGT-Rじゃなくてスカイラインか・・・）」

そこから階段を上る。

川「（てつきり見えない道かと思っただけの階段か。ちゃんと鳥居見えるし。）」

階段を上りきる。そこには確かに、神社があった。

・・・人の気配はある。

川「（・・・やっぱ2人いるな・・・）」

すると本殿の中から、一人が顔を出してきた。

「んあつ・・・おい霊夢、珍しく参拝客だ。」

「えっ、ほんと？」

いるのは、紅白な巫女服を着た女と、魔法使いっぽい格好でどこと

なく男勝りな雰囲気の女だった。

川「すまないな、参拝はしてくが本題はそこじゃないぜ。」

「まあ参拝してくれるってんならいいわよっ。」

川「まあその前に少し話させてくれ。」

「ん・・・？おいお前、もしかして咲夜が言ってた・・・。」

川「聞いているのか。もしかしてあんたが『霧雨魔理沙』か？」

霧「なんだ、やっぱし私のことも聞いてたか。丁度遊びに来てて正

解だったな。因みに乗ってるマシンはR32スカイラインだぜ。」

川「で、あんたが『博麗霊夢』だろ？」

博「正解ね。マシンはエボ3のほうよ。」

川「まあ話つつつても、幻想郷の奴らに関して、どれくらい関わっ

ていくのかってことだけだな。」

博「うん・・・まあとりあえず中入って。お茶、入れるから。魔

理沙はまだいる？」

霧「ああ。一応最近噂の奴が来てる訳だからな。」

中に入る。

川「・・・そんなに俺に興味持ってる奴がいるのか？」

博「少なからずいるわね。でも、まだ挑む気はないみたい。」

話によれば、幻想郷からの走り屋も祐馬の情報を聞いて、興味を持

っているらしい。

ただ殆どは峠の者である。

川「いつかは来るかもってことだよな。」

博「そうかもねえ・・・まあでも、今はそんな事より十三鬼将の方

気にしてるんでしょ？」

川「だな。後十二覇聖もだ。」

霧「そりゃあ大変だな。でもそれが、伝説の奴との再戦への道でも

あるかもしれないってわけだもんなあ。」

川「ああ。」

博「まあそんなこんなで、とりあえず私の神社の電話番号教えとく

わ。まあ私も、あんと関わってたら何か面白いことでもありそう
な気がするし。」

川「なんだそれ？」

博「魔理沙だつて関わられるしね。」

霧「まあそうだな。」

川「俺と一緒に居ればええ奴とバトルできるんじゃないかって？」

博「それもあるかな。それじゃこれね。」

川「サンクス。」

博「さうで、それじゃそろそろ行く？」

霧「行くつて、首都高だよな。」

川「首都高？首都高の走り屋だったのか？」

博「峠も攻めるけどね。まあ今日は首都高なんだけど。そういつた
ら、どういう事か分かるわよね？」

川「・・・バトルか。」

博「ええ。私対魔理沙対あんだね。」

川「1対1対1つてか。てつきり2対1で来るかと思っただけだな。」

霧「私と霊夢でタッグ組んだら、私と霊夢が競り合う楽しみがなくな
るだろ。」

川「それもそうだな。」

というわけで、首都高へ。

川「(・・・こいつらがどれくらいの実力なんだかな・・・そろそ
ろ横羽か。)」

博「(それじゃ、行くわよ・・・!)」

霧「(行くぜ、伝説も混じってる事だし、手加減はしねえ・・・!)」
スタートは横浜環状から入って生麦から横羽方面。R32とエボ?
が並び、その後ろにシルビアがつく形でラインを切る。

新環状の箱崎PAがゴールである。

・・・バトルがスタートする。

川「(アクセル全開、このまま手を抜かずに行くぜ。)」

エボ3とスカイライン、前に出たのはスカイラインだった。

博「（速い！やっぱり迅帝に負けるまで無敗でやってくるだけのマシン性能はあるわね。）」

霧「（抜いたはいいけどシルビアは信じられねえ加速だな・・・こりやあシルビアも集中して見ねえとまずいか・・・？）」

3台ともどんどん加速していく。

川「（コーナーはそこそ上手いな・・・いいライン取りだ。）」
そしてそこで・・・

博「（ここならいけるかしら！？）」

なんとかインベタにつき、コーナー脱出で抜きどころを狙う霊夢。

霧「（抜かせてはしねえぜ！っていうか、よく後ろも見とけよ霊夢！）」

博「（きっちりブロックしてきて・・・っ！？）」
アウトからシルビアに狙われていた。

川「（スカイラインがブロックしてなかったら速攻だったんだけどな。エボ3ブロック後に真ん中走るとは。）」

博「（魔理沙に抑えられて私と並走してるって感じね・・・これは精神的にきついかもっ・・・！）」

そのまま並走状態。しかし右車線に一般車が迫る。スカイラインは左車線に寄る。

並走状態の二台、左にいたのはシルビアだった。

川「（残念だったな。運良く左にいたもんで。）」

博「（くっそ・・・）」

そこから更に先へ。

シルビアはスカイラインに抑えられて十分な加速が出来ない。

エボ？はスリップにつくが、まだ抜けない。

川「（そろそろ昭和島か。あそのこのコーナーはどうだ・・・？）」
湾岸へのJCTの手前のコーナーが迫る。

川「（まっ、やってみるか・・・！）」

霧「（そろそろプレッシャーを大分感じてきたぜ・・・！これで精神

切らしたくはねえな・・・！」

博「(まだまだいけるけど、抜けない・・・！って、シルビア、そこから行く！？)」

霧「(なんつー完璧な高速コーナリング・・・！)」

川「(ここだつ！)」

コーナー途中でスカイラインに並ぶ。

霧「(こりゃあ、無理だあつ・・・)」

コーナー脱出後、シルビアが前に出た。

川「(さあて、こつから手加減無く攻めていくぜ。ついてこれつかあ?)」

霧「(まだまだ、このスカイラインのパワー、GT-Rじゃねえからって甘く見るなよつ!?)」

博「(遂に魔理沙が抜かれた・・・！こつからあのシルビアについていけるかしら・・・!?魔理沙の抜きどころも見ないと・・・)」

そこから間も無く鈴ヶ森・・・。

川「(多少は離れたが、思ったより粘ってくるな。)」

霧「(シルビアはまだ抜く以前に離れすぎてる・・・霊夢は案外ゆすってくるな・・・)」

博「(早く抜かせなさいつ・・・!)」

その状態で、横羽線を駆け抜けた。

間も無くC1が迫る。

川「(この加速でもまだ粘るとは・・・だが次のC1はコーナーが多いぜ、どうする!?)」

C1内回りへ進入。

霧「(つちい、あと少し走ればゴールじゃねえか・・・これじゃシルビアは抜けねえ、霊夢に集中するしかねえな!)」

博「(狙うはいくつかのコーナーに分離帯・・・ゴールまでには抜かしたいわね!)」

まずC1入って最初のコーナー。トンネルへ向かう。

川「(エボ3とスカイラインが入れ替わる事はまだないか・・・さ

あ、どうなることやら・・・」

・・・いくつかのコーナーを抜ける。そして二箇所分離帯・・・

博「よし、左に一般車はいないわ！魔理沙は右、アクセル全開っ

！！！）」

霧「（そこで狙うかあ、霊夢！？）」

次のコーナー、二台は並走状態。そのまま次の分離帯へ・・・だがしかし。

霧「（こっちがインだつて事忘れるなよ・・・！）」

博「（丁度一般車もいないつてのに抜けないなんて・・・！）」

少しスカイラインが前に出る。そこから江戸橋まで一直線。

川「（さあて、はねた後は一気にドリフトと行くぜ。終わりだ。）」

坂を上がって少し跳ねるシルビア。スカイライン、エボ？と続く。

川「（いけえっ！）」

一気に高速ドリフトに持ち込む。新環状へ。

霧「（うめえ・・・あんな綺麗なドリフトは見たことねえな・・・）」

「

そうしてPAへと到着・・・。

シルビア、スカイライン、エボ3という順になった。

川「このマシン相手に結構粘つてくれるんだな。」

霧「まあな。一応800馬力近くは出るもんでね。」

博「私のエボ3だつて800馬力くらいよ。」

川「なるほどな・・・。」

博「でも、やっぱり伝説級の速さだったわね。魔理沙とのバトルも良かったけど。」

霧「ああ。シルビアとは思えねえ加速だ。」

川「サンキュー。」

そうして・・・

博「それじゃ、パチュリーとか咲夜、魔理沙から連絡あれば電話するわ。」

川「ああ。じゃあな。」

祐馬はPAを出た。

川「(さあて、もう少し攻めますかね・・・)」
その時・・・

着メロが鳴る。

川「(おっと、電話か。・・・大輔だな・・・)」
ピッ

川「もしもし？」

厚「おい祐馬か、今どこにいる!？」

川「新環状だ。霊夢&魔理沙とバトルして箱崎出たところ。」

厚「そうか・・・そこからC1へ戻って来れるか？」

川「まあ、まだ攻めるつもりだけど、どうしたってんだ？」

厚「うちのチームのメンバーが『裏切りのジャックナイフ』を見た
んだよ!」

川「裏切りのジャックナイフ・・・？」

厚「十三鬼将の一人だ・・・!」

川「何い!？」

・・・遂に、動き出した。

若き伝説を探して（後書き）

次回で本格的な部分に入っていきます。

・・・東方キャラの乗っているマシンについては「なんかキャラが違う」とか「俺の嫁がこんなマシンに乗るはず無いだろ」とかあるかもしれませんが、ご遠慮下さい。

T h i r t e e n D e v i l s (十 三 鬼 将) a n d T h e Z O D I A C

十三鬼将、十二覇聖マシンは首都高バトル0、01が準拠です。

因みに、これ以降(まあ第一部ですが)だらだらとバトルが進んでいきます^^;

厚「大体5分前、芝公園で内回りを走ってたらしい。ジャックナイフは攻めてる感じじゃなかったみたいだ。マシンは峠侵攻の時と同じ、黄色のFDみたいだぜ。」

川「今行けば普通に間に合いそうだな。3分前でマジ走行じゃなかったら、江戸橋まで行ってるか行っていないか・・・情報サンキュー。今から行ってみるぜ。」

厚「あいよっ、頑張れ。」
ピッ

川「（すぐにバトルするためにも急がねえと・・・え〜と、福住は過ぎたから木場で一旦降りて折り返してそこから全速力でいけばすぐC1戻れるか・・・とにかく、急いだほうがいいよな!）」

アクセル全開で木場へ向かい、降りて、再び首都高へ進入する。そこから全速力でC1へと向かう。
これを5分ちよいでこなした。

川「（神田橋・・・こっから探索開始か・・・）」
230km/hから一気に150km/hへと落とした。その時である。

川「（・・・なっ、いつの間に・・・!?待ち伏せか!?!）」
八重洲線の方から一筋の眩い光がバックミラーで確認できる。そしてすぐにシルビアの後ろにつき、パッシング。

祐馬はすぐに相手が誰だか分かった。こいつしかない。

川「（『裏切りのジャックナイフ』・・・!）」
あのFDは間違いなくそうだ。ボディカラーのイエロー、そしてマツダスピードのフルエアロ。バイナルまで貼ってある。

裏切りのジャックナイフは、もしも十三鬼将に目をつけられた際、必ず最初に襲い掛かる者と言われている。ただ、悪く言ってしまうば、ジャックナイフは十三鬼将でも下っ端。

主にC1を攻めている。今回のレースの舞台もC1だ。

因みに搭乗車種に関しては、最初はシルエイティ、次にS13に乗っていた。峠に攻め入る際に更なるパワーアップを図るため、FDへと乗り換えた。

川「（それじゃ早速行こうか、待たせてすまなかつたな!）」

ハザードランプがシルビアに点滅する。そして点滅を終えた瞬間・

十三鬼将とのバトルが幕を開けた。

川「（やっぱFDというだけあってなかなかの加速じゃねえか。だが、C1はコーナリングも重要だ。どれだけのもんかお手並み拝見・
・。って、お手並み拝見されてるのはこっちだな。」

いくつかのコーナーを高速で抜けていく二台。200km/h以上を維持する。

川「（ライン取りもなかなか・。だが、それだったらもつと加速できるだろ・。!?)」

霞ヶ関トンネル前の上勾配右コーナー、シルビアは240km/hなのに対しFDは211km/h。差が広がっていく。

川「（まだまだあ・。!その程度か!?)」

トンネルに入るコーナーにおいても、シルビアとFDのコーナーリングスピードに差があった。

川「（いいか、遠慮はしないぜ?このままトンネルで終わらせるっ
!!)」

相手がこれならいけると思ったか、トンネル内でスパートをかける。

川「（やっぱそう簡単にバックミラーから消えちゃあくれないが、少なくともストレートで終わるはずだ・。!）」

250km/hでかつ飛ばした後、200km/h弱まで減速しドリフトでコーナーを抜ける。FDもついてこようとするが、大分離れている。

川「（ここをオーバースピード気味に行けば・。）」
軽くケツを流して右コーナーへ。

川「(トンネル出口、もうバックミラーにはいねえ、ここでとどめを刺す!)」

赤坂ストリート。すぐ300km/hに達した後、再びケツを軽く流して左コーナーへ進入。

そして、減速した。

川「(・・・もう、こねえな・・・ふう、勝ったぜ。)」

裏切りのジャックナイフに勝利した。

川「(正直、この程度かって感じだったけどな・・・まだ最初の奴だからか?今後どんどん強くなつてくのは当然だろうし・・・)」
十三鬼将初戦というものの、祐馬が予想したほどの強さではなかった。それでもジャックナイフはドラテクの強化に加えFDへの乗り換えもあつて大分強くなっているはずだが・・・
今の祐馬に敵うものではなかった。

川「(これで残るは12人・・・いや、十二覇聖もいるとすれば24人か・・・強い強いと言われてる奴と24人も戦うと思うと、わくわくしてるっつーか、ある種恐ろしいっつーか・・・明日もまた誰か来るかねえ・・・)」

とりあえず、今日は霊夢&魔理沙とのバトルもあつたため、とりあえず帰る事にした。

その後、自宅にて・・・

厚「ほ、まずはジャックナイフ撃破か。FDに変わっても、まだまだな走りだったつてとこか。」

川「つつつても、俺はFD以前の走りは知らないけどな。でも、風格は出てたぜ。」

厚「まあ、前はS13とかシルエイティ乗つてて、とりあえず我がチームリーダーを前に出させないくらいの実力はあつただけだな。FDに変わつて、RINGSとか、The Road of Justice辺りには余裕で対抗できるくらいにはなってるだろう。」

川「ふん・・・。」

厚「まつ、とりあえず十三鬼将一人目撃破だ。その他の奴らもほとんどん動いてくるだろ。」

川「だろうな・・・」

厚「バトルまで入ったからにはもう止められないからな。何せあの十三鬼将に、復活してきた十二覇聖だ。手に汗握るバトルは少なくないと思うぜ。そいじゃ、頑張れよ。」

川「ああ、サンキュー。」
ピッ

川「(十三鬼将は出てきたが、十二覇聖はいつ出て来るんだか・・・それとも、もうこれで次には出てくるってのか? まあ、あんま遅くに出てこられてそれまで本当に出てくるのか心配するよりはそのほうがいいけどな。)」

パソコンでメールをチェックしながら、そんな事を思う。

まだまだ敵はたくさんいる。首都高にいる時は油断できない。

明日も絶対に攻めなくては・・・

川「・・・おっ・・・?(親父からのメール・・・久々だな・・・)」

親父は行ったつきりではあるが、何故か祐馬のPCのメルアドは知っている。一応親父も向こうPCを使うらしいので、やり取りをすることが稀にある。

川「・・・ほ・・・(・・・なるほど・・・)」

「近々家に戻ることになった。まだ日ははっきりしていないが、少なくとも1ヶ月以内に戻る。そしたら家にまた住まうかもな。それだけだ。」

・・・という内容である。

川「(家に戻ってくるか・・・久々に顔見ることになるな・・・後、あの70スープラも・・・)」

70スープラ・・・親父の愛機である。

祐馬が聞いた限りでは、700馬力ちよい、車重は1300kg弱、エアロパーツも変えているがメーカーは不明。

川「（とりあえず、返信しとくか・・・）」

「そうか。久々に親父の顔を拝む事になるな。70スープラもよ。そつだそつだ、一つ重要な情報があるんだ。今、首都高ですげえ強いらしい十三鬼将と十二覇聖とかいうのと戦ってるぜ。親父は・・・十三鬼将が出てくる前に走り屋やめたから知らないか。まあともかく、まだあつちは一人しか出てきてない状況だが、これからどんどん戦っていく予定だ。じゃ、家に帰ってくる日まで。」

という内容のメールを送信した。

川「（さーてはて、後は下らんスパムか・・・）」

メールを削除した後、就寝・・・。

博「やっぱりね、戦ってないわけじゃないと思つたわ。」

川「ああ。電話受けて急行したからな。まっ、待ち伏せされてたけど。」

あの後霊夢と魔理沙はPAに残っていたのだが、店内にて魔理沙が近くの走り屋が裏切りのジャックナイフの話をしているのを耳にしたため、すぐに霊夢に話した。二人とも十三鬼将のメンバーはよく分かっていないが、その男が「あのサーティーンデビルズのか!？」と言つた事からすぐに分かつた。

ただ霊夢自身携帯というものを持っていないので祐馬と連絡が出来なかつたのだ。

それで次の日、バトルしたのかしてないか気になって電話したのだという。

博「で、結果は?」

川「勝利。」

博「なら、良かったじゃない。」

川「ああ。まあ、あつちはそこまで速いって感じじゃなかつたからあつさりで行けたけど。」

博「それ言っちゃうのね・・・」

川「だからって安心してるわけじゃねえって事だ。どんどん倒して

いく、つまり迅帝に近づいていけばいくほど相手は強くなるってことは覚悟しなくちゃいけないからな。油断すれば迅帝行くまでにT
HE ENDだ。」

博「そりゃそうね。どれだけ強い奴相手にしてるっていうのよ・・・

川「伝説級の、くらいだな。」

博「そりゃそうでしょうけどね。やっぱり幻想郷から来たばっかの私達にはまだまだ戦え無さそうだわ。」

川「精進してみればおk。」

博「する気が無い。」

川「なんじゃそれ・・・」

博「ああそうそう、今度パチュリーが今の十三鬼将と十二覇聖のメンバー調べて報告してくれるって。もしかしたら紅魔館に呼ぶかもだつてさ。」

川「メンバーか。まあ教えてくれれば助かるけど、紅魔館？パチュリーとかが住んでる屋敷か？」

博「そうよ。当然だけど幻想郷にあるわ。」

川「つてことは、もしも呼ばれば『一瞬で吹き去る風、幻想郷入り』つてか。つてえ、そもそも何で幻想郷にいちいち行く必要があるんだよ？」

博「えっ？ただ単純に、貴方みたいな人を幻想郷に入れてみたいんだつてさ。」

川「なつ、なんじゃそれ・・・まあでも、ほんとうに入るとなると少しワクワクするけどな。」

博「そう？弾幕遊びばっかやってる怖い世界とでも思ってるかと思つた。」

川「いやまあ、それもそうだけだな。つっわけで、そのパチュリーの報告を待て、と。」

博「その通り。それじゃ、そろそろ切るわ。またね。」

川「あいよ。」

ピッ

川「幻想郷、か・・・（人間と妖怪が弾幕飛ばして遊んでるって世界とは聞くがな・・・どんな世界だか。つつつても、呼ぶかもってなんで呼ぶ必要があるんだ？）」
そんなこんなで今宵も首都高へ。

23:32 有明JCT付近にて

川「（今日も十三鬼将が来るか、十二覇聖の奴が来るか、はたまた来ないか・・・どーなんだかな。おっ？）」

丁度後ろからパッシングを受ける祐馬。・・・あのZは射命丸のだ。

川「（今まで全然会ってないっつーのに、また会うとはな・・・これは、取材かな。）」
するとZが横にやってくる。

川「（・・・なんだなんだ？ジエスチャーか？）」

こちらを見ながら、手帳を持って書き留め、片方の手の指で「あっち、あっち」という感じのジエスチャーをしている。一応手放し&余所見運転だが。

川「（ああ、辰巳PAで取材受けてくれって事だな・・・まっ、いっすよ。断わったらずつついてきそうだしな。）」

祐馬もOKサインを出し、PAへ向かう。

川「また会いましたね。もしかして、取材内容は昨日の件ですか？」

射「お察しがいいですね」。って言っても、それしかありませんけど。

川「それじゃ早速。ちゃちゃっとやりますよ。」

昨日のバトルについて話す。

射「ふむふむ・・・よし、取材は以上ですね。有り難うございます。」

川「いえいえ。」

射「それではあんま付き合って十三鬼将とか逃したらいけないの

でこれで失「・・・じゃなかった、一つお知らせが。」

川「お知らせ？何すか？」

それは何気に重要な情報だった。

射「十三鬼将の一人と言われている『ブラッドハウンド』が今出現してるらしいです。」

川「何い!？」

・・・ブラッドハウンド・・・かつて十三鬼将で「最強のセダン乗り」と呼ばれ、その中でも最も速いといわれている者である。

かつては何故かベントツのDTMマシンに似せたアリストに乗っていたといわれているが、現在は目立った外装パーツの変更は無い。

射「なんか湾岸にいた走り屋が、新環状の奴から聞いたつてのを小耳に挟みまして。左回りらしいですから、こっちでOKですね。」

川「そつ、それを先に言つて下さいよ・・・。」

射「いや、取材優先ですから。」

川「なんと・・・まあ、まだいるとは思いますがね。ジャックナイフと同じ待ち伏せだったら会える可能性は十分ですけど。」

射「まあそうですね。因みに乗ってるのは血染めのバイナルが貼られた黄色のアリストらしいですからね。間違えちゃだめですよ？」

川「血染め、か・・・そんな強烈なバイナル貼つてりゃ間違える事ありませんよ。」

射「そうですね。それじゃ、頑張つて下さうい。また取材しますからね。」

川「ほいほい。」

そして祐馬もシルビアに乗り込む。

川「(ブラッドハウンド・・・そいつが十三鬼将二人目つてか・・・アリスト・・・どんな奴だか・・・)」

辰巳PAを出て本線へと合流する。

川「(ここいらにはいないか・・・抜かしても気づくようなスピー

ドで走ってるつつつても、いなきや意味無いしな・・・」
そのまま走り続け、江戸橋JCTからC1外回りへ。

川「・・・結局いねえな・・・」
と、その時。

電話だ。

川「ん・・・石田さんか・・・これは、射命丸さんに聞いた話と一緒に・・・」
ピッ

川「もしもし？」

石「ああ、祐馬？ジャックナイフに続いて十三鬼将がまたやってきたぞ。」

川「やっぱり。それ射命丸さんに聞きましたよ。」

石「あつ？取材でも受けたのか？」

川「そうです。そのついでに、湾岸線で小耳に挟んだ情報をくれたわけで。」

石「ほぅ・・・そうか。にしても、また待ち伏せとはな。どれだけ祐馬を襲いたってんだ？」

川「まつ、また待ち伏せ・・・？」

石「おおっと、そこまでは聞いてなかったみたいだな・・・俺が目撃した限りでは、レインボーブリッジでハザード出っっぱなしで停まっていたぜ。あいつは間違はなく、『ブラッドハウンド』だ。」

川「いい情報つすね。今どこにいるか追ってたところだったんで。」

石「なら良かった。・・・いいか、ブラッドハウンドはなかなかの強さだったぜ。昔『最強のセダン乗り』が健在だった頃にバトルした事があるんだ。」

川「えっ、マジっすか？」

石「ああ。ベントツのツーリングカー模したようなマシンでな。当時の俺で何とか負けたくらいだ。」

川「何とか負けたって、そのくらい速いって事ですか？」

石「そうだな。でも今なら勝てる自信はあるぜ。あん時の鈴木さんも勝ったんだけどな。その後また出てきたときはツーリングカーの面影無し、殆どエアロはついてねえ状態でエンジンも何故か弱くなってるらしい。まあ、今どうなってるかは知らんけどな。」

川「じゃ、勝てる可能性は十分かもしれない、と。」

石「そうゆうことだ。それじゃ、頑張ってくれ。」

川「はい。有り難うございます。」

川「よし、せいじゃレインボーブリッジへ行こうじゃねえか！」「レインボーブリッジまでかつ飛ばす……。」

川「(着いたぜ、さあ来い……！)」

150km/h程で走行する。そしてそこに、奴はいた。

川「(見つけたが……うわぁ……血の斑点か……すげえマシンだな……)」

アリストが動き出し、シルビアに近づいてパッシング。

川「(いいぜ、そのつもりで来たからな。さっ、早速始めようぜ！)」

ハザードを出し、十三鬼将二戦目がスタートする……！

川「(加速はまあまあみてえだな。だが、俺についてこれる程じゃねえ！)」

レインボーブリッジを抜けて高速左コーナー、一般車を縫いながら250km/hで走りぬけるシルビア。

対しアリストは224km/hである。

川「(全然って感じたな。ジャックナイフよりはいいかもしれないが……だが目の前は湾岸線だぜ。辰巳までもてるか、見せてみる！」

次に高速右コーナー、更に加速して300km/hまで迫る。まだまだアリストは離れたままだ。

川「(せいじゃ、一旦湾岸に入るぜ。)」

JCTを辰巳方面へと進む。一気に減速して豪快なドリフトを決めた。

川「（・・・うおお、アリストも随分うめえドリフトじゃねえか・・・）」

なかなかの高速ドリフトを決めるアリスト。目の前にいた一般車をかわしつつコーナーを抜ける。

だが、湾岸線に入れば加速勝負。言ってしまうえば決着はここでついてしまう可能性は、先ほどの両車の加速を見る限りでは十分にあった。

川「（よし、300km/h・・・!）」

しかし、そんな簡単に2連続で勝たせる事は許されなかったようだ。

川「（・・・なっ!?ちきしょっ・・・）」

ほぼ目の前にて一般車がウイinkerを出して車線変更。320km/hから一気に減速してかわす。

川「（つちい・・・まっ、こうでねえと面白くないだろうけどよ。）」

・・・アリストにパスされた。そのままアリストは加速していく。シルビアも一気に加速するが、辰巳につくまでに300km/hは出せない状態だった。

二台は再び新環状へ復帰、向島線へ。

川「（おおっとお、そんなところで手こずっちゃあいけないぜ。）」

アリストはPA前にあるストレートにて一般車処理に手こずる。おかげでアリストの真後ろにつけた。

川「（とはいえ、ここから簡単に抜けるものなのかどうか・・・）」
そこから左コーナー、二台とも先ほど落とした速度の勢いなので堅実にグリップで攻める。

川「（・・・ここじゃあ抜けねえ・・・必ずいつかは隙間が空くとは思うが・・・どこまでそれを塞いでくる・・・!?)」

まだ抜けないためアリストの加速にあわせて加速するシルビア。

川「（見事にセンターライン走りやがって・・・）」

これが前のようなDTM仕様だったらもつと抜きづらい状況だったんだとか。

川「(・・・揺れたっ!)」

高速区間から進入する木場付近の左コーナー、プレッシャーがきつかったのか、手前の緩い右でアリストは少しバランスを崩す。

川「(抜けるぜ!)」

大きく減速するアリスト、そのまま進入する。

が、隣にはシルビアがいた。

シルビアは再びアリストの前へ・・・。

川「(こつからまた引き離しか。遠慮はしないで終わらせる!!)」
そつから立ち上がりの加速で一気に離していく。アリストもなんとか粘ろうとする。

川「(終わったな・・・)」

次の右コーナーまでに260km/hまで加速する・・・。バックミラーからライトは消えた。

川「(よし、これで2勝目・・・ん?)」

・・・再び眩いライトが映った。

先ほどのアリストではない。別のマシンのようだ。

川「(なんだなんだ、ブラッドハウンド勝利って直後にバトルかよ・・・ちよいまで、こいつ・・・)」

自分と同じS15。しかし妙なオーラを醸し出しているのが、パッシングしているそのマシンから感じ取れた祐馬。

まるで、さつきまで感じていたオーラと同じような感じだった。

川「(まさか、こいつも十三鬼将・・・!?)」

祐馬は知らないが、十三鬼将でもなかなか速いクラスに入る凄腕・

ユウウツな天使である。

川「(まあにかく、バトルと行こうぜ。もしそうならば2連続十三鬼将、こりゃあ大変だな。)」

バトルがスタートする。

川「(スタートはなかなかみてえだな。)」
そのまま加速し続ける。

川「(・・・ついてくる・・・やっぱこいつ、十三鬼将だ・・・!)」
確信した。

川「(やっぱ気は抜けねえな・・・!同じS15同士、甘いバトルは抜きだぜ!!)」

猛烈に加速する二台。箱崎JCTを抜け、低速の左コーナー。

川「(いいドリフトだな。だがスピードはどうだ?)」

コーナーリングスピードでは祐馬シルビアが勝った。

川「(ちっ、次はいいライン・・・!)」

続く右コーナー、祐馬シルビアよりもあちらのシルビアの方がいいラインで抜けた。

江戸橋JCTは銀座方面へ進む。

川「(このままバトルが長引けば新環状3周目か・・・まあ最近C1のバトルが多かったから別にいいけどな。それよりも、今はあのS15をどうすつかだ。コーナー抜けても全然離れやしねえ・・・)」

坂を下りて分離帯へ。一般車が片側にいる中二台は上手く抜け、そこから二つ目の分離帯を抜ける。

川「(ここで200km/h以上を維持できるとはなかなかだな・・・)」

そこからいくつかのコーナーを抜ける。一般車を縫いながら200km/h弱で走行。

川「(・・・つちい、こりゃあきついかな・・・!つとお・・・)」
イン側にいた一般車の処理に手こずり思わずミス。コーナー出口で相手シルビアに抜かれる。

川「(ちくしょう、このまま次のコーナーで抜けそうにはねえからこのまま新環状突入か・・・!)」
八重洲線と合流しS字を抜ける。二台ともドリフトで抜けストレートへ。

川「（加速はほぼ同じだからな。後はコーナー勝負だが・・・まずは台場線だな。）」

JCTは横羽線へ。そこから台場線へ行く。

川「（・・・きっちり守ってくるねえ・・・）」
ブロックされ続ける。

川「（さあ、こっから何km/hいけるか・・・!?)」
立ち上がりから一気に250km/h、300km/hまでめがけていく二台。

川「（高速域からのドリフトもうめえじゃねえか・・・!）」

レインボーブリッジ前の左コーナー、多少減速してドリフトする二台のシルビア。

そして祐馬シルビアはイン側に入り込み、ストレートで並ぶ。

川「（このまま一気に300km/h突破・・・!そこからついてこれるか??!?!おつと・・・）」

加速しながら最低限のハンドリングで一般車をパス。まだあちらのシルビアとは並走状態。

川「（こっちがイン側・・・!）」

320km/h程で次の左コーナー、インである事を利用して前に出る。

川「（後はどれくらい引き離せるか・・・次の湾岸線はもう一度上りに行くか。）」

まだまだ加速し続ける二台のシルビア。だが300km/hを超えてからの加速で、徐々にユウウツな天使のシルビアは離されて行く。

川「（これは湾岸線行くまでに終わるか・・・?)」
右コーナー。既に100m以上の差はある。

そしてそこから一気に減速して、高速ドリフトを決める祐馬シルビア。

ユウウツな天使のシルビアもドリフトで抜ける。

川「（さっきみてえにはさせねえ、こっからの加速で決着つける!）」

すぐに300km/hに到達させ、ユウウツな天使のシルビアを一気に突き放す。

川「(バツクミラーから消えたか・・・!?)」
まだ少しライトが見える。ほとんど突き放して再び向島線へ。
PAを過ぎ、一気にドリフトで左コーナーを抜ける。

その頃には、もうライトは消えていた。

川「(・・・つづく)・・・2連戦勝利と・・・突然現れるもんだからびつくりしたな。あんな奴もいるのか・・・まつ、勝ったからいいけどな・・・あれが十三鬼将なら・・・本格的なバトルが出来そうな奴がやつと来たな。」

とりあえず十三鬼将相手に2連戦したので帰る。

自宅にて、石田に電話する。

石「おい、そいつあユウウツな天使だよ・・・」

川「ユウウツな天使?」

石「女のドライバーだ。十三鬼将じゃ、それなりに速い部類に入る一人だぜ?」

川「マジっすか・・・」

石「ああ。まさかそんな速い奴がブラッドハウンドの後に出てくるとはな・・・まつ、それでも対抗できたんだからすげえと思うぜ。」

川「ありがとうっす。まさか勝利した直後に出てくるとは思わなかったんで・・・」

石「そりゃそうだろ。・・・さて、そろそろ十二覇聖側が出てくるんじゃないか?」

川「こつちとしては早く出てきて欲しいっすけどね・・・」

石「そうだな。けど、メンバーが良くわからないからな・・・最初の奴がどれくらいのもんなんだか・・・」

川「まあとにかく、明日を待ってみましょう。」

石「だな。そいじゃ。」

ピッ

川「(さあて、残るは21人だぜ・・・!)」
ユウウツな天使を倒した祐馬。十二覇聖は果たしてくるのだろうか。
・
・
・
因みに昨日のメールの返信は無かった。

「十三鬼将、今日はブラッドハウンドとユウウツな天使が出たんだとき。二人とも敗北だ。」

「ほうう、あいつらもまだまだってか。せつかくシルビアを追うために再結成したもん同士、なんとか追い詰めたいってとこだけだな。」

「でも、もう迅帝が倒したんでしょ？何でまたやる必要があるのよ？」

「さあな、そこら辺は『白いカリスマ』に聞かねえと分からないだろ。」

「そうね・・・。」
「それじゃ、そろそろ俺らも動かないとな。まずは新入りRX-8さんからだ。」

「あら、私ね。対抗できるだけ対抗するわ。明日、湾岸下りでも行ってみる。」
「全力を尽くせ。」

次の日の昼

川「(さてと、ちよっくら買出し行ってくるかな・・・)」
出かける祐馬。

川「(・・・ん・・・ちよいまって、まさかまた・・・)」
後ろから文々。新聞編集長がついてくる。
今回停まったのはコンビニ。

川「果たして今まで会ってなかったのにこんなに会う事になるって偶然か否か・・・」
射「さあ？なんででしょうね。って言っても、なんか最近貴方の気

配を感じ取れるような気がして。」

川「それを辿ってるから会えるって？そりゃ凄いな。」

射「そんな能力私には無いはずなんですけどねえ。まっ、昨日のブラッドハウンド戦、聞かせてもらいますよ。」

川「OKです。」

シルビアの中で取材を受ける。

射「・・・ほほう、まさかユウウツの天使まで出てくるとは・・・

あの人は中々速い人って噂ですからねえ。」

川「ええ。突然来るとは思いませんでしたよ。」

射「にしてもまだ十二覇聖は出てこないんですね。十三鬼将の噂は本場で十二覇聖はガセだったってところででしょうか？」

川「さあ・・・？まっ、十二覇聖のほうにガセだろうと、十三鬼将と戦った以上、迅帝との再戦が望める可能性がありますから。」

射「まあ、そうですね。ああそうそう、実は私もパチュリーの情報を元に十三鬼将と十二覇聖のメンバーを調べてるんですよ。今日は試しに栲連れて潜入捜査します。」

川「まっ、マジっすか？」

射「ええ。そういう隠れた情報を調べるの好きですから。まあ昔のまんまのメンバーなら隠れてはないですが、変わってるっぽいですからね。」

川「へえ・・・（果たしてパチュリーのほうが早いか射命丸さんが早いか・・・）」

射「一応情報分かったら教えられるときに教えますんで。」

川「了解。」

射「・・・ってのは嘘で、実はパチュリーが貴方に教えるっての知ってるんですよ。」

川「ああ、なんだ・・・」

射「だからパチュリーに話しておきます。自分で調査って言うか調査の手伝いですね。」

川「でも何故パチュリーに教える必要が？だったら射命丸さんが教

えに来たほうがいいんじゃない？」

射「貴方を幻想郷入りさせるだけです。」

川「なんじゃその企みの目……」

射「まあまあ、怖いところじゃないですから大丈夫ですよ。それじゃまた。」

ブルオオオ……

川「（あの人は本格的に幻想郷入りを企んでたわけか……）」

23:58 辰巳JCT前……

川「（新環状とC1走ってるつーのに誰も現れねえな……ここは湾岸とか行くべきか、そもそも3日連続で俺を追う者はやってこないのか……後者とは言わせねえぜ。）」
とりあえず辰巳JCTから湾岸線下りへ。

川「（……ん……つとお、なんかそれらしいマシンはいるが……）」

現在0時を過ぎた。有明JCTを過ぎた辺り、丁度そこに一台のRX-8。

川「（……来るか……!）」

RX-8の前に出ると即座にパッシングをされた。

川「（……バイナルとか貼ってる辺り……十三鬼将か……?それとも、十二覇聖か……?はたまたただの走り屋か……でも雰囲気では……）」

十三鬼将か十二覇聖のどちらかだろうとは思った祐馬。バトルはスタートする。

川「（RX-8にしちゃあいい加速じゃねえか……この体全体に走るプレッシャー、やっぱあの2つのどっちかだ……!）」
300km/hを超え、このまま加速し続ける。RX-8も難なくついてこれている。

川「（流石は十三鬼将もしくは十二覇聖の一員のマシンってか。となると、どこで精神切れるかの勝負だな。）」

350km/h・・・あちらの加速もまだ止まらない。

川「(350km/hじゃねえか・・・あっちも相当速い・・・つとあ、引き離せる!)」

384km/hであちらの加速はスリップでも限界に達した。シルビアは392km/hまで加速し、引き離しにかかる。

川「(シルビアだけど400km/h近くまででねえと思っちゃあ甘いぜ。さあ、集中しろ・・・)」

川崎浮島付近、二台の差は100mほど。

川「(いいぜ、離していけ・・・!・・・なっ!?)」

前にいた一般車を右に行きパスしようとしたら一般車も右に車線変更。あえなく362km/hに減速する。

川「(ちくしょう、またそういうのかよっ・・・!)」

アクセルを踏みなおし再加速、すぐ後ろに迫るRX-8をブロックする。

これによりRX-8も減速した。

川「(冷や冷やするぜ・・・集中してるっつーのにこんなことあっちゃーな・・・)」

そのまま加速していき再び392km/h。

RX-8も再び離されていく。

川「(まだまだ行くぜ・・・迅帝とやりあうまで奴らとのバトルは終わらせねえ・・・!)」

長い長いストレートを駆けて行く二台・・・。

バックミラーからRX-8のライトは消えようとしていた。

川「(・・・終わったな。)」

完全に消えた。

川「(こっから様子見か・・・)」

川「(・・・安息・・・ふう、やっぱり湾岸のハイスピードバトルはC1とか新環状でドラテク競うのとは一味違っぜ。)」

一度大黒ふ頭にて休憩。

川「・・・あつー・・・」
「コーヒー飲んだだけ。」

川「（残るは21人か・・・どんな奴なんだか・・・）」

次の日

川「（・・・おつ、霊夢・・・これは来たかな・・・）」
ピッ

川「もしもし？情報が分かったか？」

博「ええ。」

奴らの情報だ。

博「おまけに呼び出しよ。今から私の神社に来て。」

川「そう来たか。つつつても何であんたの神社なんだ？」

博「まあ詳細は後で話すわよ。」

川「へいへい。」

早速シルビアに乗り込み、博麗神社を目指す。

その道中・・・

川「（んあ・・・？今度は石田さんか・・・）」
ピッ

川「もしもし？どうしたんすか？」

石「ああ祐馬、湾岸の奴が話してたんだが、お前と『12時過ぎのシンデレラ』がバトルしてたって聞いたんだが本当か？」

川「12時過ぎのシンデレラ？」

石「RX-8に乗ってるはええワンダラーだ。」

川「・・・ああ、あいつか・・・」

石「やつぱりな・・・あいつは0時台にしか出てこないワンダラーだ。それに、ワンダラーでも一味違うはええワンダラーだぜ。」

川「そうだったんすか？」

石「ああ。あの2チームとのバトルの間にいい奴とバトルしたな。」

川「そうなんすかね。・・・はじめ、十三鬼将か十二覇聖の一員って感じがしたんですけどね。」

石「まあ、バイナルとか貼ってるし、それなりに強いからそう感じてもおかしくないかもな。それだけだ、じゃあな。」

川「はい。」

12時過ぎのシンデレラのように、ワンダラーでも特に雰囲気醸し出すワンダラーは数人いる。

多くの走り屋を撃墜し続けているからかもしれない。

川「（なんだ十三鬼将でも十二覇聖でもなかったか・・・まあでも、悪くないバトルだったからいつか。）」

シルビアを走らせ続ける。

川「（さあて、そろそろ到着かな。）」

前に来た細道を行き、ランエボの隣に停め、鳥居へ向かう。

博「こんにちは、川内祐馬。」

川「よう、博麗霊夢。」

博「それじゃ早速案内するわ。幻想郷入りよ。」

川「ふう、地味にドキドキするな・・・。」

博「この神社の結界の向こうへ行くわ。」

川「けっ、結界？そんなの張って俺が通れるってのか？っつーか神社の中に幻想郷との境があるのかよ？」

博「まあそういう事。実際ここのは強固だけど、結界はいざというときは通れる仕組みだからね。さっ、さっさと中に来なさい。」

川「ほいほい・・・っつーか、幻想郷の奴らってこっちの世界にどうやって来てるんだ？しかも車もあるだろ？」

博「昔までは幻想郷とこの世界は結界で完全に隔離されてたわ。けれど、その結界を張った八雲紫が何でだかこっちの世界の車で攻めるのが楽しくなったらしくて、外の世界の峠に攻めるようになった。それ以後紫のほかにも、河童とか天狗を始めとする妖怪達が興味もって、更に誰がやったんだか知らないけど結界がいくつか開いて、

外の世界との交友は走り屋の面で行われるようになったって感じね。

川「なんだそれ？どうして車に興味持ったのさ？」

博「さあね？私も攻めるの楽しんでるけど、幻想郷の奴らだと何故か峠とか攻めるの上手いのばっかなのよね。」

川「ふ〜ん……（結界張ったのにそれが車のためだけにいくつか解けたとか……なんか色々無理矢理な気がするが……ここまでくると本家様に怒られるんじゃないか……？）」
神社に入り、結界の向こうへ。

川「……反対側に来ただけじゃないか。」

博「これは幻想郷からみた私の神社。それじゃ行くわよ……って、何で……」

目の前にはEGシビツク。

「霊夢〜、何で外の世界行ってたのさ〜、せつかく車で来たのに〜。っていうかその人間の男誰？」

博「外の世界の住人よ。首都高の伝説に迫ろうとしてる人。」

「へ〜、車乗ってんの？」

川「まあ、な……この子は誰なんだ？」

博「伊吹萃香。外の世界じゃ『伊吹山』ってとこ攻めてる鬼よ。」

川「へえ〜……っていうか、こっちの世界だと俺らの世界は『外の世界』っていうのか。」

博「そうよ。」

伊「よろしくね〜。まあ走り屋なら今すぐそっちの世界行ってレースするだろうけど、今日は宴会だから宴会後じゃないと無理だしね！」

博「あれ？今日宴会の約束とかしたっけ？」

伊「あれ？してなかったっけ〜？」

博「……ああそうだ、してたわ。酒の用意はあるけど、魔理沙呼ばないちゃったな……」

川「宴会って・・・宴会後だと飲酒運転じゃねえか・・・？」

博「まあね。萃香は外の世界でもやってるし。」

川「よくこつちの世界で捕まらねえな。」

伊「まあまあ、私の場合は酒飲むと速くなれるからいいってこと。」

川「飲酒運転の方がむしろ速いつてか？そりゃ恐ろしいのか凄いのか・・・」

博「つてえ、あんたはそうじゃなくて、こんなわけで萃香待たせたから紅魔館には魔理沙に連れてってもらって。」

川「魔理沙に？」

博「宴会の準備がまだ整ってないのよ。これ魔理沙の家の地図だからこれ見て歩いていって頂戴。」

川「・・・なんつー手書き地図・・・そいじゃ行つて来る。」

博「帰る時はまたここに寄りなさいよ。途中でもしも弾幕にあったら適当に走りなさい。」

川「分かった。」

鳥居を出て魔理沙の家に向かう。

川「(つつつてもそれだったらそのまま紅魔館行ったほうがいいと思うんだが・・・まあいいか。)え〜と、ここを右に・・・森か・・・」

森の中を進んでいく。

・・・
・・・
・・・

川「・・・ここか。」

隣にスカイラインが停まっている。間違いなくそうだ。
3回ノックする。

霧「ほーい。」

ガチャッ

霧「ん・・・なんだ、川内祐馬か。ほんとに今日来たのね。」

川「ああ。」

霧「つつーか何で私の家に来てるんだ？紅魔館じゃないのか？」

川「霊夢がちよいと用があるらしくて案内役を魔理沙に頼んだってところだ。」

霧「なんだよそれ・・・まあ紅魔館までは少し遠いからな。いいだる。っていうかあの愛機シルビアはどうしたんだ？」

川「外の世界に停めたままだ。停めてなけりや来てなかつたかもな。」

霧「まつ、それもそうだな。まあ箒で行くのが手っ取り早いけど、そつちは箒乗れないし、スカイライン使つてると弾幕来た時に手間取るから、あんたは歩きでついてきてくれ。」

川「OK・・・っていうか箒つて、やっぱ格好通りの魔法使いか。」

霧「そうだ。けど、種族は人間だぜ。」

川「あり？魔法使いつて種族の一つだったのか？」

霧「ああ。修行さえ積みめば魔法使いつてえ種族になれる。現に私の知り合いがそうだからな。」

川「ふん・・・」

紅魔館へと出発する。

霧「にしてもよくここまで無傷で来れたな。一回くらい弾幕の中に入つてつたかと思つた。」

川「俺も不思議に思うな。」

霧「つつーか怖くないのかよ？」

川「いや？そこまで殺伐とした雰囲気だとは思つてなかつたからな。」

霧「でも実際弾幕放たれたらどうするつてんだ？」

川「霊夢には走れといわれた。」

霧「まあ速い弾幕ばつかじやないからそれが妥当か・・・」

しばらく歩き続け・・・

・・・

霧「湖過ぎれば後ちよつと・・・いや、もう着いたな。」

川「あれか・・・」

屋敷が一つ、どーんと建っている。庭も広い。

門の前には咲夜と思われるS2000とパチュリーと思われる500、そこにいる門番と思われるGTOの3台が停まっていた。

川「・・・この門番は居眠りか？」

「zzzz・・・」

霧「異変があつて一回霊夢が来たときはちゃんと仕事してたらしいんだけどな。眠ってるのが殆どらしいぜ。」

川「ふ〜ん・・・」

門番をスルーして中へ入る。そのまま屋敷へ。

十「あら魔理沙、それに川内祐馬ね。パチュリー様は図書館にいるわ。」

川「そうか。」

十「で、魔理沙は何しに？」

霧「ただの観光案内だ。とりあえずこっからついでに案内してくれ、私も図書館行く。」

十「はいはい。」

この屋敷は非常に謎めいていた。

川「（これ・・・明らかに外から見るよりも広い気がするんだが・・・どうしてだ？）」

屋敷は外から見てもでかいが、中に入ると更に一回り大きく感じるような広さだった。

川「（ここが図書館・・・）」

進んでいく・・・と、彼女はいた。

パ「・・・へえ、ロケットはこういう風に作られるのね・・・」
魔理沙は別の方向へ進み適当に本を読んでいる。

十「パチュリー様、紅茶を持ってくるついでに川内祐馬をお呼びしました。」

パ「あら、来てくれたわね。」

川「どうも。そりゃ、十三鬼将と十二覇聖の情報だからな。」

パ「ええ。とりあえず、射命丸からは聞いてるでしょ。あいつがある程度メンバー推測してくれたわ。」

川「なるほど。」

十「昨日射命丸さんが取材ついでに情報提供してくれたみたいですがね。・・・それじゃ私はレミリア様のところへ。」

パ「分かったわ。」

そしてパチュリーは射命丸からの資料を取り出す。

川「ちゃんと書き留めたつてのか・・・メモ帳の紙切れ一枚も重要だな。」

パ「まあそれ見て私が色々調べただけど。まず十三鬼将は峠に行つたとかいう頃のメンバーと変わらないみたいだわ。後、横浜環状専属はどちらにもいないわよ。」

川「なるほど・・・。」

パ「・・・そういえば今まで誰か出てきたの？」

川「十三鬼将は3人、裏切りのジャックナイフにブラッドハウンド、ユウウツな天使。」

パ「もう3人撃破したのね・・・。」

川「ああ。」

パ「それじゃ残りのメンバーはそれ見てね。」

川「分かった。」

残る十三鬼将メンバーは次の通りだった。

C1の黒いS2000「ルシファー大塚」、新環状の赤いソアラ「シタール兼山」とシルバーのスープラ「ステイルハート」。

十二覇聖からの流れ組、湾岸の赤いGTO「ミッドナイトローズ」、新環状の黒いセルシオ「嘆きのプルート」。

そして更なる強敵、“四天王”。C1の青いGTO「ダイングスター」、新環状の黄色いNSX「夢見の生霊」、横羽の青い70スーパー「シャドウアイズ」、湾岸の赤いFC「追撃のテイルガンナー」。

最後に首都高全域を制覇せし青のR34、「迅帝」。

パ「重要は『四天王』かしらね。絶対に油断できないと思うわ。」

川「まあそりゃそうだろうな。『四天王』って高々名前つけられてるくらいだし。」

パ「さて後は、十二覇聖ね。その下よ。」

川「ああ。・・・なつ、こいつ・・・やっぱりそうだったのか!？」

パ「あら、見るなり驚くのね。」

何故かは簡単、メンバーリストに、さっき石田にワンダラーだと聞いた「12時過ぎのシンデレラ」がいる。

川「12時過ぎのシンデレラってワンダラーじゃなかったのか・・・」

パ「ああ、そいつは穴埋めよ。」

川「穴埋め・・・?」

パ「前にも言ったでしょ。流れていって足りない部分は他の奴呼んで補充するでしょって。」

川「・・・なるほど、どうりで石田さんも分からなかったわけだ・・・」

パ「そいつだけじゃないわ。他にも『真夜中の銀狼』がそうだわ。」

川「ほぅ・・・」

メンバーは次の通り。

黄色いNSX「黄金の疾風」と薄赤いワンエイティ「影の謀反者」、新環状の黄色いS15「ハードリフ」、その2エリアの青いセルシオ「ブループレッシャー」、横羽の白いZ32「クイーンズナイト」と紫のR32「パープルメテオ」、湾岸の白いユーノスコスモ「無冠の帝王」とピンクのスープラ「エキゾーストイブ」、その2エリアの赤いR34「紅の悪魔」。

またワンダラーからの参入で、湾岸の黄色いRX-8「12時過ぎのシンデレラ」、新環状のシルバーのR33「真夜中の銀狼」。

最後に待ち構えるは、迅帝とほぼ対等に渡り合う実力を持つ凄腕、白いFD「白いカリスマ」である。

パ「影の謀反者は新環状からC1に移ったみたいね。あと横羽と湾岸を攻めるのが、エキゾーストイブから紅の悪魔に変わってるわ。」
川「なるほどね。こっちも文字通り12人か……。」

パ「白いカリスマは特に危険みたいね。殆ど迅帝と大差ないバトルを繰り広げたっていう情報があるわ。」

川「そんなにつええのか……。」

パ「ええ。次に問題なのは、ブループレッシャーと紅の悪魔辺りかしらね。2エリアを任されてるから、それなりに実力はあるわよ。特に紅の悪魔はそうらしいわ。」

川「へえ……。」

パ「……どう？名前とマシンとステッカーだけだけど。」

川「どうだかな……どいつも強そうなのは確かだけどな……まあ実際、戦ってみないと分からないよな。」

パ「それはそうね。まあでも、予め何のマシンかは分かったでしょう？」

川「ああ。」

パ「速ければ速い奴ほど1000馬力級になっていくって考えるのが簡単かもしれないけど……どうかしらね……。」

川「ああ……。」

パ「厳しいバトルは多くなるだろうけど、まあ頑張りなさいよ。」

川「はいよ。サンキュー。」

そんなわけで魔理沙を呼び戻す。

霧「へえ、昨日戦った奴は一匹狼と思ったら十二覇聖のお仲間でした、と。」

川「ああ。あとで聞いた話だとワンダラーだって話だったんだが、十二覇聖に新たに入った奴だったとはな。」

霧「なるほどな。で、今まで4人倒したから後は21人と……。」

川「ああ……ん？」

「あら、ほんとに外の世界の普通の人間がやってきてるとはね。珍しいわ。」

そこにいたのは子供みたいな感じの女・・・背中に妙な羽を生やしている。妖怪だ。

霧「こいつぁレミリア・スカーレットっていう吸血鬼だ。この屋敷の主人やつてる。」

川「この屋敷の・・・？吸血鬼が、か？」

レ「初めまして。貴方の事は咲夜から聞いてるわ。『一瞬で吹き去る銀の風』川内祐馬。」

川「ああ。初めまして、だな。」

レ「あんまり驚かないのね、血を吸う妖怪を目の前にしてるっていうのに。」

川「まーな。この世界に妖怪がそこらじゅういるって事は分かってるからな。」

レ「なかなか面白いわね。・・・で、パチエの情報は役に立ったのかしら？」

川「パチエ・・・ああ、パチユリーか。もちろん役に立ったぜ。」

レ「なら良かったわね。パチエはなんでも調べられるから。」

川「そうか。」

レ「まっ、それだけよ。それじゃあね。魔理沙も。」

川「ああ。」

霧「じゃあな。」

外へと出た。

川「・・・なんだか、またここに関して情報をもらおう気がしてしょうがないな・・・」

霧「幻想郷にもいっぱい情報収集できる奴なんて私を知る限りでも数人いるんだけどな、当たったのがパチユリーだったって感じだな。まあ射命丸もだけど。」

川「そうなのか・・・。あっ、門番が起きてるな。」

霧「ほんとだ。」

門番がこちらを見ている。

「ふう〜む・・・」

霧「何を勘定してるんだ、美鈴？」

「・・・やっぱり外の世界の人間かあ、珍しい・・・。」

川「やっぱあんたにも分かるか。」

「まあ。私も首都高攻めてる身ですからねえ。」

川「あんたも首都高攻めてるのか・・・。」

「ええ。あつ、私は紅美鈴ほんめいりんと申します。そのGTOが愛機。」

川「へえ。中国人か？」

紅「中国？・・・ああ、外の世界のね。違う違う、妖怪。」

川「妖怪かあ・・・？何の妖怪だったんだ？」

紅「それが自分でもよく分からないんですよ。」

川「駄目じゃん。」

霧「実際私が戦ったときも、そんな妖怪って感じは無かったもんない。まあまあそんなわけでとりあえず失礼するぜ。」

紅「ほいほい。」

来た道に戻っていく・・・

霧「とりあえずこつから神社までも護衛でついとくぜ。」

川「おつ、サンキュー。」

更に道を進む。そうして神社へ。

博「おつ、お帰り。」

川「ただいまつと。」

霧「それじゃ私は早速宴会に混ざるぜ。」

博「・・・あれっ？私魔理沙に連絡したっけ？」

霧「したじゃないか。後20分くらいで行こうとしたところに祐馬が来たんだよ。」

博「そうだったの・・・。」

川「・・・魔理沙が知ってたって、俺も知らなかったんだが・・・

伊「ほれ魔理沙、酒、酒。」

霧「あいよつ。」

川「（呑んべえだな・・・萃香ってのは早速顔が赤いっていうか・・・）まあそいじゃ俺は外の世界に帰らせてもらっぜ。」

伊「え〜っ？酒飲んでけばいいじゃん。」

川「こつちの世界では違反だつてーの。」

伊「な〜んだ、つまんないの。」

博「まあまあ、それじゃこつち来てね。」

川「ほい。」

そしてすぐに再び結界を抜けた。

博「それじゃ、今夜も現れるかもしれないし、頑張りなさい。目指すは迅帝とかいう伝説の奴でしょ。」

川「ああ。あいつを倒すまでは首都高を攻め続けないな。」

博「それじゃあね。また何かあつたら連絡するわ。」

川「サンキュー。」

祐馬は一旦帰路についた。

・・・幻想郷に入ってみて、予想よりも激しくない場所だと感じた祐馬。

川「（またあの世界に入ることは・・・確実にあるな・・・。まあとにかく、今夜も首都高行くぜ。）」

23:12 レインボーブリッジ付近・・・

川「（久しぶりの雨だな・・・でもレインタイヤはいてきたし大丈夫だろ。）」

最近の雨は昼に降って夜は大体止んでいる事が多かった。それまでに道路も大体乾いていたのでレインタイヤを装着したり雨用セツティングをする必要もさほど無かった。

しかし、今日は降っている。大降りでも小雨でもない、普通の雨だ。そんな中現在新環状左回りを走行し、羽田線からC1外回りに入るところ・・・

川「（これからどんどん、湾岸とか横羽のも出てくるかね・・・。つとあ、来やがったな？）」

芝公園にて待ち伏せがいた。シルビアが過ぎると同時に発進し、パッシングを放つ。

川「(あいつぁ・・・黄色のNSX・・・C1のやつだから、黄金の疾風か!)」

黄金の疾風・・・十二覇聖のメンバーである。ライトは固定化されていて、フロントバンパーも変えられている。

川「(NSX・・・あんなマシンでどれほどのもんなんだかな・・・それよりも、流石にこの雨で勝負が早く終わっちまうのはやめてほしいところだな。さぁ、行くぜ!)」

バトルがスタート。現在芝公園を過ぎたところである。

川「(雨でも十分加速できてるじゃねえか・・・!そうじゃねえと面白くないしな!熱いレインバトルと行こうぜ!)」

180km/h程で右コーナーを滑らせる二台。

川「(なかなか安定してるな・・・。若干尻が暴れるかと思ったらそんなの無かったかのように安定させてくる・・・。)」

一般車を一台パスし、そこから250km/hまで加速するシルビア。NSXも240km/hでついてくる。

そこから赤坂ストレートで二台とも300km/h付近をマーク。雨なので300km/hを超えずに行く。その直後にフルブレーキング。ドリフトで右コーナーを抜け、直後の左コーナーを軽く滑らせて抜ける。

川「(十二覇聖もまだ序盤つてのにはええな。まあ、ずっと前に迅帝が初めて負けた後に対抗したくらいだからな。そのくらいの實力はある、か。)」

霞ヶ関トンネル。190km/hで左コーナーを抜けていく。

NSXはコーナリング中に一般車が車線変更するところをギリギリで通過した。びびってはいないのが幸いし、そこから一気に加速する。

川「(・・・一般車を急いで抜く勢いで猛加速かよ・・・!)」

そこから一気に加速できるだけ加速していき右コーナーを抜ける。

立ち上がり加速で200km/hへ、一旦トンネルを出る左コーナーが迫る。

川「（この様子だとミスさえしなきゃあパスされる状況にはならねえか・・本気で引き離しにかかるかつちよおいつ!?!?）」
コーナー出口の右車線、プリウスとアテンザの接触事故が丁度起きていた。

環状線を走っていたアテンザが、普通に曲がるにしては明らかにオーバースピードで進入、アウトに膨らみ、霞ヶ関入り口からやってきたプリウスに接触し、アテンザはそのままコーナー出口で壁に突っ込んだ。プリウスはスピンしている。
ガシャツという音がしたので普通に気づいた。

川「（ひゃひゃさせやがって・・!?!?!）」
フルブレーキングで130km/hまで減速、ほぼインベタで抜けてアテンザをパスした。

NSXは・・・
川「（でも・・・今のお陰で終わったかな・・・）」

NSXはプリウスがスピンしてたのに気づいたので、それをシルビアが気をつけて思いっきり減速してるのだと思って、同じく思いっきり減速しつつ右から狙った。

だがアテンザがいる。そこから80km/hまで落とし、かわした。その間にシルビアは立ち上がりで猛加速、一気にNSXを突き放した。

川「（まだライトは見えるけど・・・消えたか・・・）」
NSXのライトが消えた。しばらく減速してみるが追いついては来ない。

川「（ふう・・・ったく、アテンザの奴は大きな怪我してなけりゃいいけどな。プリウスはスピンだから大丈夫だろ。・・・って、ん?）」

そのとき、再びライトが近づいてきた。・・・NSXのではない、別の奴だ。

川「（連戦かよ・・・またその手で来るってのか・・・!?!?マシンは・・・ワンエイティ・・影の謀反者だっけ?）」

影の謀反者、連戦を挑んできた。

川「（もちろんいいいぜ、まだまだバトルできる余裕はある！！）」
パッシングをハザードで返し、バトルはスタート。

レインバトル2戦目の幕開けだ。

川「（・・・これは・・・NSXよりは加速で劣っているか・・・
まあ、油断は出来ないけどな。）」

スタートダッシュから次のトンネルを抜けるコーナーまでに200
km/hを出すシルビア、対し180SXは170km/hといっ
たところか。

川「（我ながらいいドリフトだ。一般車もいねえから思いつきりド
リフトできる。）」
そこからの立ち上がりで更に180SXを引き離す。

川「（・・・もうレインバトル2連戦は終わりか・・・？バックミ
ラーから消えちまうぜ・・・？）」

トンネルを出て神田橋に向かう。既に差は100m程。

川「（だったら容赦はしねえ・・・！！）」

雨で滑りながらも200km/h以上をキープ、軽い水飛沫を上げ
ながら幾多のコーナーを駆け抜けていく。

川「（終わりだ。）」
そして神田橋に入り・・・180SXのライトは完全にミラーから
消えた。

川「（2戦目は全然大したバトルじゃなかったな・・・それとも、
ドライだったらもつといけてたつてか？それだったら残念だけどな
・・・さて、流石に3連戦はないな・・・とりあえず、十二覇聖
のC1の相手は撃破か。まあ、新環状とC1を攻めてるブループレ
ッシャーがいるけどな。とりあえずもうちょい攻めますか・・・）」
その後、3回くらいバトルした後、帰って行った。

自宅にて石田と電話中・・・

石「なるほど・・・12時過ぎのシンデレラは実は十二覇聖の一員

だったか。」

川「ええ。後は新環状の『真夜中の銀狼』も。」

石「真夜中の銀狼・・・あのR33か・・・そいつも油断しないほうがいいぜ。なかなかワンダラーじゃ筋のある奴だ。」

川「そうっすか・・・まあとにかくこれで合計6人撃破、案外早いもんです。」

石「だな。連日現れてくれるから、お前にとつちやいいもんだろ。」

川「そうですね。それじゃ。」

ピッ

川「(あとは迅帝も含め19人が・・・明日はどんな奴が出てくるか・・・)」

次の日の22:49・・・

川「(さあて、今日もとつちめるやつはとつちめるぜ。まだ全エリアにライバルは残ってるけど、最近の様子だと新環状がC1にいるっぽいよな。)」

神田橋から入ってC1内回りへスタート。本日も雨が降っているが、妙に霧っぽい感じである。

川「(さあて、C1で残ってる奴はルシファー大塚だっけか・・・？黒のS2000、だっけ。)」

しばらく150km/hを維持して走る・・・

川「(うゝむ・・・ここまで走ってるけど、それらしいのはいないか・・・にしても霧とは久しぶりだよな。まあ濃くはないからいいけどな・・・薄くも無いけど。この視界悪化がレース展開を左右するってな。)」

そんなこんなで霞ヶ関トンネルを抜けた。

川「(赤坂にもいねえ・・・もうちょい先行って、いなければ新環状・・・って、そこで来るのかよ・・・!)」

谷町JCT、渋谷線から一台のマシンがシルビアに向けてパッシングするのが見えた。

ハザードを出そうとする。が、祐馬は相手のマシンを見て思った。

川「(黒いS2000・・・のように見える・・・けど違う・・・

?S2000はあんな下のところにヘッドライトはついてねえはず・

・・・いや、思い出した。なんかの雑誌で見たんだ!」

S2000のようなフォルムに見えるが、ライトの位置が明らかにS2000より下である。あれをS2000だとすぐに断言は出来なかった。

しかし、祐馬は昔ある車雑誌を見ていたおかげで思い出した。

S2000は確かなのだ。だがただのS2000ではない。

川「(S2000のプロトタイプだ・・・!!なんでそんなマシンに乗ってるってんだ・・・!?)」

AP1よりも前のS2000、プロトタイプマシンである。

川「(まあとにかく、だとすればあいつはルシファー大塚って事になるよな・・・!!)」

ルシファー大塚・・・迅帝が初敗北する当時に組んでいた時は十三鬼将のメンバーであったが、脱退していた。

だがいつの間にか、峠へ攻め入る際に再び復帰したという者である。

川「(よし、気い引き締めていくぜ!!)」

バトルがスタートする。

川「(どこまでついてこれる・・・!!?この霧の中でな!)」

加速ではあまり差は無い。しかしじわじわと離されるS2000。

川「(最初のコーナー・・・うおお・・・やっばいいコーナリングじゃねえか・・・)」

シルビアは軽く滑らせて抜ける。対しS2000は減速してグリッ

プ走行。

路面は濡れているが、それでも車体が揺らぐ事は無い。

川「(なんだか、あの眼光が妙に恐ろしく見えるな・・・。プロトタイプと普通のじゃそんな違いもあるとはな。)」

更に左コーナー。先ほどの勢いそのままに抜けていく二台。そして芝公園の連続コーナーへ進入する。

200km/h弱で突っ込んでいく二台……。

川「(はええ……コーナリングで煽られる感じが……!)」
完璧なグリップでコーナーを曲がっていくS2000。シルビアは若干滑るせいであちらのコーナリングスピードよりも少し遅かった。ブロックできているお陰で抜かれることは無かったが。

間もなく浜崎橋JCTが迫る。

川「(次の左コーナーで勝負かけてみつか……)」
いつもより数割増しのスピードで浜崎橋JCTの銀座方面へ向かうコーナーへ進入。

川「(ちよつとでも離せるなら……!)」
イン側にいる一般車をかわしつつ、アウトから一気に高速ドリフト。川「(これでどうだ……って言っても……いや……?)」
これでもついてくるかと思っていた祐馬だが違った。

一般車のドライバーは真横をドリフトで抜けるシルビアにややびびったのか少しふらつく。それに危険を感じたS2000は、シルビアとは逆にいつもより遅いコーナリングスピードで進入した。もう既に200mは差があるだろうか。

川「(……消えた……ありやあ、ギブアップかな……)」
祐馬の勝利が決まった。

川「(まだ安心できないぜ。問題はまた連続で来るのか来ないのか……って、もう来てるし。)」

後ろに別のマシンが迫ってきた。またまた、2連続バトルのようだ。川「(今度は……赤のソアラ……『シタール兼山』か……)」
カーボンボンネットに、チューナーメーカーのステッカーをドアに貼った赤いソアラ、シタール兼山である。

兼山も大塚と同様に十三鬼将復帰組。スープラも所持しているが峠用だとのこと。

川「(それじゃ2戦目、行くぜ!!)」
汐留JCTを過ぎたトンネル前、2戦目がスタートする。まだまだ霧はかかっている、道も濡れている。

川「（最初のコーナーはついてこれてるな。さあ、こっからだ。」
目の前の一般車をパスして立ち上がり加速。

川「（ついてくるか。ソアラにしちゃあいい加速だ。」
そこからストレートで加速。

川「（・・・うおっとお・・・マシンが応えてきてるわけじゃないな・・・）」

ブレーキングの調整ミスで若干不安定になるがすぐに立て直す。
濡れた路面だからだろうか。

川「（とりあえずグリップ・・・っちい、迫ってきやがる・・・！）」
コーナーでソアラが真後ろに迫る。

川「（こんなところで張り付かれるのは趣味じゃないんでねえ・・・！）」
立ち上がりでソアラに勝り、離す。

そこから一気に200km/hへ加速する二台。

川「（ちつとは離れたか・・・）」
一つ目の分離帯を過ぎる。

川「（・・・あうちっ！）」
2つ目の分離帯の前にあるコーナーでケツが少し不安定になるがすぐに立て直す。水飛沫が若干激しかった。

川「（ふう・・・おっ、ソアラもつられたのか・・・？）」

ソアラは膨らみそうになっていた。こちらもすぐに立て直す。
そして2つ目の分離帯を抜けた。

川「（こっからの加速・・・！江戸橋は新環状行っておくか、あつち
ちは新環状がテリトリーのはずだしな・・・！

一気に230km/hを突破する。そこからの加速に差があった。
川「（こっからの加速じゃ勝ってるか・・・！まあでも、そろそろ
減速しねえと・・・）」

少し離れた後、JCT前の坂でジャンプを最低限抑えるように減速。
坂を上りきったら向島線のほうへ向かう。

そして更に減速してドリフトでコーナーを抜ける。

しかし・・・

川「（・・・どうした・・・なんだそれ、もうギブアップってか・・・？お前の一番得意なところに入るってのに・・・）」

ソアラがコーナーを抜けると再加速もせずスローダウン。兼山もギブアップのようだ。

川「（まあ、こつちとしては勝てるからいいけど・・・よし、これで残るは17にn・・・!?)」

また別のマシンがやってきた。パッシングを放つそのマシンは、やっぱりソアラではない・・・

川「（つちい、初の3連続ってか・・・!?)」

3連続バトル・・・祐馬にとっては初めてである。

川「（相手は・・・シルバーのスーパー・・・『ステイルハート』か!!)」

TRDのフルエアロに、所々に貼り付けされたTRDのステッカーが勇ましいそのシルバーのスーパー・・・「ステイルハート」だ。川「（新環状では俺がやるっていうわけか・・・よし、十三鬼将3連戦ラスト・・・だろうけど。流石に4戦目はないだろ・・・まあとにかく行くぜ!）」

バトルがスタートする。霧が段々と雨に変わってきた。

川「（つほー、殆ど加速が変わらないな。）」

右コーナーを抜けて下り坂の加速、二台とも負けず劣らずで加速していく。

次の右、左のコーナーも普通にクリア。だが次の右コーナー。

川「（ちよっ、いきなり仕掛けるってか・・・!?)」

アウトから狙おうとするスーパー。

川「（そうはさせん・・・っ!?)」

アウトをブロックするとスーパーはそこからインにもぐりこみ、シルビアをパスした。

川「（挑戦された身としちゃあ久しぶりにこんな早く抜かれたな・・・まあ、それが伝説の集団の一員とのバトルってか?)」

コーナーを抜けるなりスープラに張り付く。

川「(離れ・・・てはいないな。スリップについてなくても普通についていけるか・・・?)」

辰巳JCTまでの高速区間、二台とも300km/hを突破し、そこから余力を余すことなくガンガン加速していく。

そんな時、霧は本格的に雨となった。

川「(ワイパー動かすか・・・結局今日もレインバトルだな・・・)」

そうしてるうちに右の緩いコーナーが迫る。

川「(・・・?立ち上がりであっちが遅い・・・?)」

緩いコーナーの立ち上がりでスープラが負けていた。間もなく辰巳JCT。

川「(当然右だよな・・・って、これはきたか!?)」

湾岸線下り方面へ進み、一気に減速して右コーナーへ進入するところ、スープラがアンダーを出しスピノ気味になる。

川「(なんだなんだ、路面はさっきより濡れてるだろ・・・?前はもらうぜ。)」

インについてスープラをパス。湾岸線へ。

川「(このまま湾岸から台場線か・・・ここからの加速勝負によっちゃあ台場線で決着つくか・・・!?)」

スープラは立ち上がりが少々上手くいかなかったがシルビアはいつもどおりの立ち上がり。有明JCTへ向けてめいっばい加速する。

川「(よし、300km/h・・・!これで結構離れたか・・・?)」

大体200mは差があった。まだまだ加速していく。

そして有明JCTへ進入、台場線へ向かい、右コーナーへ。

川「(いけええっ・・・!)」

300km/h以下まで減速。一般車もいないので、高速ドリフトを華麗に決めた。

川「(よし・・・さて、これで見えなくなっただか・・・)」

その後再び300km/h付近まで加速して、左の緩いコーナーか

ら右コーナー、そしてレインボーブリッジへ・・・。
バックミラーからスープラは完全に消えた。

川「（・・・よし・・・っああ、流石にああいう相手を3戦、しかも連続でやるとなると・・・ちつとは精神的にくるもんがあるな・・・まあとにかく、これで残るは16人か・・・。）
とりあえずこれで祐馬は家に帰った。

自宅にて

川「十三鬼将は、C1は四天王のダイングスターを除けば全員撃破、新環状は、四天王の夢見の精霊を除けば嘆きのプルートのだけか・・・十二覇聖も残ってるし・・・横羽と湾岸の奴らは、そいつらを相手にした後かな。」

川「ん・・・霊夢・・・どうしたんだ？」

ピッ
川「もしもし？」

博「祐馬よね？さっき文々の射命丸に電話番号教えといたわ。勝手に教えたけどあつちが教えろってどうしても言うからさ。あつちから聞きに来たんだけど。これで取材もしやすくなるじゃない。」
川「ああ、そういう報告ね・・・射命丸さんなら、教えないつっても俺みたいなのだと粘るか・・・まあ、あつちとしては確かに取材がしやすくなるな・・・ってことは毎日毎日電話かかってくる可能性があるってのか？俺が今十三鬼将やら十二覇聖やらとやってるし。」

博「そうじゃないの？まっ、それだけよ。」

川「ああ。サンキュー。」
ピッ

川「うおっ・・・」

霊夢からの電話を切った瞬間に相手不明の電話がかかってきた。

川「・・・まさかこれが・・・」
ピッ

川「もしもし？」

射「どうも、『一瞬で吹き去る銀の風』さん。博麗の巫女から事情は聞きましたか？」

川「やつぱり・・・丁度貴方の電話がかかってくる前まで霊夢と話してたんですよ。」

射「OKですね。それじゃこれから取材するときは電話しますね。」

川「ほいほい。」

射「それじゃ早速取材いいですか？」

川「あれでしょ？十三鬼将与十二覇聖の話。今日はルシファー大塚、シタール兼山、ステイルハートの3連戦でしたよ。」

射「うおお、やつぱり連戦で来ましたか・・・」
そんなこんなで取材を受けて就寝・・・。

厚「・・・というわけらしい。リーダーから聞いた話だけだな。」

川「なるほど・・・。謎の追っかけで十三鬼将、十二覇聖の誰かが負けたら即座に連戦を申し込むってのか・・・」

厚井から十三鬼将・十二覇聖が連戦を仕掛けてくることについて、リーダーから話を聞いていたようだ。

厚「一体全体、どうやって負けた後にすぐ追いついてバトル仕掛けられるんだろっかな・・・」

川「ほんと謎だな・・・普通についてきてるとかじゃないっばいんだろ？」

厚「みたい、だけどな。」

川「ほー・・・」

厚「・・・おっと、そいじゃ俺らはもてぎで走行会行ってくる。」

川「そうか。頑張ってこいよ。」

厚「ああ。じゃあな。」

ピッ

川「(連戦はこれからも普通にあるだろうな・・・覚悟しとかねえと・・・)」

23:21・・・

川「(さーて今日は・・・つつつても、C1に残ってる奴はダイングスターだけでもんな。四天王のやつはまとめてかかってくるかもしれないし・・・新環状の奴らを相手にするか・・・右か左か・・・昨日右行つたから左行きますかね。)」

昨日、一昨日とは違った満天の星空の下、新環状左回りへ・・・。

川「(・・・そろそろ来そうな気配だけだな・・・ここまで来て十三鬼将、十二覇聖以外でバトル申し込んできたやつあいないんだから早く現れて欲しいもんだけどな・・・)」

辰巳PAを過ぎる。

・・・その瞬間、である。

川「(・・・来た!)」

辰巳JCTで、湾岸線下りからやってきたマシンにパッシングされた。

あの雰囲気は、奴らに違いない。

川「(・・・あいつは黄色のS15・・・『ハードリフ』か。ライティングイエロー一色だと思ったらレーシングストライプあるのか・・・)」

十二覇聖のメンバー、ハードリフ。緑のレーシングストライプが貼られている。

再び、同じマシンでのバトルだ。

川「(俺と同じマシンでバトルを挑む以上、絶対に気い抜くんじゃねえぞ・・・!さあ、行くぜ!!)」

今日も、奴らとのバトルがスタートした。

川「(・・・いい加速だが・・・ユウウツな天使と比べたら劣るか・

・?)」

ユウウツな天使のS15はついてこれていたが、ハードリフのS15は若干劣る。

川「(同胞相手に容赦はしないぜ。まだまだ加速っ……!)」

300km/h近くまで出し、木場辺りの左コーナーで減速。200km/h以下まで落とし、一般車进行处理するためグリップで抜ける。

川「(……ここで躊躇無しにドリフトかぁ……?迫ってこれるのかよ……!)」

ドリフトで祐馬シルビアに近づくハードリフ。

川「(もっかい立ち上がりで離すか……!)」

完全に張り付かれる寸前に立ち上がり加速開始。ハードリフを離す。

川「(次のコーナーはどうだ……?)」

200km/hでグリップ走行、同じ速度でも軽く滑らせて抜けていたハードリフを更に離す。

川「(粘ってる感じが見えてるぜ。でも、そろそろ終わらせる……)

!ちつと早いけどな、2戦目もあるかもと考えれば……!)」

300km/h付近まで加速し、間も無く箱崎JCT前というところまで来た。

そこでの減速、右コーナリング、そして直ぐ迫る左コーナーで完璧なドリフトを見せる祐馬シルビア。ハードリフはついていけなかった。

川「よし……(終わりか……まあでも、全然面白くねえバトルじゃなかったけどな……って、この様子だと久々に2戦目無しか……?まあそのほうが精神的に楽だけだな……)」
どうやら2戦目は無いようだ。

川「(十二覇聖で新環状の奴はまだ残ってるから来るかと思っただが違ったな。残るは15人つと……もうすぐ半分か……まあとりあえず、このまま帰るのもなんだし、ちよっくら走りますか……)

」

C1の銀座辺りを軽く流していく……。

しかし祐馬は気づいていない。……浜崎橋JCTで羽田線、更に次のJCTで台場線へ、つまり新環状へ再び進入したことが、2戦目のバトルの開始へと誘うものだとは。

その後、レインボーブリッジにて……

川「……おおう、痛車……セルシオの痛車は初めてだな……あれは確か……何かの漫画とかアニメのキャラだっけねえ……」
セルシオの痛車がレインボーブリッジに停まっていた。

祐馬は特に二次元美少女に対してさほどの興味があるわけではないが、深夜のアニメは何故か見ている。

理由は「寝る前に見るのがニュース以外これくらいしかないから」。実際、それなりに面白いらしい。

また、多少のエロ話にも一応対応できるらしい。

祐馬は実際痛車はどう思ってるのかというと……とりあえず気持ち悪くなければいいらしい。

で、そのセルシオだが、サイドドア、リアウィンドウ、ボンネットにバンツと二次元美少女のバイナルが貼られており、またそのアニメのだと思われるステッカーも貼られていた。

川「(フロントのが公道走るにやあ少々勇気がいりそうだが……つておいおい、マジかよ……?)」

シルビアが過ぎた瞬間、セルシオが発進。シルビアにパッシングしてきた。

川「(その痛車に乗りながら走り屋つてのか……?……いやちよいとまで……あいつ……まさかとは思うが……) 嘆きのプルート」か……!?(?)」

十三鬼将……新環状のセルシオ、嘆きのプルート。プルート=冥王星の通りに、昔は冥王星が中心にある銀河のバイナルが貼られていたが、ドライバー自身が好きな二次元美少女の痛車を作ってみるのもいいだろうという事で作ったらしい。

川：「（痛車つてことでそんなの最初つからは考えられなかった・・・マジかよ・・・まあそんな事は今は考えるな、相手は十三鬼将だ・・・痛車つつたつて、中身は化けもんかもしれないねえし・・・!）」
ハザードを出し、バトルがスタートする。結局、連戦とはならずとも2戦目をやる事となった。

川：「（加速に重たさがあるようだがそれでも速い、か・・・）」
レインボーブリッジを過ぎる。依然、加速し続ける二台。

川：「このまま有明で湾岸下り行けばミッドナイトローズがいるのかね・・・とりあえず新環状行くけどな・・・苦戦もしてねえのに湾岸で高速バトル持ち込んでつまらないバトルになるかもしれないなら行く必要性は皆無だし。まあ辰巳までもどつちにしろ湾岸だけだな。」

300km/h付近に達したところでJCTが迫るシルビア。セルシオは260km/h程。差は開いている。

川：「よし、いいドリフトだぜ・・・つて、おお、中々豪快に決めてくるな。」

ドリフトで抜ける二台。セルシオは図体がでかいながらも豪快にケツを振ってドリフトさせていく。

川：「（痛車だからって十三鬼将の一員つてのを忘れるなよつてことか・・・なんでそんなボスクラスの奴が痛車・・・？まあその手の車が一緒に好きつてとこだろうけど・・・。）」

そこから300km/hめがけて加速する二台。

川：「・・・あつちの粘りはどこまで持つのかねえ・・・!）」
辰巳JCTへ進入する。

川：「（とりあえず、ここで決着つけられるかどうか・・・前方一般車一台、あそこであつちが手こずるかどうか・・・無いとは思つが・・・）」

ドリフトでコーナーを抜ける。一般車もパス。

川：「これでどうだ・・・まあ、あんな程度の隙間なんてこのレベルに来れば軽々抜けられるか。でもここで大分差は開いてるぜ。」

次の木場のコーナーで終わりにする！」

再び猛加速。セルシオを離していく。

そして木場……

川「(いけえええ!!)」

300km/h超から一気に減速、ドリフト。

川「(セルシオは……とっくに見えてないか……もうギブアップだろうな……)」

嘆きのプルートに勝利した。

川「(あつちがセルシオで、あんなとこで待ち伏せされてなかったらただの痛車だと思ひ込んでなかったらうな……まあとにかく、今日は十二覇聖も十三鬼将も一人ずつ撃破出来たしな。新環状で残ってる奴は、十二覇聖の二人と十三鬼将の四天王か……さて、とりあえず今日は家に帰りますかね……)」

とりあえず帰宅する。

川「(にしてもまあ、最近は走り屋系のアニメなんざやりやしないって感じだもんな……まあそういうのに関心がある人が少ないわけだしな……)。おつ、親父……)」

親父からのメールが届いている。

「3日後に帰ることになった。楽しみに待つもよしだぜ。でこの前の返事だが……そんな強い集団と戦ってるってのか……なるほどねえ……まあそういうわけだ。」

川「(あんま興味無さそうだな。まあでも、3日後か……楽しみに待つとするかね。)」

そして眠りについた。

次の日……。

)

川「ん……霊夢か……(今度は何だ……?)」

ピッ

川「もしもし？」

博「祐馬ね。最初に言っておくけど十三鬼将と十二覇聖の話じゃないわ。」

川「なんだ、どうしたってんだ？」

博「恐らくだけど・・・白玉楼の奴らが貴方に興味を持つてるかもしれないわ。」

川「白玉楼？どついう奴らなんだ？」

博「まあそのまま幽霊の集まりね。一人は半分だけ幽霊らしいけど。」

川「おお・・・幽霊ねえ・・・」

博「奴ら、あんたらの世界では箱根の峠を攻めてるらしいんだけど・・・この前その半分幽霊の奴が、西行寺幽々子（さいぎょうじゆうげいこ）に頼まれたから、首都高行つて箱根に誘ってみるとか言ってたわ。」

川「へえ・・・西行寺幽々子つてのは、その白玉楼だかの一番偉い奴か？」

博「まあ偉いつちやあ一番偉いわね。チェイサーに乗ってるわ。」

川「チェイサーで箱根か・・・ふん・・・」

博「因みにその幽々子の家で庭師やつてる半分幽霊つてのが魂魄妖夢（うま）。Z32に乗ってる。妖夢には半分の幽霊がすぐそこで浮いてるから見つける分には分かりやすいわよ。」

川「ほう・・・そいつが首都高に来るかもしれないとな・・・」

博「まあそついう事ね。今日辺り来るんじゃないの？」

川「そつか・・・（峠への誘い、か・・・要するにバトルしたいんだらうけど。）」

実際祐馬は峠は一度も攻めた事がない。だが全く関心が無いわけではない模様。

博「ほんとに誘われたらどうするつもり？十三鬼将と十二覇聖のものあるんでしょ？」

川「つつても、毎日そついうのと相手してばっかだったから、たまには奴ら以外のと相手するのも息抜きになるかもしれないな。とり

あえず、誘いにはのるつもり。」

博「へえ〜。まあ、そんな強い奴らとばかりバトルしてたら飽きるだろうし。」

川「まあ、そういうわけじゃないんだが・・・とりあえず、十三鬼将、十二覇聖を探しつつ、そいつがいたら話してみる。」

博「分かったわ。それじゃ。」
ピッ

川「(箱根の峠ねえ・・・どここの峠だ・・・まあ箱根つつたら大概国道1号のあそこだけど・・・まっ、とにかく、今日も攻めないとな。)」

23:32 有明JCTにて

川「(十三鬼将は、四天王と迅帝を除けば残る奴はミッドナイトロイズのみ・・・新環状の奴よりも、そちを片付けられるなら片しといたほうがいいかな。霊夢が言っていたZ32も、箱根の奴なら横浜環状にでもいるだろう。)」

有明JCTから湾岸線下りへ・・・

川「(・・・まだいないか・・・どこにいやがる・・・?それとも下りじゃなくて上りにいるのか、はたまたそもそもないのか・・・?)」

大井JCTはとうに過ぎ、間も無く東海JCT。

川「(・・・おっとお、発見かな・・・)」

目の前に赤いGTOがいる。バイナルも貼っており、それなりの雰囲気祐馬には感じ取れる。

試しに追い越すと・・・

川「(・・・当たりだな。)」

間違いなく、ミッドナイトロイズだ。

ミッドナイトロイズといえば、十二覇聖時代だとC1を攻める下っ端だったらしい。その頃はリトラクタブルであったZ15Aに乗っ

・・・二台は同じ車線を走行中。前方に一般車が迫る。

二台とも左右に分かれて回避する。当然二台ともほんの少し減速。

川「(ちつと汚いかもしれないが・・・!)」

そのまま車線を走行せず、逆にGTOへと寄せていく。

・・・あちらもまだその気だったようで、突然寄せてきたシルビアに少しびびったのか更に減速、シルビアに引き離されていく。

川「(これでどうなるか・・・このまま勝つか、それともついてくるか・・・)」

結果は・・・

川「(・・・まつ、ついてくるよな・・・となると、こつからは湾岸線が終わるまで精神的にきつくなるな・・・)」

ブロックし続けるシルビア。GTOも何とか揺さぶっているが、シルビアは一向に乱れない・・・。

川「(・・・このままつばさ橋までバトルが続くか・・・それともまだその先まで行くか・・・)」

バトルはつばさ橋付近まで続いていた。展開は全く無い。

・・・と、そのときである。

川「(・・・おおっ・・・ギブアップか・・・?)」

GTOがスローダウンした。流石にもう無理だと思ったのだろうか。これで、祐馬の勝利が決まった。

川「(ふう・・・湾岸線のバトルつつても長すぎたかな・・・流石に2戦目は無しと・・・)」

そのままスローダウンする。

川「(さてはて、とりあえず大黒ふ頭で休んでから、そのZ32を探してみますかね・・・ほんとはあつちが探す身だけど・・・)」
大黒ふ頭へ向かう。

川「(・・・おっ、もしや・・・あの黄色のZ32は・・・まさかあいつか・・・?)」

PAに入る祐馬。・・・そこにZ32がいた。自分を探しているそれかは分からないが。

川「(あの女がドライバーだとすれば・・・そうだな・・・)」
PAから出てきた一人の女・・・幽霊と思われるものが浮いている。あいつがドライバーのようだ。

駐車場に停めると、シルビアの方に歩いてきた。

川「・・・よう、あんたが俺を箱根に誘い込もうとしてるって人か。」

「あれ・・・もしかして霊夢に聞いたのかしら？」

川「ああ。大丈夫だ、俺は誘いに乗るつもりだぜ。」

「なら話が早いわね。私は魂魄妖夢よ。霊夢が言ってたかもしれないけど。」

川「ああ、言ってたぜ。あのZ32に乗ってるんだろ？」

魂「ええ。・・・って言っても、ほんとにのってくれるの？十三鬼将だか十二覇聖だかの強い奴らと戦ってるって聞いたし、それにこれって幽々子様のちよつとした興味なのよ？」

川「いつも強い奴と戦ってばっかだからたまには息抜きって事だ。

それに、峠って攻めた事ないし。」

魂「そうなの・・・それじゃ・・・明日の20時辺り、箱根峠に来れるかしら。・・・場所はこれよ。」

川「(・・・思ってた通りか・・・)」

国道1号線の場所である。箱根駅伝のルートの一部としても設定されている場所だ。

魂「・・・いい？」

川「ああ。いいぜ。」

魂「それじゃ待ってるわよ。じゃあね。」

妖夢は去っていった。

川「(箱根のあそこの峠か・・・長尾とかヤビツよりはいいところかもな・・・)」

というわけで祐馬もコーヒー一杯飲んで、本線に復帰。横浜環状を少し攻めた後、帰っていった。

初めての峠、そして我が父（前書き）

箱根のコースレイアウトは街道バトルシリーズに出てくる箱根（国道1号線のあれ）がベースです。

初めての峠、そして我が父

次の日

川「よし、これでOKつと・・・」
整備場で足回りを確認し、一旦家に帰る。

数時間後・・・

川「さあて、そろそろ行きますかね・・・」
19:10、箱根峠へと向かう。首都高に乗り、湾岸線をかっ飛ばしていく・・・。

川「さてと、着いた着いた・・・ん・・・？いきなし挑戦者か・・・」

箱根峠のヒルクライムスタート地点とされている場所に着くと、駐車場にいたR34、アルテツア、180SXが動き出し、目の前を塞いだ。

ドライバーが降りてくる。黒い服を着たなんか暗そうな女、白い服を着た明るそうな女、そして赤い服を着た、白い服の女程ではないが明るそうな女。

川「・・・なんだなんだ、いきなり刺客か？」

「・・・気づいてたか・・・」

「まっ、そうだよ！いきなり幽々子様とか妖夢とかに戦わせはしないよっ！」

「というわけで、まずは私達、プリズムリバー三姉妹が相手させてもらうからねっ！」

川「三姉妹、か・・・。峠来て間もない俺にいきなり3VS1でもやるつもりなのか？」

「そうとは言っていないだろう。バトル形式は1VS1。」

「まずこの私、リリカが一番手。ヒルクライムバトルだからね！」

「それで次に挑むのが私、メルラン！ダウンヒルバトルだからね。」

それで最後に姉さんが相手！」

「ルナサよ。ヒルクライムをやらせてもらおうわ。マシンはR34よ。他の二人は、メルランがアルテツア、リリカがワンエイティね。」
川「ほーう・・・(てつきりあのメルランってのが一番背が高いし雰囲気的にもそうかと思っただが違ったか・・・っていうか、この三姉妹も幻想郷の奴、だよな・・・?)で、要するに、往復で次々と相手していくって事か。そりゃあ大変だな。」
ル「そういうことになるわね。私達に勝てば、幽々子様と妖夢が相手してくれるわ。」

川「興味で呼んだっつーのにそういうのがあるとはな・・・それでこれに負けたら幽々子様やらと戦えないって?」

メ「まあまあ、幽々子様も、戦いたいけど、私達の仲間に対抗できなくちゃどうしようもないって事らしいからね。」

川「そつか・・・まあいいぜ。早速行こうじゃねえか。」

ル「それじゃ私はここで待機、メルランは先行ってて。一応攻めてよ?練習がてら。」

メ「あーい、分かった分かった。」

ル「そんな軽い気持ちで挑んじゃ駄目。いくら試しついても本気でかからなくちゃいけないし、何と言っても相手は首都高の最速気を抜けばすg」

メ「はいはい、もう話はいいから、とりあえず先行くよ!」

メルランは上へといった。

ル「・・・はあ・・・リリカも同じよ、今日も絶対、手を抜いたら駄目だからね。」

リ「は〜い。(って言っても余裕で手、抜いちゃうけどね。)(」

川「(一番の姉さんらしく、優等生って感じが・・・)」
そしてグリッドに、二台が並ぶ。

相手の180SXは後期型、BOMEXのエアロを装着している。

川「(まずは最初の相手・・・って言ってもそれ以前に、まだ一度もこの峠を走った事ないっていう、な・・・まっでも、それでも攻

略して勝つてこそ、伝説に挑む者だよな！」

リ「（はあくあ、首都高のシルビアね）・・・私がわざわざ負けたら連戦だし・・・姉さん達より圧倒的に遅かったら絶対に見破られてがっかりするだろうし、ちよつと力抜いても・・・いや、あつちよりもパワーが無かつたら話よ。弾幕だったらこんなんでも手、抜けるのに・・・とにかく、とりあえず本気で攻めて、力抜けるところは力を抜く、と・・・よし、それで行こう！」

まずは箱根第1戦である。

ル「それじゃ、行くわよ！5、4、3、2、1、スタートっ！！」

箱根にシルビアの唸り声がこだまする・・・！

スタート直後に左コーナー、何でコーナーの目の前がスタートラインに設定されてるのかは不明。

スタートダッシュという感じには加速せず、グリップで抜けていく。イン側は180SXがいたため、そのまま前を180SXに譲るシルビア。

川「（まっ、前にいたほうがいいだろうけど。無理に行つてぶつかるよりはいいし。）」

リ「（前に出ちゃったか）・・・これじゃどうするかな、わざとなのを何とか隠すようにして抜かせるとかも・・・」

・・・さつきからリリ力は力を抜くことばかり考えているが、彼女はこういった事をやる際、あまり力をかけずに利益を得ることしか考えていない。

まあ車のときには手はあまり抜かないらしいのだが、姉2人がつるむ時は姉に完全任せ、自分はとりあえずやるだけで勝とうが勝てまいが後は姉さん達のことだからどうってことないわ、という感じである。

リ「（前に出ちゃつたら・・・次のコーナー辺りで抜いてもらうか！）」

川「（ストレートだな・・・）」

こっから次のヘアピンまでは道は狭いがそれなりに速度は出せる区

間。

川「（・・・少しあっちの挙動がおかしいか・・・こんなに早いとはな・・・）」

リ「（あ〜ん、なんで抜いてくれないの・・・!）」
隙間はあるがシルビア一台が入れるものではなかった。

川「（・・・ブレーキ・・・ヘアピンが見えた・・・!）」

リ「（よしっ、ここで行けっ!）」

川「（おおい!?!）」

180SXがドリフトに持ち込むところでミス（と見せかけた）。
そのままスピン。

川「（あっさりだが行かせてもらっぜ!）」

リ「（お先へどうぞ〜!）」

とりあえず、即座にスピンから復帰する180SX。

川「（まあ、前に出たけど、まだコースをよく知らない以上、全開は無理だな・・・）」

直後の右コーナーを抜ける。

180SXのリリカは・・・

リ「（ふう〜、これでよし!後は適当に攻めればいいだけ!）」
もう勝つ気なんて無い。

故に展開も無い・・・。

川「（・・・おっ、あのアルテツアが停まるところがゴールだな・・・?ならば、勝ちだな。よし、これで街道界最初の白星か。）」
祐馬が勝利した。ただ、白星っていうほどのもんでもなくなってしまうのだが。

川「（ざっとコースは分かったな・・・だけど次は、ダウンヒル・・・）」

そのまま駐車場へ。

そして丁度その時、180SXもやってきた。

メ「勝利おめでとー!〜!〜!とっりあえず、リリカには勝ったのね。」

川「ああ。コースの確認も出来たし。」

リ「ふう〜、おめでとー。速かったね〜！やっぱり首都高の人は違うなー（今日も作戦成功っと！）」

川「そうか。まっ、そういうわけで・・・早速2戦目、行くか。」

メ「OK!！」

グリッドに並べる2台。

あちらのアルテツアはトムスのエアロを装着、エンジン音を聞く限りそれなりのチューニングが施されている模様だ。

メ「（さーて、とりあえず本気攻め、姉さんまでには行かせないようにしないといけない、か。あつちはどれくらい速いのかな〜？）」

リ「それじゃカウントー!!5、4、3、2、1、スタートー!」
バトルがスタートする。

今回は普通に前に出る。先ほどとは違ってスタートで十分な加速が可能だからだ。

川「（前には出れたな・・・。後はこのまま、あつちがどうくるか・・・。）」

左コーナー直後に右ヘアピン。150km/h程でドリフトするシルビア。

アルテツアはそれを張り付いて追走する。

メ「（ここまでついていけるか〜。って、やばっ、そんなこと言った途端に加速で離されるとかつ!?!）」

川「（こっからはそれなりに加速できるはず・・・!）」
ヘアピンを二つ抜け、そこから190km/hで右、左と抜けていく。

メ「（いいラインだなー。なんであんなに簡単にベストライン走れるんだろ。）」

川「（ここはドリフトで抜けるか、いけええっ!）」
170km/hで右コーナーをドリフト。

川「（次は2連続のヘアピンか。）」
メ「（次のヘアピンでちょっと近づければいいけどな〜、さっきか

らのドラテク見てるとどうなんだろう？」

一気にドリフトを決めるシルビア、アルテツアも同様。

川「(あっちもなかなかだな。まあそりゃ、ホームだもんな。)」

次のヘアピンも難なくクリアし、次の左コーナーまでアクセル全開。

川「(あっちも離れてきてるぜ。次は堅実にグリップでいってみるか。)」

メ「(うおー、やっぱり立ち上がり加速速っ!)」

グリップで次のコーナーを抜ける。もう最終セクションに近いところだ。

ここからはしばらくコーナーが続く。

川「(次は随分テクニカルなところだったような。流しっぱなしは無理だな。。。)」

メ「(次のテクニカルセクションで一回くらいスピンしろあっ!)」
右コーナー、軽いドリフトで攻め、次の左コーナーも一気にケツを振って進入。

川「(いい感じだぜ。)」

メ「(うーん、まだまだ!)」

その後もコーナーを抜けていって最後の右ヘアピン、テクニカルセクションは終わった。後は、道は狭いがそれなりに速度は出せる区間。

ただしゴール直前に右低速コーナーがある。

川「(200km/hは越せるぜ。勝ったあああっ。。。!)」

メ「(くっつ、ここでこんなに離されてたら勝てないや)。)」

そして最後の右コーナーをドリフトで抜け、フィニッシュ。

祐馬の勝利だ。

川「(よし、これで2勝目。。。次が3戦目か。。。)」

ル「やっぱりメルランも無理か。。。となると、後は私、ね。。。」

メ「いやあ、速かった速かった。いい走りじゃん!」

川「おう、サンキュー。)」

ル「・・・それじゃ、最後は私よ。早速ラインに並んで。」

川「OK。」

グリッドに並べる2台。

相手は天下のR34GT-R。長谷見モータースポーツのエア口を装着している。なかなか速そうな感じだ。

川「(R34か・・・姉さんらしくレベルは高いだろうな。それじゃ、行くぜ。)」

メ「それじゃいっくよ〜!5、4、3、2、1、GO!」

一気に加速する。なかなかの好スタートで前に出たのはGT-R。

川「(・・・うおっ、前に出られちったか・・・)」

ル「(R34の加速を侮ったらいけないわよ。さあ、どう攻めて来るかしら。)」

どんどん加速して行く二台

川「(次のコーナーで行けるか・・・)」

ル「(立ち上がりでは勝ったけど、やっぱりついてくるわね・・・)」

GT-Rは先ほどの2台、アルテツァ・180SXと比べてそれなりに速かった。加速は当然のこと、四駆ながらも決められるドリフトも含めたドラテクも、3姉妹では一番上。

なのに初見の人だと大概メルランが長女だと思われてしまうルナサである。暗い雰囲気常在に漂っていて、メルランよりも背が低いからなのが主な理由である。

川「(一応上手くコーナーいけたけど流石にこれじゃ抜けないな。)」

ル「(いい処理ね・・・ドリフトでもラインはきっちりベストを走る・・・。)」

差はあまり無い。だが、まだシルビアは抜けそうに無い。

ル「(こっからの加速でどうなのか・・・次の2連続ヘアピンまで守ればいいけど・・・)」

高速区間へ。左コーナー、そして右と抜けつつ加速していく二台。

川「(なかなかいいブロックしてきやがる・・・!)」
ヘアピンへ進入。GT・Rの真後ろでドリフトしつつ抜けていくシルビア。

川「(もう一つ・・・)」
次はグリップで抜ける。

そこから加速していく。アクセルの踏みが先ほどと比べて弱い祐馬だが、GT・Rには普通についていけるくらいだった。

川「(さて、こっから加速して・・・次のヘアピン辺りでどうするか・・・)」

ル「(このまま最終セクション、あつちがどってくるかしら・・・)」
左コーナーを抜けて間も無くヘアピン。

ル「(・・・なっ、いない・・・っ!アウトをつくと思っていたのにインから・・・!?)」

川「(ありっ、案外簡単に並べたな。)」

ヘアピン手前の緩い右コーナー、アウトから狙うと見せかけ、GT・Rがブロックした瞬間にイン側へ。ただし、まだ並んでいる。

川「(次のヘアピンで抜ける・・・!)」

ル「(これじゃ無理・・・ね・・・。)」
シルビアがイン。そのままGT・Rをパスする。

川「(さて、とりあえず抜けたか。後はミスさえしなけりゃ勝てるだろ・・・!)」

次のヘアピンを抜け一気に加速。GT・Rは離されて行く。
ル「(くっ・・・追いつけない・・・)」

そうしてコーナーを抜けていき、最後のストレートへ。

川「(よし、これで三姉妹は撃破、だな。)」
祐馬が勝利した。

マシンから降りる二人。

ル「あー、やっぱり姉さんでも無理だったのか。」
川「そうね。前に出られたらもう手に負えない感じよ。」

川「でも、前に出るまではなかなかいいブロックキングだったじゃない

いか。」

ル「そうかしら、ありがとう。」

続いてアルテツアも合流した。

川「さて・・・これで幽々子とかいう人が出てくるってわけだな？」

ル「まあ、出てくるけどまだ一戦・・・」

川「まだあるのか？・・・って、ああ、そういえば確かに戦いそうなのと戦ってないな・・・」

ル「そろそろ来るはずだけど・・・ああそうそう、言い忘れてたけど、私達楽団やってるから、その辺も宜しく。」

川「楽団？」

メ「あゝっ、それが一番重要じゃん！その通り、私達はそこら中の峠に行ったりして音楽ライブやってるんだ！」

リ「結構皆楽しんでもらえるんだよね。あつ、なんなら今聴く？」

川「いや、もう俺を目当てにしてる人が来たみたいだからまた今度。」

メ「えっ・・・あつ、ほんとだ。」

トムスのエアロを装着したチェイサーに、昨日も見たインパルエアロのZ32・・・

川「（あの二台・・・だよな・・・妖夢っつーのもいるし・・・）」
チェイサーのドライバーと妖夢が降りてくる。

川「やっぱりな、名前どおりにお美しい方でしたか。西行寺幽々子、って言ったっけな。」

西「うふふ、そういうこと言ってくれるなんて嬉しいわね、幻想郷の妖怪でも誰もいった事ないのに。」

川「そうか。」

西「まあそれはいいとして、私が西行寺幽々子よ。このチェイサーに乗ってるわ。」

川「宜しく。川内祐馬だ。」

西「とりあえず、プリズムリバー姉妹に勝ったみたいね。おめでと
う。」

川「サンキュー。．．．つつつても、あんたが送り込んできたんだけどな。」

西「まあそうよね。って言っても、まだ妖夢と戦ってないわ。」
魂「というわけで、次は私が相手です。」

川「やっぱりな。肝心だと思ったのに出てこないと思ったら一番の手下っつてか。」

西「正確には庭師ですよ。」

魂「片付けとか完全まかせっきりですしね．．．。まあそんなわけで、早速行きますか。」

西「妖夢がまけたら、次は私の番よ。」

川「そうだな。」

西「妖夢も気を抜いちゃだめだからね。」

魂「そのくらい分かってますよ。」

西「因みに私もダウンヒルのつもりだから、もし勝ったら一度上がってきてね。」

川「了解。．．．ちゅーか、何で俺に興味持ったってんだ？やっぱ、首都高の伝説に迫ろうとしてる奴だから峠だとしても連れてくるぜって感じか？」

西「まあ、その通りかしらね。カウントはルナサ、お願いね。それ終わったら皆で待機よ。」

ル「はい。」

スタートラインに並べる2台。

川「（相手は一番弟子みてえな感じだもんな．．．まあそっちよりも剣術の方が長けてそうだけど。）」

昨日は無かったのだが、今日は剣を2本持っている妖夢である。

川「（二刀流か．．．俺には無理かもな。まっ、それよりもドラテクがどうかだな。）」

魂「（首都高の伝説か．．．ここは幽々子様の刺客として、勝利を阻止するのが役目．．．。とにかく、できるだけの事はやってみせるわー！）」

ル「それでは、いきます。5、4、3、2、1、スタート！」

スタート。加速で前に出たのはシルビア。

川「（スタートでは勝ったか。後はテクだな。）」

魂「（やっぱり加速勝負だとあっちに軍配が上がるわね・・・まあでも、何とかして抜きたいところね！）」

最初の2つの右コーナーを抜け、左コーナーへ。ドリフトで抜ける二台。

川「（なかなか綺麗なドリフトだな。次も・・・ドリフトで行くか。）」

左コーナーは軽めの振りだったので立て直し、右コーナーもドリフトで抜ける。

魂「（この速度でそこまでやってのけるのか・・・あそこまでいけるなんて、ほんとに峠は初めてなのかしら・・・）」

川「（さあ、こっからヘアピンまでの加速、ついてこれるか？）」

150km/hから立ち上がり加速。次のヘアピンまで一気に迫る。Z32は辛うじてついてきているところだが、じわじわと離された。

川「（まだまだついてこれてるな・・・）」

魂「（速い・・・！）」

一気に減速して左ヘアピンへ。

川「（少し離れた方がいい感じについてきてるじゃねえか・・・）」

2つのヘアピンを抜け加速する。

魂「（ここからは上手くラインを抜ければそれなりに迫れる・・・

といいけど・・・）」

速度を維持しつついくつかコーナーを抜け、右低速コーナー。ドリフトで抜ける二台。

川「（・・・少し近づかれちゃったか・・・？だが、次のヘアピンで・・・！）」

2連続ヘアピン、最初のヘアピンを豪快なドリフトで抜けて行くシルビア。

魂「（そんなドリフトを決めてくるのね・・・！）」

次のヘアピンもドリフト。そして再び一気に加速する。二台ともアクセル全開。

川「(まだついてくるか・・・!あと少しの連続コーナーで引き離せるか・・・?そこを抜ければ後はゴールまでミス無く行けばいい・・・!)」

200km/h程まで加速するシルビア。まだZ32は粘る。

魂「(もうすぐテクニカルセクション・・・ここまで来たらそこにかけるしかないわね・・・)」

緩い2つのコーナーを抜けて右コーナーに進入。

川「(あっちもまた綺麗にドリフトするな・・・!)」

魂「(あっちはもう高速ドリフトはお手の物って感じじゃない・・・!)」

2つ目のコーナーも一気に振っていく。

そんな感じで、最後のヘアピンまで抜けた。

川「(ここからはもう容赦はしないぜ・・・!)」

魂「(ここからどこまで粘れるか・・・抜きたいところだけど・・・!)」

200km/h、そこからもどんどん加速していくシルビア。Z32も200km/hを越すスピードで走行中。

川「(・・・よし、これで4戦目勝利・・・ふう。)」

最後の右コーナーでドリフトを決め、フィニッシュ。祐馬の勝利である。

川「なかなか速かったな。そうになると、幽々子は更に速いんだろうけど。」

魂「ええ。もちろん、幽々子様は速いですよ。にしても、とても今日初めて箱根にやってきたとは思えない走りでしたね。」

川「まあな。それなりに対処できるところはしといたし、4回も走れば本番に十分備えられるしな。」

魂「まあ、そうですね。」

川「それじゃ俺は早速上に戻る。」

魂「分かりました。私はここで待機です。」
頂上へと戻る。

川「(さて・・・次は5戦目、最終戦というわけだな・・・あのチェイサーねえ・・・)」

その後、頂上にて

西「・・・来ましたわね。」

川「ああ。妖夢には勝った、後はあんただけだ。」

西「そうですね。やっと貴方と戦えて嬉しいですね。」

川「(だからそこまで言うなら刺客なんぞ送らんでも(r y))」

西「私はこのチェイサーで行くわよ。それじゃ、早速始めましょうか。ルナサ、もう一度スタートお願い。」

ル「了解です。」

スタートに着く二台。

川「(実質5連戦か・・・十三鬼将と十二覇聖ほど精神的に厳しくは無いが強いことは確かだ。それに最後の幽々子、こいつは更に凄いと見た。)」

ル「それでは、いきます。5、4、3、2、1、スタート!」
スタートした。

川「(ほーう、互角・・・!)」

西「(ここは次のコーナーが最初の勝負、ね。)」
加速は互角である。

川「(ただこつちがアウトとなると・・・しかも相手はチェイサー・・・ブレーキング勝負しかけても前に出やすいとは思えないな。)」
コーナーでは前を譲り、チェイサーが前に出る。

西「(案外こういう場面だと無理せず譲ってくれるのね。それが仇になるかもしれないって言うのに。)」

川「(さて、このチェイサーを抜かすチャンスがどこで生まれるか・・・)」

次の左コーナー、ドリフトで抜けて行く二台。

川「（なかなか上手いな・・・そのチェイサーでそんな豪快なドリフトを決めるとはな。）」

次の右コーナーもなかなかのスピードでドリフトしつつ抜けていく。川「（立ち上がりもセダンにしちゃあいいもんだ。）」

西「（順調についてこれてるわね。いいドリフトも決めてるわ。でも、抜かせはしないわよ。）」

次のコーナー、再びドリフトする二台。

川「（あんま隙がありやしねえな・・・そのチェイサーに乗ってよくそこまでドライブできるな・・・！）」

ヘアピン2つを抜け立ち上がり加速。

川「（センターライン占拠か・・・これじゃ抜けやしねえ。）」
間も無く右低速、そしてその次の左を抜ければ2連続のヘアピン・

西「（凄いわね、あそこまで完璧なラインを通ってくるなんて。）」

川「（どこかでチャンスはできねえのかね・・・）」

右低速をブレーキングドリフトで抜けるチェイサー。シルビアもサイドブレーキを軽く引いてドリフトさせ、抜ける。

川「（ヘアピンはどうだ・・・）」

1つ目のヘアピンへ進入。綺麗にドリフトを決める二台。

川「（次は・・・）」

2つ目へ進入。同じくドリフトする。

川「（・・・来た！）」

西「（なっ、コーナー出口でインに入り込んできた・・・！？）」

チェイサーが出口でアウトにいるところを、シルビアはインにつき、加速でパスした。

川「（よし、これの前には出れたな。あとはあっちがどうするか、そしてそれを守っていけるか・・・）」

西「（そこで抜かれるとは思わなかったわ。さあ、気を取り直して追走しましょう。）」

次のテクニカルセクションへ向けてアクセル全開の二台。

川「(さあ、行くぜ・・・ついてこれっか?)」

左、右と抜けた後、右低速コーナーをドリフトで進入。

川「(今回もいいラインでいけてるぜ・・・!)」

西「(そんなスピードでこのコーナーを抜けるなんて、素晴らしいわね。)」

次の左コーナーも先ほどと変わらぬスピードで抜けていく。更に左コーナー、左低速、最後の右ヘアピン・・・
そして、やるべき事は最後の右コーナーまでアクセル全開で駆け抜けるのみとなった。

川「(それなりに離れたか・・・よし、いけ・・・!)」

西「(う〜ん・・・とりあえず、行ってみましょうか。)」

川「(・・・!?なんだ、あの加速・・・)」

先ほどよりも猛烈な加速で追いつけるチエイサー。

川「(くっ、ここじゃ守り切れねえ・・・!)」

不運にも緩い右コーナーで左車線にいたシルビア。チエイサーに迫られた。だが・・・抜かれはしなかった。

西「(ここまでかしら・・・それじゃ、ブレーキング勝負でおしまいよ。)」

川「(こうなったらブレーキング勝負か・・・!しかも俺はまたアウトかよ・・・最初のときみたいに遠慮は出来ねえ、抜けるか・・・!?)」

間もなく最終コーナーが迫る・・・。

川「(どうだ・・・っ!)」

西「(負けはしないわよ・・・!)」
ブレーキを踏み込む。

・・・
・・・

シルビアが持ちこたえた。

川「(つしゃああ・・・)」

西「(あら・・・アウトから行かれたわ・・・)」

そのままフィニッシュ、シルビアの勝利である。

川「（ふう・・・これで終わりか・・・）」

魂「（まさかのブレーキング勝負、か・・・凄いや・・・）」

西「ふう・・・（なかなかいいバトルだったわね。）」

二人はマシンから降りる。

川「まさか最後であんな加速見せてくれるとはな。最初っからあれでいけばよかつたじゃないか。」

西「まあそうですね、無理は程々につて事よ。」

川「そうか・・・それじゃ、俺はそろそろ帰らせてもらっぜ。」

西「あら？もうちょっといるかと思っただけ。」

川「いやまあ、とりあえず首都高に『奴ら』がいるかもしれないしな。」

西「なるほどね。それじゃ、また何か用があつたら、妖夢が霊夢を通して話してくれるわ。」

魂「やっぱりそういうことだと思った・・・」

西「もちろん、普通にこの箱根に来てくれてもいいのよ。普段なら走り屋もたくさんいるし。」

川「そうか・・・まっ、またの機会だな。じゃあな。」

そんなわけで、祐馬は帰っていった。

西「・・・川内祐馬・・・紫が言ってたような事は・・・確かにそんな雰囲気はあるわね。」

魂「・・・あつ、それを確かめるのすっかり忘れてた。」

西「確かめるんじゃないわ、雰囲気だけ感じ取ればいいのよ。まあ、雰囲気は似ていても、違う場合もあるだろうし。」

魂「そうですね・・・。」

西「あのスープラに関連して、首都高でシルビアに挑んでくるのかしらね、紫は。」

魂「どうなんですかね・・・迅帝だかが現れた一週間前に消えたんですけどっけ？」

西「ええ。」

川「（首都高の奴らとは言ったが、シルビア休ませとかなきゃいけないし、明日は親父が来るから、とりあえず家帰るつもりなんだけどな。というわけだから、とつと帰りますか……。）」
家に帰っていった。

その数十分後、祐馬の自宅にて

川「さーて、明日は親父が帰ってくるしな……（って言っても特にするには無いが……）まあいいや、寝よ」

川「こんな時に電話か……（射命丸さんか……）」
ピッ

射「ど〜も。今日はどうやら箱根の方まで行ったらしいですねえ。」

川「なつ、何故知ってる……」

射「博麗の巫女から聞きましてね。今日昼に神社行ったらそんな話を聞いたもんで。」

川「ああ、霊夢が……」

射「あの幽々子と妖夢、それにプリズムリバー楽団の3人とも戦ったみたいじゃないですか。」

川「まあ……」

そんな感じで取材を受けた後、眠りについた。

次の日、11:32

川「……おお、来たな……」

一台の70スープラが家にやってくる。走り屋っぽいマシン……間違いない親父だ。

川「お久しぶり、親父。」

「おう、お前が首都高攻め始める前に会って以来だっけか。」

川「そうだな。」

彼が川内幸之助、祐馬の實の父である。

幸「昨日は夜に横浜まで急用で行ったんだが無事に来れたな。さてさて、家に入るぜ。」

川「ああ。」

家に入る。

幸「・・・そういや、メールで見たが、なんか強い奴とレースしてるんだって？十三鬼将と十二覇聖、だっけか？」

川「ああ。親父は知らないよな？」

幸「いや。」

川「あり？知ってたか。」

幸「首都高やめたからってその後少しの期間は首都高がどんな風になってるか聞いたさ。」

川「そつか・・・」

幸「まあ相手が誰にせよ、負けは絶対に無しだぜ。」

川「もちろんだ。それでこそ、伝説を目指すもんだからな。」

幸「だな。お前も俺と同じように、なかなかいい感じの走り屋生活送ってるみたいだから良かったぜ。」

川「ああ。親父もスープラは昔のまんまで今も乗ってるんだから、また攻めればいいじゃないか。」

幸「まあ、昨日横浜行くまでにちよいと攻めたんだけどよ。」

川「そうか。どうだったんだ？バトルとかしたのか？」

幸「いや。でも、新環状から横浜まで全開でいったけどな。」

川「そうか。っていうか、まだ走れるってんなら止めたのは全然潮時じゃ無かったんじゃないか？その後どっかいつちまうしよ。」

幸「いや、まあな・・・なんとなく潮時のような気がただけだよ。まあ、気がただけなら止めはしないけどな。」

川「でもほんとにやめちまった、か。」

幸「ああ・・・。」

そして、夜・・・

幸「おう、行ってくるのか。」

川「ああ。今日も、十三鬼将か十二覇聖の奴らが出てくるだろうしな。」

幸「そうか。まっ、頑張ってくれや。」

川「サンキュー。」

そして祐馬は首都高へと向かった・・・。

幸「シルビアか・・・あれで十三鬼将とかにねえ・・・」

川「(さあて、前は湾岸のミッドナイトローズを倒したんだっけな・・・とりあえず新環状の十二覇聖があと少しだから、そいつらを倒しに行きますか。)」
新環状へと向かう。

川「(つていうか、四天王はいつ出てくるんだ・・・?もうC1は全員倒したつてのに、この前C1行っても出てこないし・・・十二覇聖の奴らを片付けたら、か・・・?)」

現在右回りを走行中。C1の銀座辺りにいるが、四天王の一人でC1を走るダイングスターのと思われる、青いGTOは走っていないかった。

間もなく江戸橋JCTを過ぎる。

川「(こっから、どこにいるか・・・さっき思ったみたいな感じに四天王が出てくるとすれば新環状の残りは真夜中の銀狼、そいつを倒せば更にブループレッシャーが出てきて、後は四天王が出てくるまで横羽と湾岸の奴らを蹴散らしていく・・・そんなもんだらうけど、今日は『真夜中の銀狼』がいるかどうか・・・)」
箱崎JCTを過ぎて深川線へ。

川「(・・・おっ、ここに来たな・・・?銀のR33、通り名どおりのそのマシン、間違いなくそうだ・・・!)」

『真夜中の銀狼』・・・待避所で待ち伏せしていたそのR33は、シルビアが過ぎるなり動き出し、パッシングをしてきた。

かつては12時過ぎのシンデレラと同じくワンダラーであった。2
3時以降の深夜で無いと現れなく、更に巷で噂をあげているテクの
ある奴じゃないとバトルを受け付けないという実力者なんだとか。
川「(昨日箱根攻めてた感覚が残ってる気がするが大丈夫なはず・
行くぜ!)」

木場の右コーナー手前、バトルがスタート。

川「(コーナーは随分安定してるな・・・こっからの加速はどうだ
・・・)」

180km/hから200km/h、更にそこからの加速。R33
と互角だ。

川「(こっから辰巳JCTまで、ついでこれっか・・・!?)」
300km/hに到達。未だに加速力は互角である。

川「(緩い右・・・ブレーキングで勝った、離せる・・・!)」

R33のほうが大きく減速した。このままコーナーで離そうとする
シルビア。だが・・・

川「(ちよっ、こんな時にこっち来るんじゃねえっ・・・!)」

アウトにて、丁度一般車が左車線に車線変更。シルビアはコーナー
出口でアウトになるため、更なる減速を余儀なくされる。

川「(ここで守れば事故る可能性が高くなるだけか・・・ちくしょ
う、あんま離されねえうちにもっと速度ださねえと!)」

R33はシルビアをパス、突き放そうとする。

川「(まだR33は見える・・・辰巳のコーナーでどうにか近づけ
るといいけどな・・・)」

辰巳JCTから湾岸線下りへ進入する。

川「(・・・手こずってやがるな、もう抜けるってのか・・・!?)」
コーナー出口にて、丁度一般車が2車線をほぼ占領しているところ
にR33がやってきた。すぐに2台のうちの1台が前に出たため、
さほどの障害にはならなかった模様。

しかし、シルビアは近づいてくる。

川「(流石に抜けはしなかったか・・・よし、こっから次の有明は

台場線に行くだろ、そこまでどれだけ出していける・・・!?」
180km/hのドリフトから立ち上がりでR33に迫る。このままスリップにつき、瞬く間に300km/hを突破。

R33は懸命にブロックし続ける。

川「(こんだけ広いのに抜けないってのはちと辛いけどな・・・さて、台場線だぜ。)」

台場線へ進入。グリップで右コーナーを抜けていく2台。

川「(くそっ、スピードで抜けるってのに一般車が・・・!)」

一般車をパスした後、レインボーブリッジ前のコーナーめがけて猛加速。

川「(・・・つとあ、そこでアウトから行くつもりってかあ・・・? インが空いてるぜ!?)」

右コーナーをアウトから行こうとしたR33、シルビアはインに入り、R33をパス。

川「(さあ、前に出たぜ。こつからどこまでバトルが続くかな・・・)」

レインボーブリッジを200km/h超で駆け抜けていく。

川「(次の右は・・・)」
綺麗にサイドブレーキドリフトを決めて抜けるシルビア。軽く滑らせて抜けるR33。

川「(抜かせはしねえ・・・!っていうか、そろそろC1か・・・早いな・・・)」

芝浦PAを過ぎ、左、右のコーナー。安定した走りを見せる2台。

川「(さあ、C1に入るぜ!)」

外回りへと進入・・・と、その瞬間である。

川「(・・・おっ、おいおい・・・ギブアップかよ・・・)」

R33がスローダウンしていく。そしてバックミラーから消えた。祐馬の勝利だ。

川「(これで終わりか・・・いや、まだバトルはあるよな・・・)」

後ろからR33ではない別のマシンのライトが迫る……。パッシングをしてきた。

川「(来やがったな……。C1と新環状を攻めるセドリック、『ブループレッシャー』……!)」

ブループレッシャー……。セドリックに乗りながらもC1と新環状を任されている所を見れば、それだけの実力があるという事が分かるだろう。

セドリックに深い青を塗り、少し大型のウィングを装着している。

川「(C1に入ってからバトルとはな……。そのセダンに乗りながらここをどこまで攻めていけるか、見せてもらおうぜ!)」

四天王前のC1・新環状の最後の戦いが始まった。

川「(うおお、なかなかの唸りだな。加速もあのクラスにしちゃあ相当なもんだ……。)」

最初のS字を抜けていく二台。

川「(ここは、滑りはせず安定か……。)」

汐留JCTを過ぎた。200km/hまで加速した後減速し、トネルのコーナーへ。

川「(いいコーナーリングだな。だが、前には出さねえぜ。)」

次のコーナーへと迫る。セドリックはまだ張り付いている。

次の左コーナーも、シルビアの後ろにぴたりとついていた。

川「(全く挙動を乱さずについてくる……。こいつ、やっぱ十二覇聖にいたるだけはあるな……。)」

緩い左コーナー2つを抜け、分離帯。片側の一般車を避ける。

2つ目の分離帯も同様。

川「(こっから神田橋まで、離せるかどうか……。JCTはC1行つときですかね。)」

250km/hへ達する二台……

川「(……。よし、こっから差があるな……。)」

そこからの加速はシルビアが勝った。差は徐々に広がっていくがJCTはもう目の前。

川「（ここでドリフト・・・！うおお、あっちも豪快だな・・・あんま無理するなよ？）」

減速してドリフトで左低速コーナーを抜ける。セドリックはねじ伏せる感じでドリフトする。

川「（大分差は広がったか・・・とにかく、容赦はしないぜ。コーナーで離せればどんどん離していくからな！）」

右コーナーは197km/hで進入、軽めのドリフトで抜けていく。セドリックは・・・

川「（・・・こういうとこのコーナーリングはやっぱ互角か・・・）」
まだバックミラーにはセドリックのライトが映る。

川「（あっちとはまだまだ差がある、互角だったらそれ以上のコーナーリングが出来るようにしねえと・・・）」

若干ペースを上げていくように意識する祐馬。

川「（大分いい感じだぜ・・・）」

いくつかのコーナーを、加速しつつ抜けていく。

・・・その瞬間。

川「（・・・うおっ・・・そこでかよ・・・？）」

・・・途中の右コーナー、セドリックがスピンした。

それでもサブロクターンで早々復帰するが、既に差はぐんぐん開いている。

これじゃブループレッシャーの勝利は無理だ。

川「（案外あつけない終わりだな・・・まあ、さっきのもそうだったけど。）」

祐馬の勝利である。

川「（っつーかまあルートもゴールも決められちゃあいない精神力のバトルはそんなもんなのかね・・・まあともかく、これでC1、新環状の残るは四天王だ。でもまずは横羽と湾岸の奴らだろうな。・

・・・まあ四天王以外全員十二覇聖だけどさ。そいつらを倒せば四天王と十二覇聖のリーダー・・・えーと、白いカリスマだ。それと迅帝の6人だけになる。さあ、どんどん倒していくぜ。）」

そうして家に帰る祐馬。

・・・遂に、半分を倒し終えたのであった。

幸「おう、お帰りさん。どうだったんだ？」

川「新環状の残る十二覇聖2人を撃破、あと倒すべき相手は11人になった。横羽の2人と湾岸の2人、そしてその2エリアを攻める1人、十三鬼将の四天王、それと両チームのリーダーだ。」

幸「ほーう、そりゃ大変だな。」

川「まあ、きついバトルばっかってわけでもないからそう辛くも無
いけどさ。でも、横羽と湾岸は大体強い奴が集まってるからな。」

幸「そうだな。・・・そうだ祐馬、明日1日、シルビアをちよいと
貸してくれないか？俺のスーブラを貸すからよ。」

川「明日1日？ってことは夜までか？」

幸「その通りだ。」

川「何でだよ？明日だって十三鬼将、十二覇聖の奴らとバトルする
つもりなんだぜ？」

幸「そうなんだけどな、ちょっとお前のシルビアに乗って、俺のマ
シンとどれくらいの違いがあるかってのを知りたいんだ。」

川「なるほどな。・・・まあ、あさつてもあいつらは待ってくれ
るだろうし、いいか。この前息抜きしたつてのにまたになっちまう
な。」

幸「息抜き？」

川「ちよつとした用で箱根行ってきたんだよ。」

幸「そうか。まあともかくサンキュー、壊したりはしないから安心
しろ。」

川「分かってるさ。親父が壊すなんて事無いだろ。俺も、スーブラ
を壊したりはしないさ。」

幸「当然だ。」

そしてその後射命丸から電話がかかってきて、C1、新環状はほぼ
制覇したことについて取材を受けたとか。

次の日

川「・・・あれ・・・親父、早速乗っていったのか・・・（朝からとなると、いつ帰ってくるか分からないな・・・）。」
幸之助は大概、朝早くから車を乗り回す時は、ほぼ1日中外に出てるらしい。

川「（まあともかく、俺は親父のスープラに乗れるんだ。現役の間と変わってないみたいだし、こういうマシンだったのかって実感するチャンスだからな。まあ、親父がそこまで偉大な走り屋だったわけじゃないけど。）」
そして祐馬は朝飯の横においてあった書き置きで、幸之助が今日1日家にいないことを理解した。

川「・・・うむ・・・（親父の味噌汁なかなか上手いな・・・ただ、朝っぱらから焼き魚は、俺には合わないな。つーか作つといてくれるならそうと言ってくれりゃ良かったじゃないか・・・）」

川「ん・・・電話か・・・」

厚井からだ。

川「もしもし？」

厚「よう祐馬。文々。見たぜ、ブループレッシャー撃破して、C1、新環状は残すところ四天王のみとなったんだってな。おめでとさん。」

川「サンキュー。」

厚「まあそれは本題じゃないわけで、実は最近お前の通り名が変わりつつあるぜ。」

川「通り名が？いつの間に？」

厚「ああ。リーダーから聞いたんだが、『シルバーナイトシャイン』とかいう通り名らしいけど。」

川「『シルバーナイトシャイン』？」

シルバーナイトシャイン、そのまんまに訳せば、銀の夜の輝き。

厚井の説明によれば、祐馬のシルビアがスパークリングシルバーなのに因んで、祐馬のシルビアが走る夜はそのシルビアの銀に染まり輝き、疾走するというものらしい。

そんな訳分らない通り名を考えた私（作者）に祐馬は怒るべきだろ。

川「・・・なんか理由が訳分らない気がするが・・・まあそう呼ばれてるならそれでいいか。罵倒だとか完全に恥ずかし狙いの通り名じゃなきゃどんな通り名だって構わないし。」

厚「そうか。そいじゃ頑張れ、シルバーナイトシャインさんよ。」

川「おう。」
ピッ

そうして夜・・・

川「（ほんつとに帰ってこないな・・・そんなに俺のシルビア乗りまわして何してるってんだ？まさか首都高攻めまくって、俺じゃねえのに十三鬼将、十二覇聖の誰かとバトルしてたりはねえよな・・・まあ俺も、今からスープラ乗り回すけどな。）」

早速預かった鍵をスープラにかける。

・・・グオオオオウ！！

川「（おお、すげえ唸りだ。それじゃ早速、行きますかね・・・。）

スープラを首都高へと向かわせる。

川「（とりあえず首都高入ったら、適当に攻めればいいかな・・・タイムアタックでもしてみるか。次攻めるつもりは横羽でも。）」
銀座から入り、汐留、浜崎橋のJCTを過ぎ、芝浦JCTを過ぎたところでアクセル全開。

川「（っほー、いい加速だ。親父もやっぱなかなかのマシンに乗ってたんだ。俺とバトルしたらどうなるのかね・・・）」
200km/hを越したところでコーナーが迫る。

川「（ブレーキングも結構効くんだな。コーナリングも、重量の割

にはいい動き・・・！」
とまあ、そんな感じで横羽線を駆けていったのである。

その後、家にて

川「（ふう、これでおわりっと・・・おっ、親父帰ってきてるな・・・）」

シルビアが停まっている。

幸「お帰り。どうだった、俺のスープラは？」

川「なかなかいい走りが出来るマシンだと思っただぜ。加速もコーナリングも、いい感じだ。」

幸「そうか、サンキュー。」

川「俺のマシンはどうだった？」

幸「ああ、俺もお前のとほぼ同じ感想だ。」

川「なら良かったぜ。」

幸「ただ・・・少しサスの辺りのいじりが甘い気がしたぞ。」

川「えっ？」

幸「っつーわけで勝手ながらちょっといじらせてもらった。俺の感じとしてはかなりいいコーナリングが出来るようになったと思うんだが、お前に合わなければすまなかった。」

川「そっ、そうか・・・。まあ、親父なら別にいいさ。十二覇聖の相手する前にちよっと軽く攻めて確認してみるよ。」

幸「そうか。（・・・やっぱ、また攻めたくなくてきたな・・・明日、一度被った化けの皮を剥がしに行くとするか。）」

次の日・・・。

川「（・・・なんだなんだ、今日も朝っぱらからいないか・・・せつかく帰ってきたつてのに、流石に連日だな。今度は何だっけって言うんだ・・・？）」

その夜・・・23:03、芝公園のコーナーで感触を確かめている

祐馬。

川「(っほー、確かにこれは親父が大正解だな・・・鋭さが増して
るぜ・・・)」
というわけで早速横羽線へと向かう。

川「(まず戦うのは・・・おお、入ったとこでいきなりお待ちかね
か。)」

白いZ32が丁度走っているところだった。分かりきってる相手な
ので、こちらからパッシングする。

川「Z32・・・クイーンズナイト」、だよな。」

クイーンズナイト・・・ライトカバーをしていてブレーキランプも
デザインが若干変えられているがZ32の面影はきちんと残ってい
る。

川「(それじゃ早速バトル行けぜ。・・・っつーか普通に考えたら、
こいつらとのバトルで俺が申し込む側になったのは初めてなんだな
)」

早速バトルがスタートする。芝浦JCTを過ぎて間もない地点だ。

川「(まずはどこでパスできるかな・・・ミスったらそれどころじ
やないけど。きっちりついてプレッシャー与えれば、いつかは隙が
生まれる・・・はずだ。)」

大分速度が出せるので250km/h程までだし減速、左コーナ
へと入る。

川「(加速は見た目どおり速いな。だが、コーナリングの減速が大
きすぎるぜ？それでもきっちりブロックはしてきてるけど。)」

212km/hでコーナを抜けるシルビアに対し、Zは198k
m/hである。

川「(立ち上がりもそこそこだな・・・となると、狙いどころはコ
ーナーか・・・?)」

次の右コーナーを抜け、下り坂を駆けていく。

川「(・・・もうすぐ300km/h・・・まだ抜けないか・・・)」
大井JCTを通過・・・

その後もいくつかコーナーを抜けていく。

川「（・・・つとお、ここで来たかあ！？）」

Zがブレーキングから、左コーナーで膨らむ。そのままハーフスピ
ン状態に陥った。

その隙に、シルビアはパスする。

川「（精神が吹っ切れたか。それじゃ、どこまでついてこれるか、
試させてもらいまっせ。）」

鈴ヶ森を全開で駆け抜けていく。Zはすぐに復帰したが、完全に離
された。

川「（もう流石に追っかけてこねえか・・・？終わったな。）」

昭和島JCT手前で決着がついた。祐馬の勝利である。

川「（いやあ、親父のセッティングも案外効いてるな。助かったぜ。
さて、次にパープルメテオ・・・おお、来た来た。）」

後ろから突然現れたR32がパッシング。

通り名が示すとおりの紫色、ライトデザインも変えられている。

パープルメテオ・・・どこことなく師匠という雰囲気が漂うのは、昔
誰かにテクを教え込んでいたから、らしい。

川「（R32だな・・・それじゃこつからの横羽線、行くぜ！）」

昭和島JCT後の左コーナー途中でバトルがスタート。

川「（いい加速だな。でも、なんか抑えてるように見えるのは気の
せいであってくれよ。）」

つまりブロックで思い切りの加速が出来てないように見える、とい
う事らしい。

川「（しばらくはドリフトしないから精神的なバトルになりそうだ
な・・・。）」

300km/hは出さず、縫うように一般車を避けながら、数々の
コーナーを抜けていく。

川「（・・・つちい、そこでか・・・！？抜かせはしねえ・・・！！）
」

料金所前の左コーナー、R32がアウトから狙う。

川「くそつ、ここじゃ守れねえか・・・」

R32にパスされた。

川「(やっぱし離されるか・・・だがまだついていける加速だ、絶対に負けやしないぜ!!)」

スリップについて加速力を増していくシルビア。多少揺さぶってみたりもする。

川「(いい安定感だ・・・こいつも乱れはしない・・・)」

現在浜川崎を過ぎた辺り。シルビアはスリップによってついていけない。

川「(・・・ちつとも隙が出来ねえじゃねえか・・・!)」

横羽を駆けて行く二台。差は広がることなく、そのまま横浜環状へと突入か・・・

川「(・・・もうすぐ生麦・・・つとお、来たあっ!!!)」

緩いコーナーでアウトがから空きだった。シルビアはそれを利用しR32の隣に並ぶ。

川「(そっちは運が悪かったな・・・!!)」

R32の前には一般車がいる。隣にシルビアがいたら減速以外の対処は不可能である。

そのまま減速していくR32・・・がしかし・・・

川「(何い・・・?一般車激突を避けるついでにギブアップ・・・?)」

R32はその勢いで後退していく。ギブアップだ。

・・・同時に、祐馬の勝利が決まった。

川「(・・・隣に並ばれてしかもこんな事で大きく減速したとあつちゃあ對抗できないってのか、前にいてきつくなつたからもう無理だつてのか・・・まあ何にせよ、これで横羽もほぼ制覇だな。後は湾岸の2人、そして横羽&湾岸の『紅の悪魔』・・・!そうすれば四天王が出てくるはずだ・・・!)」

これで相手は残り9人、もう終盤戦は目の前と言えよう。

そして残る十二覇聖は、「白いカリスマ」を除けば、「無冠の帝王」

、『エキゾーストイヴ』、『紅の悪魔』のみ……。
とりあえず次の出口で降りて、そのまま一般道から帰っていく祐馬
だった。

……はずだが、そのまま帰れなかった。

川「（……やっぱ尾行されてるな……）」

丁度首都高を降りた所、かつて射命丸がしていたように、尾行され
てるのに気づいた。尾行されてると思ったのは、さっき相手にした
紫のR32が尾行していたからだ。

川「（何か話でもしたいってのか……？今までそんな事なかったの
にな……）」

とりあえずそこに丁度あったカフェで停める。後ろのR32も停ま
ったので、何か話したいのだろうと確信した。

ガチャツ

川「今まで一度も、バトルした後に話を望んだ十三鬼将、十二覇聖
なんていなかったのにな。」

「はっはっは、珍しい事してごめんよ。まあ、昔岩崎の側近だった
奴として、挨拶でもしといたほうがいいと思ってさ。」

川「岩崎の側近……？」

「迅帝の事さ。言っておくが、こう見えても昔はあいつに色々教え
てたんだぜ？」

川「なっ、そっ、そうなのか……!?!？」

「ああ。あつと、因みに俺は高橋雅和たかはし まさかずな。宜しく。」

川「よっ、宜しく……それは凄いな……。」

高「いつの間にかあいつも俺を抜いちまって、俺もそれから落ちぶ
れて……。」

川「そうか？それが本当なら十二覇聖にいられないだろ。」

高「まっ、そうだろうけどな。……それで……お前は迅帝と戦っ
わけだよな。」

川「ああ、もちろんだぜ。」

高「あいつも、一度戦ったってのになんで俺らを再結成させてまで

お前を試すようなことするのは分からないが・・・まあとにかく、あいつのR34は桁違いだ。しばらく会ってないんで詳しくは分からないが、確実に1100馬力は越すぞ。」

川「1100馬力・・・。1000馬力越してるとは思ったが、そこまで出てるか・・・。」

高「加えて1000kg近い車重だからな、加速は相当、コーナリングだって凄まじいさ。」

川「マシン性能もそうだけど、ドラテクも凄いんだろ?」

高「ああ。あいつも一時期GDBインプでいるは坂攻めた頃あったからな、最近でも峠攻めたる。それだけコーナリングに対処できる奴だ。」

川「峠侵攻以前も攻めてたのか・・・しかもいろは坂かよ・・・!?」
高「まあともかく・・・もしも・・・いや、お前には確実にバトルできる臭いがするんだな。」

川「そうか、いい嗅覚だな。」

高「まあともかく、あいつとバトルするときは相当の性能を持ったマシン、そして自分の凄腕とどんな相手にでも耐えられる精神で挑め。それがなければただ長期戦か呆気ない短期戦、どちらかしかないぜ。」

川「分かった。サンキュー、師匠さん。」

高「何も言わないよりはマシだろ。迅帝の情報を少しでもやらないとな。情報つつー情報じゃないけどよ。参考情報程度か。」

川「そうだな。でも、アドバイスにはなっただと思っぜ。」

高「ありがとさん。」

そして二台は夫々の家へと帰っていった・・・。

川「(いいマシンにいい腕、強靭的な精神力・・・それだけの覚悟しねえとまずいかもな。)」

その頃、祐馬がさっきまで走っていた横羽線下り、浅入付近にて・・・。

十「(さつきなんとなくこころへんで川内祐馬が戦ってたような気配がするわね……。まだ白熱した空気が微妙に漂ってるわ。)」
咲夜は今日は横羽線を攻めている模様だ。

十「(……。ん……。？バトルか……。ぬう、あの天狗……。)」
後ろからパッシングをしているのは赤いZ33……。射命丸だ。

射「(こんなところで紅魔館のメイドと出くわすとは。取材ついでにバトルし……。)」

射命丸は、バックミラーにパッシングを放つ1台のマシンがいることに気づいた。

射「(あやや、私もパッシングされてる……。)」

十「(……。よく見たら、天狗もバトル申し込まれてるわね……。)」
「

射「(っほーう……。とりあえずここは三つ巴バトルですねえ。あの80年代のマシンを交えた1VS1VS1と行きますよ、十六夜咲夜!)」

十「(これは1VS1VS1かしらね……。そんなバトルは初めてだけど、勝って見せるわ!)」

バトルはスタートする。

しかしその瞬間……。二人は目を疑った。

射「(なああっ!?)」

十「(えっ、いきなりくるっていうの!?)」

最後尾スタートのマシンが鬼加速、あまりの加速でZ33もS2000もブロックしきれず、あっという間に先頭に立たせてしまふ。

十「(いくらなんでも80km/hからあの加速は信じられないわね……。)」

射「(あれは凄まじすぎますね……。あれって迅帝並みくらい? 迅帝見たこと無いけど……。)」

その後、あちらのマシンはどんどん加速して行き、生妻JCTを過ぎる頃には、もう完全に見えなくなつた。

生妻JCTでは大黒線へ入つたが、ありえないスピードでドリフト

していった。

そして二人同時にギブアップした。

十「（・・・もう無理ね・・・天狗も同じみたいだし・・・）」

射「（あのスープラは新人なんですかね・・・ちよっと、調査してみますか。）」

二台を置き去りにしていったそのマシンは、湾岸線へと向かった・・・。

その数十分後、家にて

川「ただいま、今日はどこ行ってたんだ？」

幸「いやまあ、ちよつくら車乗り回してただけだ。」

川「なんだ？ほんとは俺のシルビアじゃ物足りなかつたってか？」

幸「そうじゃねえよ。ところで、セッティングは大丈夫だったか？」

川「ああ。コーナリングが大分良くなった。大分旋回できるようになつてるぜ。マジでサンキュー。」

幸「俺が勝手にしたんだから礼なんていらねえさ。役に立ったんならそれでいい。」

川「そうか・・・親父もなかなかいい腕持つてるんだな。色々いじつたりしてたんだっけ？」

幸「いや、そうじゃねえよ。ただスープラいじくって色々覚えただけだ。」

川「へへ、でも凄いじゃん。」

幸「んなことねえさ。」

そんな話をした後、自分の部屋に行った祐馬。

その時、電話がかかってきた。

川「んお・・・（射命丸さんねえ・・・）」
ピッ

川「もしもし？今日は横羽の十二覇聖二人倒しましたよ。」

射「おお、もう電話の内容が分かって・・・って違う違う、それ

が本題じゃないんですよ。」

川「な〜んだ。それが本題じゃないってんなら、何の話ですか？」

射「先ほどその横羽で紅魔館のメイドにバトルを挑んだら、丁度私にもバトルを申し込む相手がいって三つバトルになったわけですよ。それでその私に申し込んでた相手ももう速くて速くて・・・もしかしたらそいつが貴方の、迅帝とは別の脅威になりそうな気がして。」

川「（紅魔館のメイド・・・ああ、十六夜咲夜か。）へえ〜。で、そのマシンは？」

射「白いスープラです。しかもJZA70。」

川「なっ・・・。」

その瞬間、少しだけ固まった祐馬。

白い70スープラ・・・即座に、そこに停まっている幸之助のスープラを浮かべてしまったからだ。

70スープラで速い・・・青の70スープラなら、横羽にいる四天王「シャドウアイズ」の可能性があるのだが、白ときた。

射「いやねえ、あの加速はほんと、200km/hなんて一瞬ですよ。あの後コーナーが全く無ければ軽々300km/hオーバーだったでしょうね。生麦で大黒線行きましたけど、そこでのドリフトもありえないスピードでしたよ。」

川「スタートからの加速で200km/hに達するのが一瞬・・・！？」

それを聞くと段々頭がこんがらがってきた。

昨日あの70スープラには乗ったが、そんな加速は出来なかった。どんなに踏んでも、だ。

最初は親父のスープラなのかと疑ったが、違うのかとも思ってきた。川「なるほど・・・そいつが俺の前に立ちはだかるんじゃないかと・・・。」

射「まあそういうことですね。とりあえずあの人がどういう奴なのかちよつと調べてみますんで。」

川「分かりました。有り難うございます。」

射「いえいえ。」
ピッ

川「（親父の70スーブラかと思ったが・・・ただ白い70スーブラだったので同じだけだよな・・・？どうなのかな・・・）」

幸「・・・俺のスープラはそんな加速できないぜ。」

川「だよな・・・なんか妙な予感がして焦ったぜ。」

幸「・・・そうか。とりあえず、落ち着けよ。」

次の日の朝、試しに幸之助に70スープラのことで聞いてみたが、自分ではないと断言した。

川「まあそうだろうとは思ってたけどな。親父のスープラはそこまで速くないって自分でも言ってるし。」

幸「ああ。」

川「・・・っとおそうだそうだ、俺ちよっとこれから出かけてくるわ。」

幸「そうか。分かった。」

というわけで向かったのは整備場。

川「（なるほどな・・・ここがもうちよいこうすればこうだったのか・・・親父、流石だな。）」

厚「へえ、親父さんがセッティングね。効果も上々と。」

川「ああ。まさか親父がここまでいじれるもんだとは思わなかったぜ。」

厚「昔走り屋だった頃、それなりにそこら辺もばっちりだったってことか。だとしたら、結構親父さんも首都高で有名だったんじゃないのか？」

川「さあな、有名だったなんて話は聞いてないけど。」

厚「ふう、ん・・・とここでところで、四天王までの道はあと3人か。今日は当然、湾岸に行くんだろ。」

川「当然だ。四天王さえ出てくれば、もう最終決戦は近いからな。」

まあ四天王倒しても、白いカリスマが出てくるだろうけど。・・・まさか白いカリスマが四天王より前に出てくるなんて事ないよな？」
厚「流石にそれはないだろ？迅帝と対等のマシンとテクを持ち合わせる奴だしな、そいつが先に出てきて、そいで倒せば、四天王に勝つたも同然だからな。」
川「まあ、そうだよな。」

23:11・・・

川「(さあ、300km/hオーバーバトルをしに行こうじゃないか。)」
湾岸へと入っていく。

川「(12時過ぎのシンデレラを倒して以来か・・・っとあ、早速きやがったな・・・)」
今回も入るなり早速相手が現れた。ただし待ち伏せだが、すぐに動き出し、パッシングを放ってきた。

川「(あいつは・・・ユーノスコスモ、つまり『無冠の帝王』・・・!)」

無冠の帝王・・・市販で唯一の3ローターを搭載したユーノスコスモを操っている。実はF1までたどり着くと思ったら無理だったという男。だが、要するにそれだけの實力はあるのだ。

あのナイジェル・マンセルと同じ呼び名がつけられていることから、腕がどれほどなのか伺えるだろう。因みに髭はあまり生やしてはいない。

川「(さあ、湾岸のハイスピードバトルと行きますかあ!)」
アクセル全開、レースがスタートする。

二台はすぐに200km/h、250km/h、300km/hと速度を増していく。

川「(どこまでも加速は同等か・・・?)」
足をアクセルから離しはしない。まだまだ加速し続ける。
もうすぐ最高速だ。

川「（ここでストップかつ．．．って、とっくにあつちは遅れてたかつ．．．!）」

限界速度で駆けて行く二台、だがコスモはちよつとずつ、離されていつている。

川「（あつちは少し遅いつつたつて、これだけの差じゃどこで吹っ切れるかのバトルに変わりねえ．．．）」

一般車を避ける際のハンドリングも最低限に抑え、減速しないようにする。

川「（何もねえのにアクセル離したら一貫の終わりだ．．どこまでこの精神が持つか．．っ．．．）」

最高速、392 km/hを必死で維持する。

．．．そんな感じで猛烈に走り続け、間もなく川崎浮島トンネルとなった。

川「（ここまでついてくるとはな．．．あつちの最高速はこつちより低いつてのに、そこまで粘るだなんて．．．）」

そして、丁度その時である。

川「（えっ、おい．．．）」

．．．コスモがスローダウンしていく。

川「（これは勝ち．．．だよな．．．ふう．．．）」

そのまま減速していくコスモ．．．祐馬の勝ちである。

川「（ハイスピードの極限状態が試される．．．正にその通りだよな．．．つてえ、やっぱしまだ来るのか．．．!）」

別マシンが祐馬にパッシングを放つ．．．。

相手は．．．ピンクのスーパー。

川「（『エキゾーストイヴ』だな．．．!）」

エキゾーストイヴ．．．アブフラッグのエアロが印象的なスーパーを操る。湾岸のみならず、横羽でも十分戦える、らしい。

川「（俺に落ち着いてる暇はねえ、さつさと始めようぜ．．．!）」
バトルがスタート。現在川崎浮島トンネル内である。

川「（300 km/h．．．まだまだ．．．!）」

先ほどと同じくアクセル全開、最高速めがけて加速する。

川「よし、最高速・・・っ・・・！・・・あっちはまだ伸びるか・・・！」

祐馬が見る限り、あちらは400km/h程で加速がストップした。シルビアに迫ってくる。

川「(やっぱり最高速低い側になるときついもんだな・・・だが、前には出させねえ！！)」

まだまだブロックできるくらいだったのでブロックして応戦する。あまり効果はないが。

川「(・・・まっ、並ばれちまうか・・・)」

右に並ばれ、パスされてしまった。

川「(これでスリップについても400km/h達するかどうか・・・)」

なんとか限界まで出すためにスリップにつき、加速していく。

逆にあちらはスリップから離れたためか減速。とはいえ、ちよつとずつのため全く気にするほどではなかったようだ。

川「(398km/h・・・ここまでか・・・さあ、そうなってからが勝負だぜ・・・！？)」

差はそれほどでもないし、全く負けるような気はしなかった祐馬。最高速でついていく。

川「(これじゃ長期戦は逃れられないか・・・っちい・・・)」

アクセルを踏み込む足に妙な力が入る。

その瞬間、額から一滴の汗が落ちた。

川「(ちつとも乱れねえ・・・ブロックも普通にこなしてきやがって・・・！)」

バトルはもう何kmも続いている。鶴見つばさ橋が見えてきた。

川「(・・・おおっ、チャンス逃すかあっ・・・！)」

スープラが一般車を避ける際にハンドルを切りすぎて380km/h近くまで減速、その隙にシルビアは前に出る。

川「(っふう・・・抜けたあ・・・さあ気合入れなおせ・・・とり

あえず、次の大黒ふ頭は大黒線行きといかせてもらうぜ・・・？」
別に湾岸線バトルがきついからそっちに行くわけではなく、もし次に紅の悪魔が出てくるとすれば、彼のエリアは横羽・湾岸なので、横羽に行っておけば次に紅の悪魔が出てくるだろうという理由である。

川「（大黒ふ頭・・・こっからのコーナリング、ドリフトで流しますか・・・！）」

大黒線へ進入、左コーナーを、一気に減速してそのままケツを振って抜け、更に次の大回り右コーナーでは、最初はグリップで抜けつつ、途中から軽く滑らせて抜けた。

川「（ほおう、あっちもいいドリフトをかましてきやがる・・・！）」
160km/hから再び限界速度めがけ加速する。

川「（立ち上がりでは勝ってるぜ。このまま離れていくか・・・！？）」
先ほどはスープラもいいドリフトを見せたが、立ち上がり加速で遅れをとった。そのままシルビアに離されていくスープラ。

川「（早くも横羽線突入・・・おっ・・・）」
その瞬間、スープラがスローダウン、離されてはいたのですがすぐにバツクミラーから消えた。

祐馬の勝ちである。

川「（ふっ・・・湾岸線のバトルだけだったら、あの後守りきれたどうか・・・さあ、次は来るのか・・・！？来た・・・！！）」

後ろから別マシンのパッシング・・・

川「（・・・あああああ？）」

そのマシンを見た瞬間、祐馬の口は数秒間、開きっぱなしになった。その赤いボディといい、ボンネットから突き出ているあれといい・・・それ以外でも、見た目がどう見ても・・・

川「（・・・某ロボットアニメの・・・だよな・・・）」

祐馬は別に見たことがあるわけではないがこのネタは分かる。赤い某モビルスーツを模したGT-Rだった。

川「(痛車の次はこんな奴が出てくるのか・・・っていうか、こいつが『紅の悪魔』・・・だよな・・・?)」

紅の悪魔・・・先述のように、某モビルスーツを模したR34に乗っている。何でそんなマシンに乗っているのかは不明だが、搭乗者が某口ポットアニメ好きだというのは誰も聞いた事がないのは確かである。

川「(まあ、元のR34の原型はあるけど・・・果たして3倍速くなってるのかどうか・・・?まあ、あんなマシンに乗っていても速いのは確実だ。それじゃ四天王前の最終戦、行くぜ!!!)」

川「(っ!やつぱし速え・・・!!)」

あちらの加速はシルビアの一段上を行っていた。

川「(ここが湾岸だったらブロックしてもすぐに抜き返されてたな・・・さつきみてえに・・・)」

隣に一般車もいたので、何とか上手くR34をブロックする。

川「(やつぱこれだけの加速差があるとこええな・・・)」

いくつか緩いコーナーを抜けていく。

川「(ここまで抑えることが出来るとはいえ・・・ぬあっ!?)」

右コーナー、インに入ってきたR34。シルビアをパスしていく。

川「(くっそ・・・負けてたまるか・・・!)」

エキゾーストイヴ戦とは違い、負ける予感には十分であった。

速すぎる加速、完璧なコーナリング・・・嫌な予感は否めない。

川「(うおお・・・速すぎだっ!の・・・!)」

200km/hから加速はどう見てもあちらのほうに軍配が上がる。ついていけるのは、あちらが一般車をパスする際の減速が多きいからだ。

川「(どこかでチャンスはないのかね・・・このまま負けるわけにやあいかねえ・・・)」

まだ負けてはいない。あの赤いアイツは射程圏内だ。

川「(逃げるんじゃないやねえ・・・)」

浅出入口、浜崎橋出入口・・・瞬間に走っていく二台。

川「（まだ抜き返せねえか・・・いや、来た・・・!）」

途中の左コーナー、R34はハーフスピン状態になり大きく減速。それを狙って、シルビアはR34を抜き去る。

川「（よっしゃあ・・・）」

喜んでいる暇はない。

川「（くっ、復帰も早えし加速も速え・・・!）」
すぐに復帰して迫ってくるR34。恐ろしい。

川「（これじゃあ・・・どうするってんだ・・・）」
ブロックするしかない・・・。どんなにラインを上手く通ってコーナリングしても一向に離れないし、ブロックしないと一瞬で前に出られる。

川「（もうすぐ羽田線か・・・次の右コーナーとその次の左コーナーでペース上げていけるか・・・?）」

200km/h前後を維持し、何とか高速で曲がっていく。
・・・R34もついてくる。

川「（これでもついてくるよな・・・でも、諦めはしねえ・・・!）」
間も無く昭和島JCTを過ぎる。

川「（次のストレートできつくなるかな・・・ブロックを怠るなよ・・・）」

昭和島JCTを過ぎた後のストレート、R34はシルビアに張り付いてくる。抜かそうとするR34だが、シルビアは懸命にブロックしていく。

次の緩い左を抜け、右コーナーへ・・・200km/hで強烈なドリフトを決める二台。

川「（一向に離れやしねえ・・・）」

そしてそこから加速していく・・・

・・・いや、二台ともではない。

川「（!??・・・そこで降参かよ・・・?）」

赤く眩い光はバックミラーから消え去った。

・・・遂に、撃墜した。

川「（・・・ふう・・・あそこまで加速、コーナリングで勝てない相手は久々だったな・・・やっぱ、あのレベルの相手に3連戦は望むもんじゃないな・・・）」

十二覇聖・・・残すは「白いカリスマ」のみ・・・。

ただしまだ出てくることはないだろう・・・“四天王”を倒すまでは・・・。

）

川「（ん・・・電話か・・・某MS戦にかかってこなくて良かったって感じだな・・・）」

電話の相手は・・・射命丸だった。

川「もしもし？今日は無冠の帝王、エキゾーストイヴ、紅の悪魔を撃破。これで次に出てくるは四天王でしょう。」

射「おととつと、祐馬さん、実は今回もそれが本題じゃなくてですね・・・」

川「あれっ、そうですか。じゃ何の話ですか？」

射「・・・貴方のお父さん・・・何て名前ですか・・・？」

川「俺の親父？幸之助ですよ。」

射「！・・・なるほど、どつりで息子さんである貴方が速いわけだ。」

川「へっ・・・まさか・・・」

この前射命丸が話していた70スープラの話在即座に思い出す。

川「・・・俺の親父が・・・どうしたんすか・・・？」

射「あやや、まさか息子さんであるのに知らないのですか・・・

いやまあ、調査してたら分かったんですけど・・・。」

川「だから、俺の親父が何なんですか・・・！？」

射「・・・この前のスープラの中の人ですよ。」

川「（やっぱりそうくるか・・・！！）」

咲夜と射命丸が目撃した、猛烈な加速を見せるといふ70スープラ・

・・祐馬が最初に疑ったとおりだった。

・・・しかし、祐馬に衝撃が走るはその次の話であった。

川「・・・そうですか・・・でも、何でそれが分かったんですか？」

射「おっと、お父さんの正体を知らない、と。」

川「まだ何かあるんですか・・・？」

射「じゃあ話しますか・・・。」

貴方のお父さんは、迅帝が出てくるまで、無敵を誇った首都高最速の70スープラ乗り・・・『首都高を統べる覇者』らしいですよ。

川「なっ・・・。」

初めての峠、そして我が父（後書き）

多分一部展開は読めましたよね・・・orz

真の伝説と共に（前書き）

ここから遂に四天王戦へ続きます。奴らとのバトルはクライマックスへ。

真の伝説と共に

川「その話は・・・」

射「いやあ、適当に調べてたら分かったんですが、苗字が川内って事で、何か妙な予感がしたもんですから。」

川「マジですか・・・ちよつと、親父に話を聞いてみます！」

射「あつ、ほーい。」
ピッ

アクセル全開で横羽を駆けていく。

川「（あの親父が、迅帝が現れる前までの首都高最速だつてえ・・・!?何でそんな事隠してた・・・!?とにかく、話は聞かせてもらおう！）」

超速で家に帰ることしか考えてなかった。今すぐ親父に真実を聞かなくてはならない。

まさか親父がそこまでのもんだとは思ひもしなかった。この前の70スープラだつて、そんな性能は高いもんじゃない。

とにかく前だけを見る。

その頃、新環状にて・・・

石「（ありえねえ・・・あんな加速、80スープラでも見た事ねえぞ・・・!?）」

石田が相手にしているのは・・・白い70スープラ。

「（・・・大したもんじゃないか・・・でも、それなりの腕はあるかもな。）」

石「（まるで迅帝並じゃねえか・・・それにコーナリングも、何であんなスピードで曲がれるつてんだよ・・・!?）」

石田のエボ6は、あつという間にちぎられた。

「（これでもう来ねえかな・・・さて、そろそろ帰りますかね。）」

石「（こりゃあ・・・首都高の新たな脅威になるのかな・・・）」

こうして、石田も70スープレの餌食となったのだった。

川「いねえ・・・（帰ってきてねえのか・・・）」
70スープレが停まっていけない・・・。

川「（仕方ねえ、とりあえず待ちますか・・・）」
親父が帰ってくるのを待つ・・・。

・・・数分後・・・
ブルオオオ・・・

川「来たな・・・。」

親父のスープレがやってきた。

幸「おう・・・何か気づいた目えしてるな・・・。」

川「察しのいい親父なら、何が話したいか分かるんじゃないか？」

幸「・・・俺のスープレが、この前お前を乗せたときの性能とは全然違う性能だったこと、か？」

川「それもあるが・・・昔・・・迅帝が出てくる前・・・つまり、親父が走り屋やめるまで・・・首都高最速は親父だったのは・・・本当か？」

幸「スープレが速いってのを知ってるんじゃない、否定は出来ないな。その通りだ。」

川「やつぱりな・・・。今乗ってるその70スープレは・・・もう全部、怪物にしてあるのか。」

幸「そうだ。じゃなきゃ、お前が俺の正体を知ることなかったら。」

川「・・・何で隠してたんだよ・・・？」

幸「それは・・・ちよつと首都高を、よりによってその迅帝が現れたときに、離れなくてはいけないと感じたからだ。」

川「何で離れないといけねえって感じたんだよ？」

幸「・・・お前には、まだそれしか言えない。」

川「何でだよ!？」

幸「・・・それも、まだ言えない。」

川「まだってことは、いつかは分かるってのか？」

幸「ああ。その時になれば口に出してやるつもりだったんだけど、
な。」

川「・・・そうか・・・。まあ、それならば、一つだけ話があるぜ。
」
幸「なんだ？」

川「・・・もう、2年前からこの前までみたいにならないうえ、どっか遠くへ行
ったつきりにならないでくれよ。」

幸「要するに、側にいてくれと。」

川「ああ。・・・別に伝説の奴だからって、色々教えてくれってわ
けじゃないんだが・・・家にいてくれれば、力になる気がしてよ。」
幸「そうか。まあ、これ以降どっか行く予定なんてないから安心し
ろ。」

川「サンキュー。」

最初は、本当に親父が伝説の男だなんて信じられなかったが、今は
もうそんな事は無いようだ。

川「・・・そうだ、ちよっくらエンジンを見せてくれ。」

幸「ああ、いいぜ。」

ボンネットを開ける。

川「（とりあえずこれだけでも確認と行くんだが・・・本当に前に
俺が乗ったときのエンジンと違う・・・）」

違うのはエンジンそのものだけではない・・・。雰囲気が何か違う。

幸「念のため馬力だけ言っておくと、1182馬力だ。」

川「1182!？」

幸「この前載せてたのは、昔お前に話したとおりの722馬力だ。」

川「500馬力以上違うじゃねえか・・・そんな化け物エンジンな
のか・・・!？」

幸「ああ、あと車重も嘘をついてたもんでな。本当は・・・120
0kgだよいだ。」

川「1200kgだよいだってえ・・・!？」

幸「ああ。」

川「怪物つてもんじゃねえぞそれ・・・」

幸「なんなら、今から試してみるか？俺はまだ走れるぜ。」

川「いや、今日はやめにしておく。強敵相手に3連戦やって疲れたもんでな。また今度、助手席に乗せてもらっさ。それじゃ、俺はシヤワー浴びて寝るわ。」

幸「おう、分かった。」

そんなわけで、シャワーを浴びてベッドへ。

幸「(やっぱ、走ってれば知られちまうな・・・こりゃあ、ずっと首都高攻めないとだめかな。あいつが出てこなきゃいいんだが・・・)」

川「(石田さんか。どうしたんだ?)」

ピッ

石「おう、祐馬か。ちょっとお前に、もしかしたら十三鬼将、十二覇聖以上の強敵が出てきたような予感がしてな。」

川「ああ、70スープラですか?」

石「えっ、知ってたのか?」

川「いや、そんな気がして。」

石「なっ、何だよ?」

川「この前、射命丸さんが70スープラとバトルしたら、その70スープラが猛烈な速さだったって話です。もしかしたら、そいつじゃないかってね。」

石「なるほどな・・・」

川「・・・って言うても、俺にはかなり深い話になるですよね。」

石「へ?」

石田に事情を話す。

石「そうだったのか・・・お前の親父さんが・・・」

川「ええ・・・。」

石「・・・そうだ、思い出した・・・。確かに、十三鬼将が出てく

る前、そんなスープラがいたんだわ。」

川「マジですか。」

石「ああ。鈴木さんも殆ど歯が立たなかったってさ。マシン性能もそうだが、一回コーナリング見ただけでも敵わないと思っただけでも、まさかそんな相手に、今日俺が会うことになるとはな……。しかも、それがお前の親父さんだとは……。」

川「はい。」

石「まあそれよりも、お前は奴らを相手にするほうが大事かな。」

川「まあ、実際そうかもしれないですけどね。因みに明日は多分、四天王が出てきますよ。十二覇聖は白いカリスマ以外全員撃破ですし。」

石「そこまで行きやがったか……。ったく、お前はほんとすげえなあ……。」

そして、次の日

パ「なるほどね……。天狗も調べてるだろうとは思ってたけど、貴方の父親がね……。」

川「少し、驚いたんだけどな。」

再び紅魔館にやってきた祐馬。

射命丸と同様、70スープラに関して何か興味を示した咲夜だったが、先日から首都高について調べているパチュリーは、何を見て分かったのかは不明だが、迅帝が来る前は70スープラが最速だったというのを知っていた。

それで更に調べてみようかと、戦歴を調べていたところで、霊夢に連絡して祐馬を呼び出し、それを聞かせてやろうと思っただんだとか。因みに幸之助に幻想郷の事を話すと「なんじゃそりゃ」で終わった。パ「まあ、詳しいことを話すと……。」

迅帝が出てくる十数年前、首都高の走り屋が色々なチームが大量に出来始めたって時期に、その70スープラは首都高に顔を出したらしいわ。

その当時からマシンは非常識だったらしくて、その時点で1000馬力近いエンジンを積んでたらしい。

300km/h加速も、信じられない速さだったらしいわ。

そのマシンに乗って、出来たばかりのチームに襲い掛かった。相手は全滅よ。

古参の強豪チームも歯が立たなかったらしいわ。

それで首都高の更なる強豪として出てきたのが、白いカリスマ。

湾岸で互角だったらしいけど、最終的に精神負けしたらしいわね。

これで名実共に首都高最速になり、『首都高を統べる覇者』っていう通り名がつけられたわ。

その後は首都高のライバル全員を倒すって企んでたらしくて、本当に全員に挑んだらしいわよ。

弱小チームから伝説級の走り屋、そして条件付で挑めるワンダラーまで、ね。

どんなに速いマシン、どんなに凄いテクを持ってしても、彼に敵う奴なんていないって言われたらしいわ。

それで後に、全員に勝った後も戦い続け、無敗のまま1000勝という大記録を作りあげた

川「1000勝・・・すげえ・・・」

パ「でも、その大記録を作った数カ月後、丁度迅帝が出てくる一週間前を境に、姿を消した。それが貴方の言う、父親の走り屋引退ね。」

川「そうだな・・・。」

パ「迅帝が出てきた後、絶対にあのスープラも放っちゃあおけないだろうって事で首都高の走り屋は期待してたんだけど、結局いつまでたっても出てこないし、更に迅帝の活躍があまりに強烈だったから、段々とスープラの話は忘れていったらしいわね。」

川「その程度でその大記録作った奴を忘れるのか・・・?」

パ「でも実際そうらしいけど。」

川「ふん・・・。」

パ「まあでも、それだけの戦績を残しておいて、貴方に走り屋だったという事だけ教えた、とはね。」
川「まあ・・・なんだか、今の俺にはまだ言えない、引退した理由があるみたいですけどね。」
パ「へえ・・・」

博「お帰り。どうだったの？我が父親の伝説の程は。」

川「それはまあ、伝説と呼ぶに相応しいもんだった。今まで残した戦績は1000戦以上、全戦勝利・・・当時の首都高の走り屋は全員撃破・・・」

博「強烈ね・・・それを聞いただけでも・・・」

川「びつくりしたさ・・・」

博「そんな人が家にいるだなんて・・・凄じやない。」

川「ああ・・・さあて、それじゃ今夜は四天王第一戦かな。」

博「四天王・・・まずはどこへ行くのよ？」

川「C1だ。俺の予想通りなら、『ダイングスター』が出てくる。」

博「そう。迅帝との再戦もあと少し、頑張りなさいよ。」

川「OK。」

23:11

川「それじゃ親父、行ってくる。親父は行くのか？」

幸「いや、今日は行かねえ。家にいるさ・・・四天王だかなんだかとのバトル、負けるんじゃないぞ。」

川「サンキュー、それじゃ行くぜ。」

首都高へと向かっていく。

幸「(四天王・・・あいつがまず相手にするって言ったのは『ダイングスター』だとか言ってたっけな・・・青いGTO、確かにそんな奴がいたな・・・。C1の奴だよな。)」

数分後、神田橋からC1内回りへ進入。

川「(さくで、ダイングスターはいるのかね・・・)」
暫く走り続ける・・・。

川「(それらしい雰囲気はあるんだよな・・・)」
と、その時である。

川「(・・・っ!?!?いつの間に後ろに・・・こいつは青のGTO・・・
・ダイングスター!!!)」

後ろから突然パッシングを放ってきたそのマシンは、確実にダイングスターだ。

四天王の一人でC1を攻めるGTO・・・その走る様はC1を攻めるどのチームリーダーよりも凄まじい。

さあ・・・四天王との戦いが始まる。

川「(それじゃ、行くぜ・・・!)」
スタート・・・!

川「(・・・ちつとあつちのほう 가속は速いか・・・だが、C1ではコーナリングも重要だからな、そこら辺はどうなんだ・・・?)」
ブロックしながらグリップ走行、霞ヶ関トンネルへ侵入。

川「(今のは余裕で守れたが・・・くっ、抜かすかっ・・・!)」

左から加速で狙われるが、即座に対応してブロック。

川「(簡単に抜かせてたまるかよっ・・・)」

緩い左コーナーを抜けて行き、右コーナー。

川「(あの加速だところいったちよっとしたストレートも危ないが・・・問題は赤坂ストレートか・・・)」

更に右コーナーを抜け、次のストレートで257km/hへ。

川「(そろそろ出口・・・ちつ、そこで狙ってくるのか・・・!!)」
トンネル出口前の右コーナーでGTOがインをついてくる。並んで出口の左コーナー・・・そして赤坂ストレート。

川「(抜かれちまったか・・・だが、負けはしねえぞ・・・)」
二台とも300km/hオーバーから減速してJCTの左コーナーへ。

川「(こっから芝公園のとこまではついていけるはずだ・・・)」

一般車を縫うようにして避けながら、280km/hで突き進んでいく二台。

川「(次の左コーナー・・・おおっと、無理にドリフトしようとするなよ・・・)」

GTOがドリフトしようとするがアンダーが出てしまった。

・・・だが、まだシルビアは抜けなかった。

川「(ミスったくせにきつちり守ってきやがって・・・)」

アンダーから速攻で復帰してシルビアをブロック、立ち上がりで猛烈に加速し芝公園のコーナーへ。

川「(よし、とりあえずここはついていける。次のコーナーでチャンスが出来ればいいけど・・・)」

S字を抜けて行く二台。まだチャンスは出来ない。

川「(ちつくしょう、ここでも抜けないか・・・)」

浜崎橋JCTが迫る。当然銀座方面へ向かう。

川「(このこのドリフト、上手いな・・・)」

なかなかのドリフトを見せ付けるGTO。

230km/h程まで加速、汐留JCT前のS字へ。

川「(ここは少し道幅は広いが、それでも抜けないか・・・)」

JCTを過ぎて、トンネル内のコーナー・・・

川「(・・・おお・・・!)」

コーナー出口、アウト側に誰もいない。狙える・・・

川「(いけえっ!)」
だがしかし。

川「(ちっ、無理か・・・)」

即座にブロックするGTO。

川「(またチャンス見つけねえと・・・)」

間も無くC1の4分の3をバトルした事になる。それでも決着はまだ先のようにだ。

しかし、チャンスは出来た。・・・中央分離帯での出来事である。

川「(うおおっ、そこでミスるのか・・・っとお、来たっ!!!)」

GTOは分離帯前のコーナーで少しバランスを崩し、そのまま壁にぶつかりそうになったため減速。

丁度、どちらの車線にも一般車はいない・・・チャンスだ。

川「(よし、成功・・・!)」

GTOをパスした。

川「(ただ次の江戸橋までのストレートか・・・大丈夫、守れるはず・・・!)」

2つ目の分離帯を抜け一気に加速する。

張り付くGTOをきっちり守り、坂を超え、左低速コーナーへ入る。

川「(もうすぐ神田橋、そこを過ぎればバトル開始点までもう少しになっちまうのか・・・)」

右コーナー、左コーナーと抜けていく。

川「(・・・張り付いてきやがって・・・)」

その瞬間・・・

川「(おっ?・・・降参・・・か・・・?)」

GTOがほとんど減速していく。コーナー前ではあるが、緩いコーナーなのでそこまで減速する必要は無い・・・

ダイングスター、ギブアップ。祐馬の勝利である。

川「(2周目突入を前にしてギブアップか・・・まあでも、勝てたから良かったぜ・・・)」

家に帰る祐馬。一夜で四天王と連戦する気はない。

流石にそこまでやったなら精神が完全に持たなくなる、という事を考慮しているからだ。

川「ただいま。」

幸「お帰り。どうだったんだ?四天王の一人とバトル出来たのか?」

川「もちろんだ。C1の奴だぜ。」

幸「その様子だと、勝ったみたいだな。」

川「その通りだ。というわけで、明日は新環状の奴とバトルするつもりだ。」

幸「そうか……。何が何でも、負けるんじゃないぞ。」
川「当たり前さ。」

次の日……

石「今日は新環状の夢見の生霊か……。あいつもお前の親父さんみたいなのに、昔から速い奴なんだよな。年とってるわけじゃないみたいだけどさ。」

川「へえ……。。」

石「舐めてかかれば痛い目合っぜ。お前なら大丈夫だけどな。」

川「まあ、四天王の一人ですからね。手え抜いたら即終了ですから。」

石「そうだな。それじゃ、頑張れよ。」
ピッ

川「（夢見の生霊か……。NSXねえ……。よし、それじゃ夜になつたら行きますかね。）」

22:41

幸「（夢見の生霊か……。こいつとのバトルは鮮明に覚えてるな……。何度もあいつ、挑んできたんだっけねえ……。随分若造だった記憶があるな……。そいつを祐馬が倒せるか否か……。まあ俺の息子である以上、負けは許されねえからな。）」

その頃、湾岸線上り、有明JCT付近にて……

川「（いねえな……。どこにいるんだか……。）」

夢見の生霊の乗る、黄色いNSXを探す祐馬。

川「（……。っ！また知らねえうちにパッシングかよ……。?）」

昨日と同様、知らない間に後ろからパッシングされていた。相手は・

黄色いNSX……

川「（夢見の生霊だ……。!）」

夢見の生霊・・・十三鬼将でもなかなか経歴は長く、ドラテク、マシン性能共にハイレベルである。

新環状は特に、そのレベルを遺憾なく発揮する。

川「(それじゃ早速行くぜ・・・!)」

辰巳JCT前、バトルがスタート。

川「(まずはここで守りきれるか・・・次の左コーナーはドリフトで行けば大丈夫なはずだ。)」

辰巳PA前を過ぎて左コーナーへ。加速はNSXより劣るが、コーナリングは互角だ。

川「(いいブレーキングドリフトだ、減速も最低限に抑えてくる・・・)」

そこから立ち上がって200km/h、250km/hと速度を増していく。

抜かれはしない。ブロックしながら突き進んでいく。

川「(まだ大丈夫だ・・・そろそろ左コーナーだな。)」

手前の右コーナーで荷重移動を行い、そこから次の左コーナーでドリフト。イン側車線の一般車を、更に内側の部分から抜き去る。

NSXはアウトからパスした。

川「(よし、これで少しは差あついたか・・・)」

すぐにアクセル全開で加速していく。

川「(ただ・・・ここでまた追いついてくるか・・・)」

次の右コーナー前で追いついてくる。

川「(なるべく抜かれずにいきたいもんだが・・・どうだか・・・) コーナーを抜けていく。

川「(っ・・・揺さぶって来やがる・・・!)」

間も無く箱崎JCT。手前の右コーナーを軽く滑って抜け、JCT後の左コーナーを170km/h程でドリフトする。

川「(自分で言うのもなんだが、アクセルワークは完璧だぜ。次の右コーナーを抜け、江戸橋JCT。C1外回りへと入る。

川「(・・・くっ、そこで来るってか・・・!?)」

JCTの左コーナー、NSXがアウトからインに入り込もうとする。
川「（抜かせるかよっ・・・!）」
即座にブロックに移るシルビア。

川「（ふう、危ない危ない・・・ちっ、まだ油断は出来ねえ・・・!）」
下り坂で右からNSXが仕掛けようとするが、これもすぐに対処する。

川「（次の分離帯は・・・左にいるな・・・ここで抜かれることは無いよな・・・）」

分離帯を右から抜け、アウトギリギリに左コーナーを抜ける。

川「（次の分離帯・・・!）」

2つ目の分離帯が迫る・・・が。

川「（・・・おい、そっちはハズレだぜ?）」

シルビアは再び右から抜けるがNSXは左。左には一般車がいる。

NSXは減速を余儀なくされた。

川「（ここで一気に引き離す・・・!!）」

アクセル全開で、銀座を駆け抜けていく。

川「（もう全く見えないな・・・あと少し走ってみるか・・・）」

暫く走り続け、浜崎橋、芝浦を過ぎ、台場線に行く。

レインボーブリッジで徐行しても奴はやってこない。

川「（・・・ここまで様子を見る必要も無かったな。勝ったぜ。）」

夢見の生霊、一般車を避けるための大幅な減速からリタイア。四天王二人目を撃破した。

川「（昨日みたいに抜かれることは無かったが・・・ピンチはあったな・・・さあて、早く帰ってシャワー浴びるか・・・）」
家に帰る。

幸「お帰り・・・勝ったのか。」

川「おっ、よく分かったな。」

幸「お前が負けたら、完全に落ち込んで帰ってくるだろうからよ。」
川「まあ、そうだな。」

幸「倒したのは、『夢見の生霊』か？」

川「ああ。黄色いNSXだ。」

幸「・・・あいつ、昔俺が本格的に走ってた頃、何度も何度もリベンジしてきたんだよ。」

川「へえ・・・」

幸「まあそいつは当時も相当速い奴だったんだけどな。俺に遭遇すればバトルを怠らない・・・そんな感じだった。」

川「そうなのか・・・。親父と一番バトルしたって事か？」

幸「下手すればそうなるかもな。」

川「っほー・・・」

幸「それで・・・明日は横羽と湾岸、どっちだ？」

川「横羽だな。湾岸は一番最後に行くさ。」

幸「『シャドウアイズ』だったっけか？」

川「そうだ。青い70スープラっつーのが妙だけどな。」

幸「まあとにかく、明日も頑張れや。」

川「サンキュー。」

数分後・・・

川「（おっ、射命丸さんか・・・）」

ピッ

川「もしもし？もしかしてまたいつもとは違う話題ですか？それとも取材？」

射「大丈夫大丈夫、今日は普通に取材です。」

川「そうですかい。今日は新環状を攻める四天王、『夢見の生霊』撃破です。」

射「ほうほう、となると、残る四天王は『追撃のテイルガンナー』

と『シャドウアイズ』ですか・・・」

川「そうですね。」

・・・っとまあそんな感じで取材を受ける。

射「それじゃ有り難うございました。そろそろ最終決戦、頑張つて下さいよ。」

川「OK、もちろん明日も頑張りますさ。」

ピッ

幸「・・・なんか知らないうちに相当の有名人が。」

川「おつ、親父、聞いてたのかよ・・・」

幸「取材か何かか？何か車雑誌の取材でも受けたのか？」

川「ああ。『文々。新聞』っていう走り屋情報新聞だ。」

幸「ふう〜ん、そんなのがいつの間にか出来たのか・・・」

そいで次の日、23:02・・・

川「それじゃ行つてくるぜ。」

幸「つとお待った、俺も行く。」

川「えっ？俺と一緒にか？」

幸「ちげえよ、首都高に行くつてだけだ。今日は攻めるぜ。」

川「なんだ、そういうことか。シャドウアイズとのバトルを見学かと思つたぜ。(つて言つても、いればの話だけだな・・・)」

幸「まさかな。それじゃ行くか。」

家の鍵を閉め、出発。途中で別れて、それぞれ出入口へ向かう。

川「(さあて、いるかな・・・と思つたら・・・)」

芝浦から入るなり、いきなり後ろからパッシングをされる。

川「(あれは70スープラ・・・『シャドウアイズ』!)」

シャドウアイズ・・・横羽を攻める四天王。70スープラに乗り、凄まじいスピードで横羽を駆け抜ける。

いつもどおり、早速バトルが開始された。現在羽田線、芝浦出入口を過ぎてすぐのところである。

川「(毎度の事、速いな・・・)」

スタートして後ろをキープするスープラ。

川「(次の区間で300km/h近くまで出せるか・・・?)」

2つコーナーを抜けた後、下り坂を使って一気に加速、290km/hをマーク。スープラも同様に加速する。

川「(いい感じには行けてるが・・・あっちもいつ仕掛けてくるか・・・昨日みたいに、抜かれず勝負が終わればいいもんだけど。)」
大井JCTを過ぎる。

川「(次のコーナー・・・よし、上手くいった。)」
次々と迫るコーナーを抜けていく。まだスープラはシルビアに張り付いたままだ。

鈴ヶ森を走っていく。

川「(・・・っ・・・ここに来るのかよ・・・!)」
昭和島JCT前のストレート・・・手前の右コーナーからスープラが仕掛けてくる。
横に並ばれてしまった。

川「(・・・あいにく、今回のバトルは俺が運悪いか・・・)」
目の前には一般車。減速で対処する。

当然、スープラに前を行かれてしまった。

川「(こっからならまだ射程圏内だ。追いつける・・・!)」

一般車を対処したらアクセル全開、昭和島JCT付近で後ろにつく。

川「(後はどこでぶち抜くか・・・)」
JCT後のコーナー、二台とも200km/h程のグリップで抜けていく。

川「(一般車もないからいいラインで走れたが、あっちも同じライオンで抜けていく、か・・・)」
一気に加速していく。

川「(加速では劣ってもそれなりについていけるな。)」
二台とも300km/h近くのスピードで走っていく。
そして、チャンスは訪れた。

川「(・・・ここで来たかっ!!)」
途中の左コーナー、アウトからオーバートイクを図る。

川「よし、いける・・・！」

コーナー出口で前に出た。

川「よし・・・さあて、それじゃ引き離しにかからねえと・・・」

即座に抜き返そうと狙ったスープラをブロックする。

川「（やっぱ・・・張り付かれるとプレッシャーは相当来るよな・・・）」

次のコーナーをほぼ減速なし、273km/hで抜けていく。

川「（さあどうだ・・・まだ来るのか・・・）」

浜川崎出入口を過ぎる。

川「（・・・なっ・・・そこか・・・）」

突然スープラがスローダウン・・・。バックミラーからスープラのライトが完全に消えた。

シャドウアイズ、ギブアップ・・・祐馬の勝利である。

川「（これで残る四天王は一人・・・『追撃のテイルガンナー』か・・・）」

家に帰っていく。

川「（・・・まだ帰ってきちゃいないか・・・まあそりゃそうだな。）」

家に入る祐馬。まだ幸之助は帰ってきていない。

シャワー浴びて自分の部屋行って、パソコンを見る。

）

川「（ん・・・霊夢か・・・）」

ピッ

川「もしもし？」

霧「もしもし、祐馬か？」

川「あれ？魔理沙か。」

霧「ちよつと霊夢の電話借りてるんだけどな。霊夢から聞いたけど、

お前さんの親父は昔首都高の伝説だったんだな。」

川「そうだ。俺も聞いた事無かったんだけどよ。」

霧「で、実はさっきお前さんの親父と新環状でバトルしたんだよ。」

川「おっ、魔理沙もバトルしたのか……。」

霧「ああ。なんていうか……ありや70スーパーとは到底思えない加速だったさ。あの加速は信じられない。」

霧「（なんだこいつ……もうあれじゃ400km/h行ってるんじゃないのか……!?速すぎだろ……）」

川「なるほどな……。」

霧「親父さん……ほんとすげえ奴だな。あんなマシンを乗りこなせるなんて。」

川「ああ。昔も相当腕あつたらしいしな……。」

霧「まあそんなわけで、私とあんたの親父でバトルしたってわけでそれじゃあな。」

川「じゃあな。」
ピッ

電話切ったその時、車庫に70スーパーが入ってくるのが見えた。

川「（おっ、丁度帰ってきたな……）」

幸「ただいま。」

川「お帰り。どうだったんだ？今日の戦績は。」

幸「3戦3勝、って感じだな。」

川「やつぱし、全勝か。」

幸「当然だ。お前もその様子だと、勝ちで終わったみたいだな。」

川「そうだ。シャドウアイズ撃破、後は湾岸線の奴だけだ。そいつさえ倒せば白いカリスマ、白いカリスマを倒せば迅帝が出てくるはずだ。」

幸「あと少しか……まあ明日も頑張れや。」

川「サンキュー。」

次の日、23:11・・・

幸「（FC乗りが最後の相手か・・・湾岸でどれだけ攻めていけるかね、祐馬が・・・）」

川「（さあ、四天王最終戦だ・・・まずは探しださねえと・・・）」
湾岸線下りへと入っていく。

東京港トンネルを過ぎ、大井JCTを抜けた頃・・・

川「（・・・そこで待ち伏せか・・・!）」

一台の赤いFCが大井JCTを過ぎたところで、道路脇でシルビアを待ち伏せしていた。

川「（来やがったな・・・『追撃のテイルガンナー!』）」
追撃のテイルガンナー、祐馬にとって最後の四天王。

FCに乗りながらも猛烈なスピードを出し、湾岸線で誰にも負けないくらいのスピードを出し続けている。

川「（湾岸でFC乗って攻められるだけの实力を見せてもらおうじゃねえか・・・行くぜ!!）」

バトルがスタートする。四天王、最終決戦の幕開けだ。

その瞬間、祐馬は思った。

川「（速え!紅の悪魔並に速いか・・・!?エキゾーストイヴのスーパーよりは速いのは確実・・・)」

アクセル全開で攻めるシルビアだが、FCを守りきれない。

そのままテイクされる。

その後も加速し続け東海JCTを通過、

川「（・・・390km/hか・・・あっちは・・・おおう、最高速の設定が甘いんじゃないか?）」

加速はFCのほうが上だが、最高速は何故かほぼ同じだった。

しかもスリップにつけば、徐々にFCに近づけるくらいだったのだ。とはいえ、何かあればいつ離されてもおかしくはない。

川「（差はそれなりについてはいるけど、これで徐々に近づけるな

ら全然OK、後は集中切らさないように走ればいい……！」
その後しばらくは何も考えず、ただひたすら走り続ける。
さほど交通量も多くは無いし、ほんとにただひたすらと……

川「……後もう少しか……」

川崎浮島トンネルの中間点辺り、大分差も縮まってきた。

川「……っ!?」

FCが一般車を避けようとしたら、その避ける車線に一般車がやってきた。思わずFCはフルブレーキング。

その少し後ろにシルビア。こちらでも減速する。

二台とも、減速してからの速度を180km/hに抑えた。

川「これで近づけたが、また離されちまうか……最低限、差を広げないためには、アクセル全開でなんとかしがみつくなえ……！」

復帰して再びアクセルを踏む足に力を込める。

このまま先ほどのように離されていくかと思われたが、FCの出足が遅れたため、さほど差が広がることは無かった。

最高速付近まで行けば、シルビアのチャンスだ。

川「もうすぐ392km/h……よし、近づける！」

FCも最高速に達したがシルビアは更に加速、そしてスリップ状態での最高速に到達。

再びFCに近づいていく。

川「……よし、並べる……っ！」

シルビアはFCの背後から徐々に右へ右へと移り、FCと並ぶ。

川「(抜いたあっ……!)」

FCを抜く。速度ではまだシルビアの方が少し速い。

川「(こっからがきついな……もう一度、集中しねえと……)」

ひたすら湾岸線を400km/h近くで進んでいく。ブロックしながらだから尚更きつい。

川「(このまま負けるわけにはいかねえ……まあ、リベンジすり

やあいい話だろうけど・・・ここまで来て敗戦だなんてのは、プライドってもんが許さねえんだよな・・・。」

周りの景色が変わるのを見てる間もない。目の前を見て、とにかく負けなため、前を守り続け、とにかく走っていく・・・。

川「・・・あれは・・・鶴見つばさ橋・・・そろそろ大黒ふ頭か・・・ここはまだまだ湾岸線に行くのが妥当だよな・・・。」

橋を抜けて大黒ふ頭を過ぎて、ベイブリッジが目の前に迫る。

川「(狩場線の向こうまで行くか・・・?・・・)」

ベイブリッジに入った瞬間、である。

川「(・・・そこで降参か・・・!!)」

FCが急激に減速。あっという間にバックミラーから消え去った。それは、祐馬が四天王全員を撃破した証となった。

追撃のテイルガンナー、ギブアップ・・・。

川「(・・・つふう・・・ああ・・・疲れた・・・)」

額からは2、3滴の汗が出ている。

川「(・・・とりあえず心を落ち着かせよう・・・まずは家に帰るか・・・)」

家にて

川「(今日も出かけてるんだっけな・・・)」

とりあえずとつと風呂に入る。

川「(これで・・・次は『白いカリスマ』だよな・・・迅帝が先に出てくることはないだろ・・・確か、白いFDに乗ってる奴だっけ言ったよな・・・迅帝と互角に戦える奴だもんな・・・)」

幸「ただいま・・・」

川「おう、お帰り。」

幸「・・・勝ったか。」

川「ああ。残るは白いカリスマ、そいつを倒せば迅帝・・・目的達

成まで後ちよつとだ。」

幸「そうだな・・・白いカリスマは注意しとけよ。あいつぁ四天王より更に速いからな。」

川「それくらいは承知だ。ただ、どれくらい速いか・・・」

幸「昔とは違うかもしれないねえから、俺もそこまでは言えねえな・・・ただ、当時は俺と対等に渡り合ってたつて事はいえるな。」

川「そうか・・・だとすると、侮ったら死んだも同然か・・・とにかく、明日に備えねえと。」

幸「だな。」

「よう、白いカリスマさん。」

「おう、迅帝。」

「うちの四天王が負けたよ。これでやつと、あんたの出番だ。」

「ほう・・・お前の言った、奴の素質に感じる『何か』は正解だったってことか。」

「ああ。俺らとバトルするうちに、マシン性能はさほど変わらないのにどんどん速くなって来てるみたいだ。」

「ほうう・・・」

「それじゃ・・・本気で行って下さいよ。」

「分かってるさ。」

次の日は整備場で最終チェック。

石「これで迅帝前の最後の一戦か・・・」

厚「まあ勝てればの話だけど、きつと勝てるよな。」

川「ああ。絶対に勝ちたいところだ。相手が迅帝並とか関係ねえ、とにかく俺はここまで進んできた。絶対に負けるわけには行かないぜ。」

石「白いカリスマはマジで速いからな。とにかく、なんとかしてでもついていけよ。」

川「はい！」

そして、夜である。

幸「（白いカリスマ・・・確か3ローターに載せ変えてて、結構なパワー発揮してたっけな・・・あいつに祐馬が果たして敵うのかどうか・・・）」

川「（さあ、探しますかね・・・って言っても、こんな弱気なところから入っちゃあ駄目なんだけどよ・・・。）」

入ったのは芝公園JCT、C1外回り。
迅帝並となると湾岸での加速であつという間に敗北という事もありえる。それだつたら少しでもバトル時間を長くしたほうがって事らしいが・・・

川「（まあとにかく、見つけれればそれでいい・・・つとあ、そんな事言ってるうちに・・・！！）」

後ろから、今までのライバルよりも更に眩い光が映り込む。

白いカリスマだ・・・！！

川「（よし・・・ここからは完全に伝説級だ・・・絶対にミスするな、そしてベストライン、ベストスピードで抜けていけ・・・！！）」
迅帝に次ぐ伝説、白いカリスマ。3ローターエンジンに載せ換え、数値は1000馬力ほど、車重は900kg台という恐ろしいFD。
その加速はどの首都高の走り屋をも圧倒する。

川「（さあ・・・スタート・・・！！）」

霞ヶ関トンネル内で、一大決戦が始まった。

川「（ぐっ！？速え・・・！！）」

80km/hから鬼加速でシルビアを追い詰めるFD。丁度シルビアの隣に一般車がいたので、テイクされなかつたのは幸いか。

川「（初っ端からあんなもん見せ付けられるとびっくりするな・・・だけど・・・それに気にとられたら、絶対に勝ちはねえ・・・！！）」

だが、前にいる時はプレッシャーしかなかった。それでも祐馬は、コーナーをベストラインで駆け抜けていく。

そして、霞ヶ関トンネルを抜けていった。

川「（・・・こりゃあやっぱきつい・・・抜かれたら一貫の終わりか
もしれねえし・・・）」

神田橋に入る。

川「（・・・張り付くか・・・！？なっ、そこからいけるのか・・・！
？）」

後ろに張り付いたと思ったら、次コーナーでラインをこじ開けて抜
かそうとしてきた。

川「（これは無理か・・・）」
守るのは諦めるしかなかった。パスを許す。

川「（さあ、こっからが大問題だ・・・）」
抜かしたFDに、コーナーを抜けながらついていく。

その後神田橋を抜けると・・・江戸橋JCTでは、C1へと進んだ
のだった。

川「（・・・大がつくほど問題じゃなかったな・・・加速で離され
ても常に俺の視界に映っている・・・それだけ勝機はあるってこと
だよな・・・）」

分離帯を抜けた後の左コーナー、いい感じにドリフトしてなんとか
FDに迫る。

川「（きついのは変わりないけど・・・ひよつとしたらいけるかも
しれねえ・・・いや、それを信じてバトルをやってるんだよな・・・
！）」

2つ目の分離帯を抜け、次に迫るS字を抜ける。

川「（コーナリングは、限界で行けばこっちが勝るか・・・？ならば
ガンガン攻めていかねえと・・・）」

まだ大した焦りは無かった。とにかく早く奴を抜き返すため、オー
バースピードギリギリでコーナーを攻めていく。

川「（もうすぐ浜崎橋か・・・羽田に行くか、それともまだC1で
やるのか・・・）」

トンネルの中のコーナーを抜け、汐留JCT前で一気に加速。

差はあるが、まだ大丈夫だ。

次のS字を抜ければ、もうすぐ浜崎橋JCT。

川「（・・・羽田か・・・！芝浦は横羽か新環状か、どっちだ・・・？）

羽田線へと進入。すぐに芝浦JCTが迫り・・・

川「（新環状・・・！）」

台場線へと入った。

川「（もしかしたら有明で湾岸線に行かれるかもしれないねえ・・・
そしたら勝機は・・・どうなる・・・！？）」

300km/h付近まで加速して一気に減速し、左コーナーを抜ける。その後はレインボーブリッジへ進入・・・
レインボーブリッジをあつという間に抜けていく。

川「（・・・おっ・・・近づける・・・！！）」

左コーナー、一般車の真後ろに来てしまったFD。大きく減速してしまふ。

そしてシルビアが追いついて、更に抜き去った。

川「（ここでチャンスが訪れるとは・・・でも、やっぱり加速で追いつかれる・・・！！）」

復帰したらやっぱり鬼加速でシルビアに迫るFD。

川「（有明JCT・・・湾岸線か・・・上りに行かせてもらおう・・・！！）」

JCTの左コーナーをドリフトしながら颯爽と抜けていく。

川「（ここで耐え切れ・・・！！！！）」
湾岸線・・・

250、300km/hと加速していく。

後ろのFDは更なる加速で一気に350km/hオーバー！

川「（つちい・・・守りきれねえ・・・！！！！）」
FDが横に並んでくる・・・

・・・その瞬間である。

ガコンッ

川「!？」

祐馬の瞳はその一瞬で、何も映らなくなった。何も考えず、足も手も思うように動かなかつた……。それだけ信じられない出来事だったのだろうか……

シルビアのボンネットの中から、煙が噴き出す。

そう、エンジンブロー……。

川「……シルビア……。？……。おい……。っ……。」

おい、兄さんや、起きてくれ。あんまここにいと迷惑になるぜ。

川「ん……。」

幸「やっと起きやがったか。偶然通りかかったんだ、運が良かったな。」

川「親父……。」

祐馬が目を覚ましたのは数分後、幸之助の声で起きた。

既にシルビアは、幸之助のスーパーに繋いである牽引器に繋がれていた。

あの時、祐馬は確かにほぼ無意識だったが、運良くシルビアは、湾岸線の道端に、タイヤを滑らせた不安定な状態で、右サイドを壁にぶつけて止まったのだ。

その後白いカリスマのドライバーも降りてきて祐馬に声をかけたが祐馬は起きず、そこを偶然幸之助が通りかかった。

白いカリスマも幸之助とバトルした中々のライバルであったが、幸之助が、自分の息子であるという事を話して「後は俺がやる」と話

すと、そのまま帰っていった。

幸「大丈夫か？まさかの相棒の心臓停止が信じられなかったか。」

川「・・・よく分からないが、そうだろうな・・・ブローした瞬間、何も見えなくなった・・・」

幸「そんなんでよく事故らなかつたな・・・一歩間違えれば棺桶になつてたぞ。」

川「何でだろうな・・・」

幸「とりあえず、動けるよな？とりあえず俺のスープラに乗れ。」

川「おつ、おつ・・・」

幸之助のスープラに移動する。

そしてスープラが動き出した。

川「・・・マジでサンキュー・・・。」

幸「ああ。」

川「・・・これで、しばらくは停戦だな・・・」

幸「だろうな。でもなんとか数日で復活させるから心配するな。」

川「えつ、親父が直してくれんのか・・・？」

幸「はじめっからそのつもりだ。第一、損傷は大したもんじゃないし、問題なのはエンジンだけ、だからな。傷とかは板金に頼めば何とかなる。」

川「・・・親父にはどんなに礼してもしきれねえな・・・」

幸「礼なんざいらねえよ。・・・ああでも、夜は首都高攻めさせてもらうからな。」

川「大丈夫だ。マジで有り難う、親父。」

幸「おう。」

こうして、シルビアは復活することとなった。

川「・・・そうだ、今度同乗走行してくれないか？親父の攻めてる姿を横で見たいんだ。」

幸「同乗走行？まあ、構わないぜ。」

川「サンキュー。早速明日、乗せてもらっていいか？一回見せてもらえるだけでいいからさ。」

幸「大丈夫だぜ。明日は攻めるだけで特に何も無いし。」
川「そうか。」

その後、板金屋と思われるところにシルビアを預けた後、2人は家に帰った。

射「なるほど・・・エンジンブローですか・・・それじゃしばらくは戦えませんねえ・・・」

川「でも親父が何とかしてくれるつもりらしいんで、復活はしますよ。」

射「ほうほう・・・」

次の日に出回った文々。新聞のトップとなった。

その次の日の朝・・・

川「・・・あれ・・・また親父いねえな・・・朝っぱらから俺のシルビア見てるのか・・・？」
「
まずは朝飯を食う。」

川「（はぁ・・・本当に昨日俺のシルビアのエンジンが逝ったと思うとな・・・）」

特に皆にシルビアに対して思い入れを語っているわけではないが、心の中では相当大事にしている、強い相棒であった。

走り屋になり始めたその日から乗り始めたマシンだから、そりゃあ思い入れは強いだろう。

川「（でも・・・復活してくれるんだからいいよな・・・おっ?）」

そう思っていると、車庫に見知らぬ車が一台入ってきた。

川「（あれは・・・S12・・・!?)」

83年から88年まで製造された、S13よりも前の、リトラクタブルライトをつけたシルビアである。

因みに色は白。

川「（乗ってるのは親父か・・・なんでS12を・・・?)」
早速、車庫に駆けつける祐馬。

川「おい親父、このS12は・・・」

幸「ああ、いくらなんでもシルビアがいねえ間、ちつとも攻められないのは寂しいだろうと思ってな、古いシルビアによる、お前の代車だ。」

川「代車・・・？」

幸「代車って言っても中身は化け物だぜ。ボンネット開けてみる。」
ガチャツ

川「これは・・・」

幸「640馬力を発する4G63改、エボ9のエンジンをいじったもんだ。」

川「マジかよ・・・!？」

幸「これだけで相当の速さだぜ。トルクも相当なもんだ。」

川「すげえ・・・っていうか、マジでこれ俺の代車なのか・・・？」

幸「そうだ。車が無いよりはいいだろ？」

川「まあ、そうだけど・・・」

幸「ただ少々じゃじゃ馬だからな、そこら辺は気をつけるよ。お前なら扱いこなせるはずだ。」

川「分かった。サンキュー。」

幸「おう。それじゃ俺はちよっくら行ってくる。」

川「OK。」

そして幸之助は出かけていった。

川「(S12か・・・まさかこの目で見ることになるとは・・・つつつても、実際今日は乗らないで親父の助手席だけだな。乗らないのはなんだから、ちよつと街乗りしてみるか・・・)」
「
試しにエンジンをかける。
ブルオオッ!!

川「(うひょー、こんなマシンからこんな唸りが出ると思っか・・・?)」

出発する。

川「(・・・攻めなくても十分凄い・・・それだけ雰囲気があるって

ことかな・・・」

そんな感じで、普通に一般道を走っていった。

そして夜、23:22

川「よし、早速行こうぜ。」

幸「準備はOKだな。行くぞ。」

家を出発した。

銀座出入口・・・

幸「それじゃ、行くぞ。途中でバトルがあったら受けるつもりだからな。」

川「分かった。」

遂に首都高へと進入した。まずはC1内回りから

幸「・・・ほおう、早速出てくるか・・・。」

幸之助は目の前にいたR34にパッシングを放った。

川「こいつ・・・RINGSのリーダーだ。」

幸「RINGS?」

C1を主に攻めているチーム、RINGS。C1でも相当腕のあるチームで、リーダーである孤高のジャッカルは特に速い。

その孤高のジャッカルを相手にするのだ。

川「どうだ、勝てそうか?」

幸「つたりめえだろ。」

バトルがスタートする。

川「っ!?(なんだこの加速!?)」

祐馬はその加速を恐れてしまった。

200km/h加速なんてあっという間の世界、300km/hまでも、車とは思えないスピードで達してみせる。

ただ、丁度ブロックされて抜けなかったのだが。

川「(次のコーナーは・・・っ!?!?そんな減速でドリフトできるのか・・・!?!?)」

一気にドリフトしたスープラ。豪快なドリフトをしながら、R34をオーバーテイクしてみせる。

幸「そこそこって感じかな・・・」

川「（これで走って相手がそこそこってのかよ・・・）」
とにかく、何もかもが凄まじかった。

江戸橋JCTで向島線へと向かう頃には、もうバックミラーから遠いところへ消えていた。

幸之助の勝利だ。

川「速え・・・すげえな、親父・・・」

幸「まあな。マシンの性能を惜しみなく使い切る、それが首都高を極める者だ。」

川「そうだな。」

一度スローダウンするスープラ・・・と思ったら。

川「・・・ん・・・？」

幸「なんだこのアリストは・・・バトルしようぜって言いたいのか・・・？」

C1からやってきた赤いアリストは、スープラの前に出てハザードランプを出す。

アリストが前って形でバトルしたいらしい。

川「どうする、親父？」

幸「・・・まあ、受けて立たない理由は無いな・・・」

とりあえずパッシングを放ち、バトルする意思がある事を伝える。

川「さあ、スタートするぞ。」

幸「ああ。」

バトルがスタート。

川「おおっ・・・（やっぱこのスープラの加速は尋常じゃねえ・・・っていうか、アリストも案外速えな・・・スープラを十分抑えられる速度だぞ・・・？）」

挑戦者ながら前にいるアリストも、かなりの加速を見せていた。

幸「・・・苦戦するほどじゃ無さそうだな・・・遅くても少し先の右

コーナーで抜けるだろ。」

川「そうか。（実際あのアリスト、速いしな・・・）」

アリストはスープラを抑えるというより、スープラがただ様子見という感じだった。

幸「よし、行くぞ。」

川「おつ、OK・・・うおつ・・・（すげえコーナリング・・・!）」

木場辺りの右コーナーで、アリストを抜いた。

川「（やっぱオーバーテイク技術もすげえな・・・）」

ここからはスープラの独壇場となる。

300km/hを超え、アリストを引き離す。

川「（こりゃあアリストは負けだな。）」

幸「よし、これでもう来ないだろ。」

本日2回目の勝利だ。

幸「さあて・・・辰巳は入れないから、ちよつくら台場行って休むか。」

川「えつ、もう休憩か?」

幸「いや、なんかトイレ行きたくなってきた。」

川「そういうことか。」

というわけで、湾岸を過ぎて、台場線に入り、芝浦PAへ。

川「次は湾岸線か?」

幸「そうだ。お前のお望みはそれだろ?」

川「お察しがいいな。それじゃ俺はコーヒー飲んでるから。」

幸「分かった。」

祐馬はPA内へ、幸之助はトイレへ。

自販機でコーヒーを頼む祐馬。

川「（つふー・・・なかなか美味しいな・・・っていうか、珍しく走り屋がないな・・・PAには必ず一人二人いるもんだけど・・・）」

その通り、このPAには新環状を主に攻めている奴すら、いなかっ

た。

川「（なんかそう思うと、一般車はいるのに閑散としてる感じだなあ．．．ん？あれは．．．さっきのアリスト．．．）」

先程バトルをしたアリストも同じPAにやってきた。

川「（親父のスーパーラの隣に停めたか．．．何か話する気が．．．？）」

そうやって見ていると、幸之助がやってきた。同時にアリストのドライバーが降りてくる。

川「（．．．っ！．．．あの雰囲気．．．幻想郷の奴か．．．？なかなかベテランそうだけど．．．）」

祐馬はアリストから降りてきたドライバーを見た瞬間、幻想郷の奴だという雰囲気を感じ取った。

その女は、幸之助に何か話しかけた。

川「（やっぱり何か話してるな．．．表情を見ると何か重要な話っぽいけど．．．まあ親父みてえな奴が相手だからかな．．．）」
数分間、話は続いた。

幸「おう、俺もちよいとコーヒー買わせてくれ。」

川「分かった。」

幸之助もコーヒーを飲む。

川「．．．今話してたの、さっきのアリストのドライバーだよな。」

幸「ああ．．．俺に挑戦状叩き付けて行っただぜ。」

川「挑戦状？」

幸「そうだ。八雲紫とか言う奴でな．．．」

紫「ほんとに速いわね。今まで貴方とバトルすることを忘れてなくて良かったわ。」

幸「そりやどうも。」

紫「でも、今のバトルは私にとって本番じゃないの。」

幸「どういう事だ？またバトルするの？」

紫「私は普段いろは坂を攻めてるんだけどね．．．そのいろは坂で、

第一と第二の両方を走るバトルをやってくれないかしらね？」

幸「第一と第二の両方・・・第一で下って折り返し、第二で上るっていう事か。」

紫「そうよ。」

幸「・・・まあ、今までいろは坂なんて走ったことねえけど、いいぜ。受けて立つ。」

紫「なかなか度胸があるわね、ヘアピン地獄のいろは坂を一度も走ったことが無いのに受けてくれるなんて。」

幸「そこで退いてちゃ伝説なんて呼ばれはしねえさ。」

紫「それじゃ日時は明日、23時・・・中禅寺湖で待ってるわ。」

幸「分かった。」

川「・・・おい、親父本気が・・・？」

幸「当然じゃないか。」

川「あのヘアピンが次から次へと迫るあのいろは坂だぞ？しかも一度も走ったことが無いし、あのマシンで行ったらヘアピンのガードレール一直線って事も・・・。」

いろは坂、栃木の中禅寺湖近くにある、数ある峠でもハイレベルのテクニクとハイレベルの集中力が試される峠。特に下り専用の第一のほうヘアピンがきつい。

幸「そこまで信用してないか？そこで退くわけにはいかないだろ。」

川「そりゃそうだけど・・・。」

幸「心配するな。たとえ負けるとしても事故だけは絶対にしねえ。」

川「そつ、そつか・・・。」

幸「まあそれはさておき・・・そろそろ行くか。」

川「そうだな。」

再びスープラに乗り込む二人。

川「（いろは坂・・・実際に行った事は無いけど、写真とかゲームとかで見てもすげえヘアピンだらけだもんな・・・あの峠を親父が走るのか・・・）」

幸「それじゃ、湾岸線はバトルとか考えず常にアクセル全開で行く

ぜ。いいな?」

川「おつ、OK。」

PAを出発する。

川「(有明JCT・・・ここから右に行けば湾岸線下り・・・)」
幸「・・・行くぜ。」

川「いいぜ、いつでもも行つてくれ。」

有明JCTを抜け、湾岸線下りへ進入する・・・!

川「(くうつ、やっぱすげえ加速・・・!!)」
湾岸ではそのパワーを遺憾なく発揮する。300km/hなんてもうとつくに超していた。

川「(信じられねえ、もう400km/hかよ・・・!?)」
390、391、392・・・400km/h突破はもう目の前。
そして突破した。まだまだスープラは加速し続ける。

川「(ありえねえ・・・ここまで来ても全然加速していける・・・
こんな化け物あるかあ・・・!?)」

いつの間にか410km/hを突破する。加速は未だに衰えない。

川「(ここまで加速できるつてのがマジで信じられねえ・・・遂に
420km/hかよ・・・!?)」

420km/hを突破・・・段々と加速ペースが遅くなってきては
いるが、止まる気配はない。

川「(周りの景色が正に一瞬で過ぎていく・・・こんなありえね
え・・・)」

次は430km/h・・・ブガッティが開発したモンスターマシン、
ヴェイロンの進化型、スーパースポーツが記録したスピードと同じ
である。

川「(加速が止まらねえ・・・)」
428、429・・・
川「うっ・・・」

その瞬間、妙な風を感じるようになった
周りを見る間も与えず、ただひたすら加速していくそのマシン
430km/hを過ぎて、まだ加速する
祐馬にとってそれ以上の速度は未知の世界だ
一度も到達した事がない、超速の世界・・・

幸「・・・さて、そろそろ終わりだな。」

狩場線、スープラが減速していく。

川「・・・あつ、もうここか・・・」

400km/hよりも遅くなった瞬間、祐馬は意識を取り戻した。

結果、このスープラが記録した最高速は、437km/h・・・。

川「親父・・・すげえよ、このマシン・・・こんな怪物を今まで操
つてただなんて・・・」

幸「そうか？サンキュー。こいつも相当いじつたら、いつの間にか
こんなもんになっちまってな。」

川「いつの間にかって・・・」
そしてスープラは横浜環状を疾走していった・・・。

川「親父、今日はいい体験だったぜ。400km/hよりも先の世
界にいけないさ。」

幸「お前にとって良かったなら、俺も良かったぜ。何も無しじゃし
ようがねえからな。」

川「サンキュー。」

幸「おう。」

次の日の朝

S12でどこか行こうと祐馬は考えていた。

川「（とりあえずあのシルビアに乗って、どうかサーキットでも行

つてみるかな・・・富士にでも行くか。夜は首都高も行くけど・・・
そうだ、箱根行ってみるか。」
というわけで、富士スピードウェイに行く事にした。夜は首都高を
攻めつつ箱根へ行くというプランである。
どの場所も、行く理由は特に無いが。

川「つつーわけで俺、今日は富士スピードウェイに行ってくる。」

幸「富士か・・・。アタックでもするのか？」

川「そうだ。」

幸「あのマシンの力は惜しまず使い切れよ。ベストタイムを叩きだ
せ。」

川「あのマシンなら、余裕で出せるだろ。」

幸「そうだな。」

川「そいで親父は今日はいろは坂だっけな。」

幸「ああ。絶対に勝って帰ってきて見せるぜ。」

川「頑張ってくれよ。」

幸「おう・・・それじゃ俺はシルビアのここに行ってくる。」

川「OK。」

その後、祐馬も富士へと向かう。

川「(富士だあ・・・なんか久しぶりだな・・・まっ、たまにはサ
ーキットもいいよな。)」

とりあえずアタックに参加するように申し込む祐馬。

川「(さあて、アタック開始はあと少しか・・・それまで休憩してる
か。)」

とりあえずパドックで休む祐馬。

と、そこへ・・・

川「(・・・ん・・・誰かやってきた・・・)」

「やあ、もしかして君、首都高で十三鬼将と十二覇聖を相手にして
るっていう『シルバーナイトシャイン』かい？」

川「えっ・・・はい・・・」

「やっぱりな。前、射命丸さんが見せてくれた顔写真とそっくりだったからさ。」

川「射命丸・・・？あつ！もしかして貴方・・・渡利洋！？」

「そうだよ。俺が渡利洋だ。君に会えて嬉しいね。」

渡利洋・・・スーパーGTを始め、日本のレーシング界を圧倒した、文字通り無敵の男だ。

どんなにハンデがあろうとも、それを軽々押しつけて1位に立つ程である。

シリーズ連覇だって何度も経験した。今でも彼さえいれば、絶対に上位に立つことができるとも言われている。

そんな彼は現在引退し、愛車のNSXを始め、趣味で色々車に乗ってレビュー的なものをやろうと考えていたのだが、丁度文々。新聞を見つけ、「走り屋専門なら、これが一番いいんじゃないか」ということで、ために射命丸に会ってみた。

射命丸自身コーナーを増やす気は無かったが、相手がレーシング界の伝説って事で、渡のカーレビューが連載されることになった。あまりでかかど載ってるわけではないがなかなか人気である。

渡「この前ブローしたんだって？しかも迅帝の前の奴とのバトルで。」

川「ええ、丁度よりによってね。」

渡「お気の毒だなあ。迅帝と一戦交えるまであと少しってバトルだったろうから、相当ショック大きかっただろ。」

川「そうですね。ブローした瞬間、気を失うくらいでしたから。」

渡「で、そのS12はなんだ？」

川「ただの代車です。でもエンジンはエボ9の4G63、640馬力のパワーを発揮するもんですよ。」

渡「ほーう・・・なるほどな・・・おっと、そろそろ時間か。君も走るんだろ？お互いいいタイムを出そうか。」

川「はい！」

渡はNSXに乗り込んだ。

川「まさかこんなところで会うなんてな・・・いやあ、なんか嬉しいな。」

そう思いながら、祐馬もマシンに乗り込む。

川「(さあて、それじゃ行きますかね。)」
コースイン。

川「(最初は軽めだな。本番は二周目だ。)」

他の参加者も走り出す。

川「(こいつで果たしてどのくらいいけるかな・・・)」

第一セクション、第二セクションを走り終える。

川「(おっ、渡さんのNSXだな・・・ん?・・・ほう、バトルしようぜってか・・・もちろん、受けて立ちますよ。)」

NSXがS12と並走したまま、ホームストレートへ。

川「(それじゃ・・・行きますよ・・・!)」

ラインを超えて、アクセルを全開まで踏み込む。

川「(おお、渡さんのNSXも、外見はノーマルでも中身は結構いじってるんだな・・・!)」

シルビアと直角の加速を見せるNSX。ホームストレートを終え、第一コーナーへ。

川「(いいグリップ・・・だけど、前はもらいますよ!)」
前に出るシルビア。

川「(よし・・・やっぱ、伝説のプロレーサー相手だから、すごい燃えるな。昨日の白いカリスマとかみたいに、緊張感びびりしてわけじゃないから、精神的な疲れは大して無いし。手を抜くのは禁物だけどな。)」

次のコーナー、アウト・イン・アウトで綺麗に抜けていく。

川「(・・・なっ、そこから狙うか・・・!?)」

イン側に入り込んで、オーバーテイクを狙うNSX。

川「(くっ・・・もう抜かれちゃった・・・やっぱしすげえや、渡さんは・・・!)」

NSXの前に出られた。そのまま左コーナーへ。

川「(大丈夫、張り付いていける。問題はどこで抜けるか、だな。次のBコーナーでブレーキング勝負を仕掛けてみるかな・・・)」
立ち上がって一気に加速。第3セクションへと入る。

そして右コーナー、NSXの横に並び、ブレーキング勝負。

川「(イン側だから後は・・・よし!)」

NSXの前に出て、右コーナーを抜けていくシルビア。

川「(このセクション、守りきれるかどうか・・・)」

いくつかのコーナーは軽くケツを振って抜けていく。NSXも同様。

川「(最終コーナー、ここを抜けたら長い長いホームストレートだ・・・!!)」

最終コーナーをベストラインで抜ける。

川「(いけええええ・・・!!)」

アクセル全開で、世界でも有数の長いホームストレートを疾走する。

川「(・・・なっ、スリップで追いつけてくるか・・・!?)」

NSXがスリップストリームで加速力を上げてきた。これでは並べ
れる。

川「(ゴールまでに抜かせはしないぜ・・・!!)」

・・・そして、ラインを通り過ぎた。

川「(1周目終了・・・あれっ?渡さん、終わり?)」

NSXは一度減速した。

川「(バトルは終わりだぜってことか・・・?・・・まあでも、なかなかいいバトルでしたよ、渡さん。)」

その後、10周ほどアタックを繰り返した祐馬だった。

渡「いやあ、やっぱり首都高仕込みは速いな。一回抜いたのにブレーキング勝負で負けちゃうなんてね。」

川「いやいや、貴方のその凄腕テクも素晴らしいですよ。」

渡「有り難う。それじゃ俺はもう帰るから。復活してからのバトル、期待してるよ。」

川「有り難うございます！（それじゃ、俺も帰るかな。）」
二人とも、富士スピードウェイを後にした。
川「（なかなか良かったな・・渡さんにも会えたし、来た甲斐があったぜ。それじゃ、夜は箱根に行きますかね。）」

夜、22:31

川「（・・もう親父はあつちに着いてるのかな・・今日は箱根も地元の走り屋が集まってるか。）」

箱根のヒルクライムスタート地点に着いた。そこからダウンヒルスタートの場所へ上がっていく。

川「（ギャラリーもいるんだな・・首都高と違って、バトルをこういう感じで見れるメリットがあるもんな。）」
と、その時。

川「（こんな時に電話・・ほう、霊夢か・・。）」
ピッ

川「もしもし？」

博「祐馬？今日いろは坂であんたの親父さんと紫がバトルするって聞いたけど、本当なの？」

川「えっ？紫？・・ああ・・。」

幸「八雲紫とか言う奴でな・・。」

川「らしいな。あの紫っていう奴、見た感じ幻想郷の奴みたいだったが、それで電話したのか？」

博「いやまあ、紫は幻想郷でもかなり知られている妖怪よ。前にも話したでしょ、幻想郷で最初に外の世界で攻め始めた奴だって。」

川「ああ・・・そういえばそうだったな・・。」

博「いろは坂でのテクも相当なものみたいね。親父さんが勝てるかしらね・・。」

川「分からないな・・けど親父は自信満々だったけどな。」

博「そう・・まっ、それじゃそろそろきるわ。早くシルビアが復活

するといいわね。」

川「ああ。」
ピッ

川「（親父・・・そんなすげえ奴を相手にするってのか・・・!?）」
スターター「ん？・・・ちよつと待て、今下からマシンがやってくるぞ。」

メ「え〜？早くレース始めようよ。」

ル「あまりわめかないの、メルラン。子供みたいよ。」
相手ドライバー「こういうときにマシンがやってくるのは久しぶりだな・・・」

スタートするために並んでいたのは、メルランのアルテツァともう一台、「FRベンチマーク」と呼ばれるZ33フェアレディZ、手島輝常だった。

川「（着いた着いた・・・）」

ル「・・・S12シルビア・・・」

魂「あれは・・・川内祐馬・・・？」

リ「あれ〜？何か用があるのかな？」

シルビアを止める。

川「よう、数日ぶりだな。」

魂「あら、シルビアがブローしたっていうのは本当なのね。それは代わり？」

川「そうだ。代車は代車でも、カリカリにチューンしてあるみたいだぜ。」

魂「へえ〜。」

その瞬間、メルランと手島のバトルが始まった。

川「そういえば、今日は幽々子は来ていないのか？」
ル「幽々子様はいるは坂に・・・。」

魂「貴方の親父さんのバトルの傍観者として行ってるのよ。」

川「何っ……」

リ「いろは坂ってヘアピンばかりだよ〜。ここの近くの七曲み
たい！」

魂「……実を言っちゃなんだけど、紫様は貴方とバトルした頃から、あのスープラが帰ってくると思ってた。更に貴方がその息子だと分かっていたのよ。」

川「……そうだったのか……?」

魂「ええ。それも含めて、貴方に挑んだのよ。」

川「なるほど……俺の実力があの伝説のスープラの息子と言えるものなのか試したってわけね……。」

魂「それで本当にスープラがやってきて、紫様は遂にいるは坂でのバトルを果たすって感じよ。」

川「何で親父を追ってたんだよ?」

魂「紫様が相当速くなって、首都高の速い奴をいろは坂におびき寄せようかって時に『首都高を統べる覇者』を呼ぼうとしたんだけど、丁度いなくなっただっていうから、そいつだけ戦えなかったのよ。別に追ってたってわけじゃないらしいんだけど、戦いたかったから今回挑んだんですって。」

川「へえ……」

ル「そろそろ中禅寺湖に集まってますね……。」

川「おっ、そうだな。23時だからあと少しだ。」

その頃、中禅寺湖前……

幸「(あそこに溜まってる奴らか……なんか妙な格好してるな……)」

紫は確かにいる。幽々子もいる。その後ろには、猫の耳と尾を生やした女の子と、狐の耳と尾を生やした女。

橙と八雲藍、紫の式神である。

その近くには、幽々子のチェイサー、藍のMR2、橙のMR-S、

そして紫のアリストが停まっていた。

幸「よう、対戦相手のご登場だぜ。」

紫「待ってたわよ。それじゃ早速、始めましょう。」

幸「ああ。」

橙「紫様、気合入ってるな。」

藍「そりゃあ、昔戦おうとして戦えなかった相手だもの。」

西「紫、頑張ってるね。」

紫「ええ。」

今回のバトルは予定通り、第一を下った後に折り返して第二に入り、上というルートである。スターターは藍が務める。

紫「（やっとここでバトルできて嬉しいわよ・・・首都高では負けたけど、腕試しはここからよ。私にとつてのホームコース、貴方にとつての初見コースで、どちらが勝つかしら・・・？）」

幸「（第二いろはさつき上るときに軽く見たけど・・・それよりも問題なのは第一なんだよな。さあて、どうなるかねえ・・・）」

藍「それでは、行きます！5、4、3、2、1、スタート！！」

二台とも軽くホイールスピンしながら発進する。

いろは坂フルコースの決戦が始まった。

幸「（無難に前に出させてもらっぜ。）」

紫「（やはり加速は速いわね・・・）」

前に出るスープラ。アリストが後を追う。

幸「（最初のヘアピン・・・色々写真とか見たとおりきついな・・・もうブレーキしたほうがいいな。）」

最初のヘアピン、250km/hから減速して大きくケツを振って抜けていく。

アリストもVIPセダンながら、このきついヘアピンをドリフトで抜けていく。

幸「（あんなのに乗っててドリフトで抜けられるのか・・・まあこ

「うちもでかくないとは言切れないけど……いいテクだ……」
紫「（初めてにしては綺麗に抜けたわね……けれど、まだ甘いわ。）」

次のヘアピンはもう目の前だ。右コーナーを抜け、そのままの勢いで逆方向に振り直し、抜けていく。

紫「（いける……!）」

コーナーを抜けてからの立ち上がり加速でスープラを抜こうとするアリスト。

幸「ちっ……（いや、残念だったな。）」

舌打ちはしたが、少し並ばれそうになっただけで、抜かれはしなかった。

紫「（もう少しあっちのコーナリングスピードが遅ければ抜けたかしらね……）」

幸「（ここはさつきから右、左って続いているけど、ヘアピンはまだか……?）」

しばらく低速コーナーが続く。

幸「（……見えた。）」

紫「（ここから本格的にヘアピンが続くわよ。どこまで集中できるかしら……?）」

西「私のタイムで行けば、そろそろ直線、ヘアピンっていうパターンが続く部分に入るわね。」

藍「そうですね。あそこからスープラがミスをせずにいけるのか……

・ミスをすれば、紫様が勝つでしょう。」

橙「そもそもミスったら事故起こしちゃうでしょ。でも伝説ともなればそんな事ないだろうけど。」

西「どうなるかしらね……それじゃ私達はゴールのところへ行きましょうか。」

川「もういろは坂でのバトルは始まっているかな……」

ル「時間通りならもう開始してるわ。」
川「・・・アリストとスープラでいるは坂か・・・紫って奴もよくアリストでいるは坂攻められるな。」
魂「紫様だけじゃないわ。『グローバルウイナー』っていう侍も、アウデイのRS4に乗ってるけど相当速いわ。」
川「へえ・・・そこまででかいセダンで第一のヘアピンとか、きついいにも程があると思うけどな・・・。」

紫「(全然乱れない・・・むしろヘアピンを抜ける度に上手くなっている・・・!!・・・そう来るとはね・・・)」
幸「(思ったよりすんなり抜けられるもんだな・・・これなら普通にいけるんじゃないか?)」
ヘアピンをほぼ完全に攻略した幸之助。段々といつものペースを出していく。

紫「(けれどももうすぐ、間に直線も入らないくらいのヘアピン連続地帯・・・そこでどれだけスピードを維持できるかしら・・・)」
既に第一を半分終えた。

幸「(・・・うおっ、こっから見ると分かる・・・全然ストレートがねえ・・・)」
文字通り、ヘアピンが連続するだけの部分へと入っていく。

幸「(こりゃ、100km/h以下でも維持するのに一苦労か・・・)」
「
と言いながらも、ほぼ完璧なアクセルワークで、4つのヘアピンをクリアする。

紫はもう完璧だが、抜けなかった。

紫「(いいわね・・・ペースを乱さずにここ一帯のヘアピンを駆け抜けて見せた・・・)」

左ヘアピンを抜け、最後のヘアピン連続地帯が迫る。

幸「(ふう・・・腕も足も相当疲れんなこりゃ・・・)」
「
そう思いながら、2連続のヘアピンを抜ける。

紫「（このヘアピンが終われば後は高速区間だけ・・・そこから折り返して第二よ・・・）」

ほぼ90度のコーナーを抜けて、その先の右ヘアピンへ。

幸「（・・・もう完璧だな・・・）」

紫「（速い・・・遂に私にそこまで思わせるほどのコーナリングを見せるなんて・・・）」

4つのヘアピンを全て走り終えた。後はどこまで加速していけるか、である。

幸「（橋が続いてるな・・・おっ、ここすげえストレート・・・）」
思い切つて300km/hまで出そうとしてみる幸之助。

紫「（ここで離されるわけには・・・!）」

幸「（おっと・・・あそこつて確か折り返し地点だっけね・・・準備しねえと。）」

第一いろは坂が終わり、第二が始まるうとしている。

幸「（・・・ここで・・・っ・・・）」

紫「（第二の始まりよ・・・!）」

急激に減速してブレーキングドリフト。綺麗な弧を描くラインでドリフトするスープラ。

紫「（あそこまで綺麗なラインは見事ね・・・）」

幸「（さて、こつからは第一より思いつきり攻められるだろ。）」

最初の大回りの左コーナーを抜けて少し長いストレート。最初のヘアピンは少し先だ。

幸「（またアクセル全開でいけるな・・・いや、そうでもなかったな。もうヘアピンはすぐそこか。）」

紫「（まずは最初のヘアピン・・・くっ、インが開かない・・・!）」
再び綺麗なラインでドリフトする二台。

幸「（第一のよりは緩いからな、120km/hくらいで綺麗にドリフト出来る。）」

紫「（あそこまで見事なドリフトを連発・・・これじゃなかなか抜けない・・・）」

次のヘアピンを抜け、再び高速区間。

幸「(アクセル全開っつ。)」

紫「(置いてかれはしないわよ。)」
スピードを出せる限りまで出していく。

ただ加速が速いマシンとなると、どんなに長いストレートでも、すぐに次のコーナーが迫ってしまうものだ。

幸「(さあ、ヘアピンっど。)」

アフターファイアをぼうつと吹き、軽く滑らせていく。

紫「(ベストラインで来るとは。)」

そこから再びアクセル全開で行き、次のヘアピンを抜ける。そうすると、また高速区間だ。

紫「(次のヘアピンが始まったら。本格的なヘアピン連続地帯よ。そこでなんとしてでも抜ければいいけど。)」

幸「(次から随分ヘアピンが続いたっけな、さっき走ってたとき。)」

連続地帯最初のヘアピンへと進入する。

幸「(。よし。ここまではいいペースだ。)」

紫「(どのヘアピンの走行ラインも、全て熟知しているかのように走り抜けていく。凄すぎるわ。)」

一つ、二つ、三つ。ストレートをはさみながらも、ヘアピンは次々と襲い掛かってくる。

そこで一回も、ミスることが無かった両者である。

幸「(そろそろ終わりだな。)」

紫「(これでいろは坂のきついヘアピンは殆ど終わった。ここからどこかチャンスが出来ないかしら。)」

連続地帯も過ぎた。後はいくつかの低速コーナーのみ。とはいえヘアピンはまだ残っている。

幸「(。っほう。いい感じだ。)」

紫「(抜けない。)」

いくつものコーナーを抜け・・・間も無く明智平、第二いろは坂のゴールが見えてきた。

前にいるのはスーブラ、後ろにいるのはアリスト。一度もオーバーテイクが無かったが、接近戦であったのは確かだ。

幸「よし・・・勝利。つふう、疲れた疲れた・・・」

紫「(負けた・・・わね・・・)」

こうして、首都高の伝説と幻想郷の偉大なる妖怪の一戦は、幕を閉じたのであった。

幸之助の勝利で、である。

西「・・・来たわ・・・スーブラが前ね・・・」

藍「敵いませんでしたか・・・」

橙「あゝあ、紫様負けちゃったかあ。」

二人が降りてくる。

紫「流石は首都高で伝説と呼ばれた男・・・腕が衰えていないのかしらね。」

幸「そうなんだろうな。」

紫「今日は楽しかったわ、挑戦を受けてくれて有り難う。」

幸「おう。それじゃ。」

スーブラに乗り込む。

紫「・・・ああ、それと、まだ話があるわ。」

幸「あん？どうした？」

紫「貴方は、『ランドゼロ』って走り屋に興味あるかしら？」

幸「ランドゼロ？・・・聞いたことねえな。」

紫「そう・・・峠を攻めるのには興味あるかしら？」

幸「いや、そこまで無い。」

紫「そう・・・分かったわ。」

幸「おう、じゃあな。」

幸之助はいろは坂を後にした。・・・とはいえ、まだ下るけど。

橙「あのランドゼロについて聞いたの？」

紫「そうよ。」

西「グランドゼロ・・・一度会ったのに、あのときバトルが出来なかったなんてね・・・」

紫「いつかは現れるかもしれないわよ、きつと。」

藍「まあそれよりも、あのスープラの走りはどうだったんですか？」

紫「攻めるのが初めてとは思えないくらいラインが完璧、スピードも凄いですピードだったわ。なんとかついていけたけど、抜くことは一切出来なかった。」

橙「へえ・・・やっぱり強いんだね。」

紫「ええ・・・」

西「さあて、それじゃ私はそろそろ帰るわね。それじゃ。」

紫「じゃあね。」

川「・・・ん・・・なんか親父が勝ったような気がした。」

魂「えつ、本当？」

川「ああ。テレパシーでもねえのに、なんか今そんなの感じたな・・・」

ル「何かの能力、ではないわね・・・。」

リ「なんかそれが能力なら凄いね。」

川「なんなんだろうな・・・ああ、すっかり忘れてた。ここ来たのにちつとも攻めないんじゃないや意味ないや。」

ル「今思い出すのね・・・。」

魂「まあ確かにそうね。わざわざ親父さんのこと考えるために来たんじゃない意味ないし。」

川「だよな。」

そんなわけで、相手を探して見事勝利を収めましたとき。

・・・因みに、メルランも普通に勝つたらしい。

その後、自宅にて

川「（・・・流石にまだ帰ってきちゃいねえか・・・）」

とりあえずもう遅かったので、幸之助が帰ってくる前に、寝た。

朝・・・

川「そうか、勝ったのか・・・良かったな。」

幸「ああ。ただ最後になんか、『グランドゼロ』っつー走り屋がなんだかんと言ってたけどな・・・」

川「グランドゼロ？峠の走り屋か？」

幸「まあそうだろ・・・さて、そろそろ俺は行くぜ。」

川「おう。行ってらっしゃいな。」

幸之助はシルビアのところへ行った。

夜・・・

川「（あれ・・・まだ帰ってきてないか・・・）」

代車なので普通に攻めただけの祐馬、帰ってきてても幸之助がいない。

川「（何かあったのか？・・・まあいいや・・・）」

とりあえず、今日も幸之助の帰りを待たず就寝。

川「うう・・・おう、おはよう親父。昨日は随分遅かったみたいだな。」

幸「そりゃそうだ。わざわざ本気出せば一日で復活するのに二日かけるわけにはいかないだろ。」

川「・・・へっ？」

幸「車庫行ってみい。」

川「マジか・・・!？」

復活、最終決戦（前書き）

遂に最終章、完全にクライマックスへ向かいます。

復活、最終決戦

車庫に行く・・・そこには、かつての輝きを取り戻した我が愛車、S15シルビアが停められていた。

幸「もう車庫に入らないからS12は強制送還しといた。とりあえず、愛車が戻ってきたんだからいいだろ。」

川「さっ、サンキュー、親父!!」

幸「おう・・・ただ、直したただけだと思うなよ。エンジン見てみる。」

川「エンジン？前よりもパワーでるとかそういうことだろ？」

幸「ビンゴ、そういうことだ。」

試しにボンネットを開ける。

川「っ!?!?・・・」

・・・そのエンジンからは何か異様なオーラを出していた。

それを感じた祐馬は黙り込む。

幸「そいつぁ1003馬力を発するエンジンだ。一応車重も軽くなってるぜ、1000kgを切らせといた。400km/hは当然のこと、420km/h辺りまで出せるギアにしといたぜ。」

川「マジか・・・よ・・・」

幸「・・・そうでもしねえと、まともに対抗できないだろうからな。ただ楽に勝てるマシンではない。勝つのは腕があつてこそだ。お前なら大丈夫だろう。」

まだ何か、そのエンジンに圧倒されていた祐馬。

幸「夜になったら試しに攻めてみる、それでどれだけ進化したか分かるぜ。」

川「あっ・・・ああ・・・」

ボンネットを閉める。

厚「うおおっ・・・確かにこりゃあ・・・何か変な雰囲気を感じるな・

川「だろ．．なんか不思議なんだよな．．親父、一体どんなもん積んだって言うんだか．．」

石「いくらなんでも、エンジンでここまで恐ろしくなるのは初めてたぜ．．なんじゃこりゃ．．」

整備場で二人にエンジンを見せてみると、祐馬と同じ症状を見せた石「とりあえず今夜は試し乗りか．．いいマシンかどうか、そして自分に扱えるか、頑張ってくれよ。」

川「はい。」

博「へえ、復活したのね。良かったじゃない。」

川「ああ。けど、親父の載せたエンジンが妙でな．．」

博「妙．．？」

そんな感じで霊夢にもそのエンジンについて話したのである。

22:03．．

川「（それじゃ、試しと行きますか．．本気で攻めるとどんな感じなのか．．）」

エンジンをかけると、前のシルビアのエンジンよりも強烈な唸り声が鳴り響く。

川「（この音聞いただけでも凄そうだけだな．．さあ、行くぜ。）

「
首都高へと向かった。

最初は新環状右回りを攻めてみることにする。

川「（新環状ならコーナリングもスピードも試せるはず．．途中には湾岸だつて挟むしな．．よし、行くぜ．．うおっ!?)」

江戸橋JCTを過ぎてスタートし、アクセルを微調整して入ったが少々ケツを振ってしまった。

川「（こりゃあ、いかにも暴れ馬って感じだな．．ただ、いつも

ならそういうマシンだと内心わくわくするのに、それどころか悪寒がするこの感じは一体何だか・・・」
やはりこのマシンには何か恐ろしいものを感じる。ただ・・・扱いきれないだろう、なんてことはちっとも思っていなかった。単純に恐ろしい、らしい。

川「これでいけるか・・・うおお・・・!? 軽くなってるのがよく分かる、すげえハンドリング感覚だ・・・!」
いつも通りハンドルを切ると一気に曲がっていく。
そして、そこからの加速で更に驚愕した。

川「(なっ・・・!?)」
アクセルワークを上手くやれば、立ち上がり加速で200km/h行くのには一瞬といえるほどの加速力だった。

川「(これはすげえ・・・なんつーマシンだよ・・・!!)」
その性能に驚きながらも、素晴らしいハンドリングさばきで数々のコーナーを抜けていく。

川「(ここまですげえマシンを自らの手で動かすことになるとはな・・・本当にこれなら、白いカリスマにも十分対抗できる・・・!)」
祐馬はそう確信した。湾岸線まで行かなくても十分分かる、これですななくとも加速負けすることは無かるう。

川「(よし、大分乗りこなせてきたぜ・・・!)」

幸「お帰り」。

川「ただいま。今日はいつもより早かったな。」

幸「ああ。お前がああのシルビアに乗ってどんな感じか、早めに聞いたいたほうがいいだろうからな。で、どうだった?」

川「文句無しだ。すげえ速いよ、親父。」
幸「そうか、良かった。これで走り屋としてのお前が完全復活、だな。」

川「ああ。」

そうと分かったら、やるべき事は一つである。

川「それじゃ、明日……つつつても果たして出てきてくれるかな・
」
幸「白いカリスマか。もしかしたらお前のために待っていてくれたか
もしれねえし、チャンスは一回きりって事だったかもしれないし。」
川「どうだかな……でも、出てきてくれると信じてれば出てくる
かもしれない。そう願ってるよ。」
幸「だな。じゃねえと、その迅帝だかと戦えないもんな。」
川「ああ。」

次の日、23:38

川「(さあ出て来い、白いカリスマ……！俺を待っていてくれてたんな
ら、とつとバトルを始めようぜ……?)」
この前とは違って木場から新環状右回りへ進入。
もうあの相手に湾岸線を恐れる必要はない。少なくとも離されると
は考えにくいのだから。
と、その時。

川「(……おっ……来た……!!)」
後ろからパッシングをされる。パッシングをしてきたのは、この前
バトルした、あの白いFD……
白いカリスマ、再び現る。

川「(今日はブローなんかさせないぜ、絶対に勝って終わらせる・
!)」
バトルが、スタートした。

川「(加速は互角か……もうここまで加速してるぜ……!)」
辰巳までの高速区間が続く。二台は既に300km/hを超す。

川「(コーナリングはどうだ……!?)」
辰巳JCTにあつという間に到着、湾岸線下りへの右コーナーへ。
綺麗にブレーキングドリフトでいく。

川「(おおう、コーナリングはこっちが上のような……でも、
ここからしばらくコーナリングは無いぜ。湾岸線だ……!)」

まずは加速勝負・・・みるみる加速して行く二台。有明JCTを過ぎる頃には、もう400km/h付近までいつていた。

川「(まだいける・・・)」
400km/hを超えてもなお加速し続ける。

川「(410・・・親父の言うとおりならあと10km/hはいける・・・)」

・・・そして、420km/hに達した。

川「(423km/h・・・ここでストップか・・・くっ、あつちがちよつと上か・・・!)」

あちらは425km/hでストップした。

東京港トンネルへ入る。

川「(あいつには最高速だと敵わないか・・・だけど、そのほうが面白いかもな・・・!)」

あつという間にトンネルを抜けた後、一番イン側の車線を走って左コーナーを・・・

川「(ちよっ・・・!?)」

隣の車線にいたトラックが突然こっちの車線にやってきた。更にイン側の、羽田線のほうへ行ってしまう。

川「(くそっ、湾岸線は終わりかよ・・・!!)」

FDも普通についてきた。きつい右コーナーを抜けていく。

川「(こうなったら、C1あたりでケリをつけるか・・・?とにかく、勝てなきゃしょうがねえ・・・!)」

大井JCTを走り、横羽線上りへと入った。

川「(さあ、どこまでついてくれる・・・!?)」
再び猛烈な加速を見せる二台。

次の左コーナーを軽く滑らせて抜ける。大体200km/hほどである。

川「(よし、ここは上手くいけた・・・離れてるぜ・・・)」
FDがコーナリングで負け、少しづつ離されていく。

川「(そろそろJCTか・・・ここは内回り行きますか・・・)」

300km/hオーバーで疾走し、浜崎橋JCTを抜ける。

川「(まだついてくるか・・・S字いくぜ・・・!)」
S字をドリフトしながら抜けていく。

川「(いい感じだ・・・もう止められねえぜ・・・)」
白いカリスマも、いいラインで抜けていく。

川「(さあどうだ、まだ来るか・・・?)」
トンネルのS字を抜けてアクセル全開。

・・・その瞬間、バトルの終わりは告げられた。
川「(うおっ・・・)」

・・・FD、スローダウン。
川「(・・・勝った・・・)」

さっきまで勝つかどうか考えながら本気攻めだった祐馬だが、勝利すると何か吹っ切れた感じになった。

ともかく・・・白いカリスマに勝利したのである。
川「(なんなんだ・・・この感じ・・・)」

ひとまず、家に帰る。

川「ただいま・・・」

幸「お帰り・・・その顔は、勝つて来たのか。それとも逆か？」
川「いや・・・勝ってきた・・・。けど、なんか勝った瞬間に体全

体の力が一気に抜けた気がしてな・・・。俺、さっさとシャワー浴びて寝るわ・・・。」

幸「そうか・・・。でも、次はお前の本命、更にきついであろう相手が待ってるってことを忘れるな。」

川「おっ・・・おう・・・」

こうして白いカリスマに勝利した。

十三鬼将、十二覇聖・・・計25人中24人を撃破・・・。
凄腕達をこれほど倒したのだから相当なものだろう。

そして最後の一人・・・迅帝。

一度バトルを挑まれ初敗戦を喫した祐馬は、再びあのR34と対峙することとなった。。。

朝・・・

川「つああ・・・ふう・・・（・・・力は取り戻したな・・・。）」
一眠りして、いつもの自分を取り戻した祐馬。

とりあえずまずは知人達に白いカリスマに勝ったことと、次に迅帝と相手をすることを報告する。

どの電話相手も、そして迅帝に挑む祐馬を称え、応援をかけた。再びあの男と時を共にするのだ。

川「（さあて、親父は・・・いたいた。）おはよう、親父。」
幸「おはよう、正気に戻ったか。」

川「ああ。もう大丈夫だぜ。」
幸「そうか。今夜出てくれば迅帝戦、だよな。」

川「そうだぜ。俺が今まで、追い続けてきた男だ。」
幸「俺は耳でしか聞いてねえけどな・・・馬鹿っ速い奴だったのは聞いている。相当の強敵だと思え。」

川「分かっているさ。首都高の伝説が、強敵じゃないわけ無いだろ。」
幸「まあ、そうだな。何はともあれ・・・絶対に気を抜くんじゃねえぞ。シルビアのパワーをフル活用していけ。」

川「OK!」
そして、忘れられない夜が近づいてくる・・・。

23:40・・・

川「行くか・・・（待ってるよ・・・迅帝・・・!）」
首都高へと進入する・・・。

川「（果たして今日が俺にとって一番熱い日になるか否か・・・。）
暫く走り続ける。もう迅帝を探す以外やることは無い。

川「（おっ・・・）」
後ろからパッシングされる。

・・・その瞬間、祐馬には何か感じた。

川「（体で感じてしまう程のオーラか・・・それに、そのGT的なR34・・・間違いなく奴だ・・・!!）」

その青いボディと外装が、かつての全日本GT選手権で走っていた、日本一速い男、星野一義も操ったR34カルソニックを髣髴とさせる。側面には「壱撃離脱」の文字・・・

迅帝が、現れた。

川「（ふう、すげえ緊張してきたあ・・・さあ、バトルに集中しろ・・・!!!!）」

現在新環状右回り、木場を過ぎたところ。伝説との二度目の一騎打ちが始まる・・・!!

川「（・・・前のシルビアだったらここでとっくに抜かされてたかもな・・・だが今はいける・・・!!）」

迅帝は直ぐ後ろ・・・それ以外に、すぐに額から汗をかくほどのプレッシャーは無いだろう。

川「（・・・抜かせるものか・・・引き離す・・・!!!!）」

そのまま2台は一気に加速、あつという間に300km/hへ。そこからフルブレーキングでJCへ。

川「（GT-Rにしてはうめえドリフトだ・・・!!）」

二台共にドリフトでコーナーを曲がる。

・・・そして、聖地湾岸線へと進入する。

川「（・・・負けるわけにはいかねえ・・・少なくとも湾岸ではな・・・!!!!）」

R34が徐々にプレッシャーを与えてくる。300km/hはとうの昔に出ている、間も無く400km/hに迫る勢いで二台はトンネルへ。

川「(・・・くっ・・・・・・・・!!・・・・)」

R34が横に並び・・・そのままパスされる。

シルビアは即座にスリップにつき、R34に食らいつく。

川「(お前に二度も負けるわけにはいかねえぜ・・・・!!!!!!)」

・・・二台は限界まで速度を上げ続ける。二台とも400km/hには達し、更に420km/hに達しようとしていた。

川「(・・・・!)」

R34の加速が止まる。しかしシルビアは・・・

川「(迅帝よりも加速していけるのか、こいつ・・・!?)」
スリップの効果で未だ加速。抜ける。

川「(ならば、行ける!!!)」

ゆっくりと左へ寄せる。一般車はいない、チャンスだ。

だが・・・

川「(予測どおり・・・抜けないこと承知だからな。)」

R34はブロック。しかし、R34はハンドルを一気に切ったので、速度はシルビアよりも下。更なるチャンスだ。

そこからゆっくり右に寄せ・・・

川「(・・・・並んだ・・・・抜いたっ!)」

シルビアはR34をオーバーテイク。

川「(さあ、後は湾岸線を通つ走る。前を守れるか・・・?)」
とはいえ、今度は迅帝がスリップにつく。

そうしていつの間にか、湾岸線も終わりを迎えようとしていた。大黒ふ頭を過ぎ、横浜環状の部分にいる。

川「(・・・・くっ、並びやがった・・・・!!)」

しかし、狩場線進入後のコーナーが迫る。

シルビアは体制を整える。

川「(・・・・よし、勝った。)」

ブレーキング勝負で勝った。二台は狩場線へ突入。

川「(なかなかいいグリップ走行じゃねえか・・・・)」

きっちり張り付いたままR34はコーナリング。シルビアもここは

グリップで攻める。

そして分岐からトンネルへ。

川「(このまま横浜環状は守りきれるかな・・・油断は出来ないけどな。)」

トンネル内も順調に進む。後ろを抑えながら完璧なコーナリングを見せる。

川「(トンネルは抜けた。もうすぐ横羽か・・・まだバトルは終わりそうに無いってか・・・)」

このまま300km/h近くまで加速していく。緩いコーナーなども、ミス無く抜けていく二台。

川「(横浜は守りきった。次は横羽だ。)」
湾岸からの合流を過ぎ、横羽へと進入。

川「(・・・後ろに迫る・・・)」
R34の眩しいライトが常にバックミラーに映る。嫌々しいくらいに強烈に見える。

川「(・・・)」
殆ど展開は無い。互いに加速できるまで加速し、完璧にコーナーを抜ける。

ただ、祐馬は額から汗をかいている。接戦なんてレベルじゃないかもしれない。

川「(・・・くっ、こんなとこできたか・・・!)」

微妙にアンダーを出すシルビア。祐馬はとっさにハンドルを動かし、体勢を立て直す。立て直した頃、GT-Rは横に並ぶ寸前だった。

川「(・・・運が悪いぜ。)」
既に二台は羽田。次に迫るはトンネル前の左コーナー、シルビアはアウト、R34はイン。アウトには一般車がいる。祐馬は即座にブレーキを踏む。

そのままブレーキングドリフト、R34には抜かれるが、一般車をギリギリパスし、何とか後ろにつく。

川「(ちくしょう・・・油断はするなとあれほど言ったのに・・・)

・！！だけど、まだ離れちゃいない。また抜かすチャンスは必ず・
・出来るはず・・・！！）」
トンネルを抜ける二台・・・
十「・・・はっ・・・！！（今反対にいたのは迅帝・・・後ろにいたのはS15、川内祐馬！？）」
レ「どうしたの、咲夜？」
十「いや、何でも・・・」
レ「・・・今反対を通ってた二台のこと？」
十「まあ、そうですね・・・」
レ「後ろにいたのはあの祐馬でしょ。多分、勝つわよ。」
十「えっ・・・」
レ「さつき通り過ぎたのはいたのは何か伝説の人かしら。だから咲夜は驚いたんじゃないかってね。」
十「えっ、ええ・・・」
レ「まあその伝説相手でも、私には川内祐馬が勝つ。そう見えたとわ。」
十「そっ、そうですね・・・（確かにあの二台の差はかなりギリギリだった。けど、祐馬さんが勝つ・・・どうなのかしら・・・）」
・
首都高の3/4近くを終える。まだバトルは終わりそうに無い・・・
川「（こっからC1までの加速・・・外回りだったら一気に減速・・・いや、内回りでも十分減速しねえと痛い目喰らうか・・・とにかくついていかねえと・・・！！）」
一気にC1へとめがけて猛加速。400km/h近くをマークした。
川「（フルブレーキングっ・・・！！）」
その瞬間、GTRがふらついた。速度もあちらのほうが遅い。
・・アウト側から狙える。
川「（いつけえええっ！！！！）」
迅帝をぶち抜いた。
川「（よし、また抜けたぜ・・・さあ、もう抜かせはしない！！）」

「次に来るS字も難なくクリア。ただ精神的に疲れが見えてきたか、いつもより少々コーナーリングスピードは落ちていた。それは迅帝も同じである。」

川「(トンネルはどうだ・・・!?)」
一般車もいるため200km/h弱まで減速、トンネルのコーナーへ。

・・・ここに来て、R34のペースが大分落ちてきた。

川「(次のコーナー・・・!)」
軽くドリフトしつつ抜ける。

川「(もうすぐ分離帯・・・まだ来るか・・・!)」

分離帯の前の左コーナー・・・

川「(・・・っ!)」

コーナーへ進入したその瞬間、R34はフルブレーキングした・・・
川「・・・何い・・・」

この瞬間、首都高の歴史に新たなる伝説が刻まれた
フルブレーキングが意味するもの、それは一つのみ

降参

『シルバーナイトシャイン』が『迅帝』撃破・・・
誰もが認める首都高最速の座へとついた・・・
かつての2度の敗戦の時よりも進化した『迅帝』を打ち落とすそのS15は、もうその座を譲る事などないかもしれない・・・

川「(はっ・・・ああ、無意識にここまで運転してたか・・・)」
携帯の着メロが流れた瞬間、ふっと意識を取り戻した。

迅帝に勝利したその瞬間から、“信じられない”、“勝ってしまった”

た”という思いで頭があふれかえっていた。無意識に向かっていたのは、自宅だった。

川「ほんとに勝つちまつたんだよな・・・って、電話に出ねえと」

電話に出る。

川「(霊夢・・・?)もしもし?」

博「ああ、祐馬?さっき咲夜から聞いたんだけど・・・迅帝とバトルしてたって本当?してたとしたら流石にもう終わってると思って電話したんだけど。」

川「咲夜が?」

博「ええ。咲夜が私に電話かけてきてたんだけど・・・反対車線であんたと迅帝がバトルしてるのを横羽で見たって。」

川「なるほど・・・確かに俺はバトルしてたぜ。」

博「ほんとに・・・?遂に迅帝と再戦を果たせたってわけね。で、結果はどうだったのよ?」

川「・・・勝ったぜ。」

博「やっぱりね。今のあなたなら負けるとは思わなかったもの。これで次の文々。トップ記事は間違いなし、首都高中が大騒ぎね。」

川「そうだろうな。」

博「まあ、今は勝利の余韻に浸ってね。それじゃ。」
ピッ

川「(勝ったのか・・・って、さっきから何度同じことを思い続けているんだか・・・)」
マシンを停める。

川「ただいま・・・」

幸「お帰り・・・さあ、結果を聞かせてもらおうか。」

川「勝った。木場から湾岸、横浜、横羽で銀座近くで終わった。ほぼ首都高一周だから精神的に来るぜ。」

幸「流石、だな。まあ、負けるとは思わなかったけどよ。おめでと

さん。これで名実共に首都高最速か・・・。」

川「ああ。ここまで登りつめられて嬉しいぜ。」

幸「明日からは・・・少し違った感じで首都高を攻めることになるな。首都高最速である事の自覚を持ってよ。」

川「分かっているさ。最速らしいありえねえ走りをバンバン見せつけてやるぜ。そして、バトルでは油断はしない。基本だけだな。」

幸「まあな・・・。」

ピンポン

玄関のチャイムが鳴る。

幸「なんだなんだ、迅帝に勝ったっていう夜に、誰がこの家に用作るんだか・・・俺が出る。」

川「分かった。（俺が・・・最速になっちまったんだよな・・・）」
幸之助は玄関に出る。

幸「・・・ほ・・・そうか・・・祐馬、来い。」

川「あ？どうした？」

幸之助に呼ばれ、玄関に行く祐馬。

幸「お前に用だとよ。」

川「ん・・・なっ・・・!？」

そこにいたのは・・・

「よう。別にストーカーしてたわけじゃないんだが、なんだかここに引つ張られるような感じがしてな。そしたら、さっき俺を負かしやがったS15が目に入ったもんで。」

川「お前っ・・・迅帝・・・!？」

そこに停まっている青いR34を見ても分かるとおりだ。『迅帝』
こと岩崎基矢である。

岩「どうした、せっかく俺を負かしたっていうのにそんな唾然とした顔しないでくれよ。お前はもう、首都高最速なんだぜ。」

川「あっ、ああ・・・（こいつが・・・）」

岩「おめでとさん。まさか、一回目に戦ったときよりもあそこまで戦闘力を上げているとは思わなかったぜ。S15ってのに、とんだ

化けもんだな。お前のテクもだけどよ。おかげで久しぶりにいいバトルが出来たよ。」

川「さつ、サンキュー。」

岩「まあでも気は抜くなよ。お前は首都高最速としてこれから首都高を攻めるんだ。その覚悟は出来てるよな？」

川「もちろんだぜ。」

岩「なら大丈夫だな。頑張ってくれよ。」

川「OK!!」

岩「さて・・・おじさん、あんたが『首都高を統べる覇者』だな・・・」

幸「よくお気づきだな。」

岩「まあ、俺が来た時になんていなくなっただのかは聞かないにしておくけど・・・いつかは貴方にバトルを申し込ませてもらう。」

幸「大丈夫だ。そんなの、お前みたいな奴だったらいつ来たっておかしくないからな。」

岩「有り難う。それじゃ、俺はそろそろ行くぜ。じゃあな。」

そうして岩崎は帰っていった。

川「・・・やつと体が漲ってきたぜ・・・明日からが楽しみだ。」

幸「そうか。頑張れよ。」

川「ああ!!」

幸「(首都高最速、か・・・名実共になんて言ったが・・・実はそうじゃないんだぜ・・・俺のことでもなく、な・・・まだ教えるのは早いかな。)」

次の日・・・

川「んああ・・・(なんだ・・・こんな朝っぱらから電話か・・・っていつてももう11時か！すっかり寝ちまったな・・・)」
ピッ

川「もしもし・・・」

文「どうも。迅帝撃破、おめでとう。いやあ、貴方ならやると思いましたよ。この記事さえ出回れば、もう一大ニュースよ。」

川「あつ、ああ・・・」

文「やっぱり迅帝は強かったでしょうね。実際本気で戦ってみてどうだったの？」

川「・・・ああ、今ちよつと寝起きモードなんで、とりあえずまたかけなおします・・・」

文「おつ、分かりました。絶対かけなおしてくださいよ？」
ピッ

川「（こりゃ一日大変かもな・・・）」

その後、目をパッチリ覚ました祐馬は、再び電話をかけなおし、軽く取材を受けたのである。また厚井にも電話をした。

そして夜には、文々。が出回った。

「つつ、ついに『シルバーナイトシャイン』が迅帝を倒しやがった・・・」

「マジかよ・・・これで首都高最速は『シルバーナイトシャイン』になったってことか。」

「だな。ほんとすげえぜ、まさかここまで登りつめるだなんてな。」

「でも、前みたいにな、迅帝倒した後って時に消えなきやいいけど・・・」

全国の走り屋がその勝利を絶賛した。

だがまだまだ祐馬のバトルは続く。

最速になったで終わりはしない。

首都高を更に限界まで攻め続け、無敵を目指す。

いや、迅帝を倒した以上、もはや祐馬にとって首都高に強敵はいないのだろうか？

それが幻でもない限り負けることなど無いのだろうか……。

伝説は語り継がれる

永遠に

歴史に刻まれたらもう

「あのS15シルビアか……ほお、『迅帝』の敗戦ねえ……なるほどな……こりゃあ、こつちも黙っちゃいられないかな。普通にこつちの世界に来る事はないのかねえ……絶対面白い事になりそうだけだな。」

END

復活、最終決戦（後書き）

こんな自己満足の小説を最後まで読んでくださり大変有り難うございました。

大して面白い部分とかは少なかったかと思いますが、それでもちゃんと読んでくれると嬉しいです。

何でこんな小説を書き始めたのかって言うと、以前見つけたネット小説「Legend of monster」というのを読んだのがきっかけなんですよね。

自分も首都高バトルをやっていた者だったし、更に東方のキャラが出ているのを見て、誰かに見せるわけではなくただ書くだけでも、と思つて書き始めました。

・・実を言うと、いつの間にか、その小説の主人公の設定が無意識のうちにかぶつちやっただんですよね・・・。

前から主人公は首都高を攻めていて無敵を誇り恐れられていた、そんな主人公の前に現れた迅帝は主人公を呆気なく倒していき・・・つて部分。

気づくのが遅すぎて修正する気も無くなってましたのでそのままにしました。パクったわけではないということだけ分かっていただければ幸いです。

因みにそちらの小説では、主人公を倒していったのは迅帝本人ではなく迅帝の弟子って設定らしいですけどね。

ただ、何故か26話で更新が止まってるんですよ・・・。一体どうしたんでしょう。

・・・そう思っていると、霊夢のランエボ3と魔理沙のスカイライン、これもまた被ってしまったものがあります。

my evolutionsというブログの主である方が公開してる「T O H O 峠の伝説」、こちらの霊夢もランエボに乗り、魔理

沙もスカイラインに乗っていました。

ただ、あちらの場合はエボ3ではなくエボ7、スカイラインではなくGT-R（ただしR32という点は一緒）でした。

これは全くその小説を知らないうちに設定していたので……。これもパクったわけではないです。

そうしたら今度は、サブタイトルの「Limit Battles」が題名になっている小説もあり……。なんでこんなパクってばっかの小説みたいになってるんでしょう……。

首都高バトルに関しては、0と01を所持しています。同じ関連として、レーシングバトル、街道バトル、同2、峠の伝説を持っています。

峠の伝説とレーシングバトル、01は完全クリアまで達しましたが、それ以外はまだまだともに攻略サイトとか見るような自分ではなかったので完全クリアはしてません。

東方に関しては、ゲームでは紅、妖、永、萃、花、風、緋、地、星、非、ダ、大戦争を所持しています。

ノーマルシューターで頑張ってますが、妖と永以外のエクストラをクリアしておらず、また地や格闘3種はノーマルを安定してクリアできない状態……。

そこから辺早く攻略せねば。

さてはて、一応完結とはなっていますし、最後にもENDと書いてはいますが、最後の某ランエボの台詞が示すフラグの通り、物語はまだ続きます。

次なる舞台は高速ではなく……。予想できますよね、峠各所です。そう、各所です。

色んな峠を攻めて行きますよ。ただ街道バトルのように関東から遠いところまで行ったりはしません。

街道という事もあって、東方キャラもかなり多く出てきます。

もしも次を読んでくださるのであれば、現在製作中ですので、しばらくお待ち下さい・・・って言っても、すぐに出来るわけではないので、そこから辺悪しからずお願いします。

流石に1年もかかりはしませんよ・・・いや、それ言ったらどんなにかけるつもりだよって話になっちゃいますね。すいません。

それでは最後にもう一度、小説を読んでくださり有り難うございました。

次回作をお待ちくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3674o/>

首都高～Limit Battles...

2010年11月14日02時31分発行